

---

# ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

レフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

### 【Nコード】

N2837Q

### 【作者名】

レフェル

### 【あらすじ】

僕とちっさい幼なじみと召喚獣のifストーリーです。本篇ではつぐみと深紅が登場して、他の作者さんの小説からオリキャラを貸してもらって進めて行きたいと思っています。なにとぞ、宜しく願います（土下座）

## 登場作品紹介

この小説は『僕とちっさい幼なじみと召喚獣』のifストーリーです。

いろんな作品のオリキャラを登場させます！

登場予定作品

作者の方では、『僕とちっさい幼なじみと召喚獣』から、雨宮つぐみと神埼深紅。

『僕とみい姉とFクラス』から姫路亮君と吉井真希ちゃんをだします。

リザクさんの作品

『バカとテストと召喚獣〜気まぐれ猫のスケッチブック』から、遠月優羽と雨咲蒼夜。

レインさんの作品

『バカと歌姫と召喚獣』から、桜木恋と七咲雫。

秋雨さんの作品

『バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ』から、久遠光一。

闇介さんの作品

『バカとテストとヤミ』から薄刃闇太。

つぐみの取り合い？みたいなことも起きるかもしれません。

そして、つぐみはよく振り回されることが多いです。

つぐみも少しは積極的になっていたり。

深紅と久遠はライバル設定です。

オリキャラが登場します！

他にもよそのクラスでいいので参加させて欲しい方は言ってくださいね？

優羽から友達の証としての物を大切に持って持っている。

## 登場キャラ紹介コーナー！改編

### 『雨宮つぐみ』

- ・容姿：黒髪のツインテールで鈴付きリボンをつけており、童顔で目が少しだけ垂れ目。
- ・性格：優しく仲間想いで健気に頑張るところもあり、親しみやすい。友達と明久を大事に思っている。
- ・身長にコンプレックスがあり、綺麗な人を見ると憧れをいだく。
- ・超能力があるけど、普段は使わないようにしてる。（詳しい詳細は僕とちっさいを参照）

- ・一人称はあたし。
- ・明久の幼なじみでお隣に住んでいる。
- ・趣味：料理と絵
- ・身長：138cm
- ・得意科目：数学と英語以外は普通
- ・苦手科目：数学と英語

### 『神埼深紅』

- ・容姿：水色のロングヘアで花の髪飾りをしていて、少し目がつり目がち。
- ・性格：おとぼけでミステリアスで、仲間想いな所がある。
- ・男の声と通常の声を使い分けることができる。
- ・一人称はわっち。
- ・身体能力が高くて情報とかも逐一ゲットしてる。
- ・素性が謎に近い。
- ・コードネームはクリームゾン
- ・身長：155cm

- ・得意科目：物理以外は普通
- ・苦手科目：物理？』

『姫路亮』

- ・容姿：黒髪のショートで前髪に赤色のメッシュがはいってる。けっこうカッコイイ。
- ・性格：基本真面目で苦勞性な所があるが、敵には冷酷。
- ・姫路瑞希の双子の弟。
- ・桜木恋に恋心を抱いている。
- ・桜木恋の幼なじみ。
- ・知り合いが多い。
- ・身長：177cm
- ・得意科目：保健体育以外
- ・苦手科目：保健体育』

『遠月優羽』

- ・容姿：翔子と同じような髪の長さだがポニーテール、顔は可愛いと言っより綺麗。
- ・黙っていれば男が寄って来るほどの美人。
- ・性格：極度のきまぐれ気分屋な性格、本能の赴くままに行動し自分がやりたいように行動する。
- ・趣味：スケッチ、昼寝、翔子との会話、雄二いじり、などなど
- ・特技：変装、料理、スケッチ、勉強。
- ・得意教科：保健体育以外全般
- ・苦手教科：保健体育
- ・作者：リザク様』

『雨咲蒼夜』

- ・容姿：短髪の黒髪の青年、中肉中背
- 特徴が無いのが特徴というぐらいの普通の顔立ち
- ・性格：基本的に落ち着いており静かな性格である。しかし騒がしいのは苦手な訳ではなく、むしろ好きな部類に入る。基本的に騒ぎには被害者側である。所謂そこら辺の落ち着いた今時の青年的な性格。
- ・得意教科：世界史、日本史、基本的に暗記科目を得意とする。
- ・苦手科目：数学、物理や化学など理系教科。
- ・作者：リザク様

#### 『桜木恋』

- ・容姿：黒くて長い髪、星形の髪飾りをしている。目は普通な感じ  
で色は赤。胸は普通ぐらいだがプロポーションは良い方。なぜか食  
べても太らないらしい。
- ・性格：冷静、おとなしい、つつこみ担当、友達思い、明久思い、  
少しS、黒面あり、弱ツンデレ  
(特殊条件で)甘えん坊、ドS
- ・得意教科：ほとんど、中でも現代社会は瑞希より上。
- ・苦手教科：特になし。
- ・作者：レイン様

#### 『七咲雫』

- ・容姿：黒髪のショートカット 少しでもだけつり目、胸は美波より少  
しあるくらい。
- ・性格：クール、S、真面目、冷静、責任感が強い
- ・得意教科：英語以外
- ・苦手教科：英語

・作者：レイン様

『久遠光一』

・容姿：黒髪のショートヘア。

・貧弱な体で体力が格段に劣る。

・性格：激派の名に恥じない程好戦的で、敵対する者に対してはとことん容赦しないが、基本的に自分に対して好意的な人間にはとことん優しい。

・身長は176cmで体重は41kg

・ライバル認定：深紅、蒼夜、闇太となっています。

・得意科目：物理、数学、英語。

・苦手科目：日本史、世界史、化学、古典。

・作者：秋雨様

『薄刃闇太』

・容姿：黒髪の短髪で黒色の瞳で標準的な体型。

・性格：クールに見えて実は初な所がある。工藤と土屋の自主規制な話には赤面すること多し。

・身長&体重：身長168cmと体重54kg

・得意科目：文系

・苦手科目：保健体育

・作者：今宵闇介様



**登場キャラ紹介コーナー！改編（後書き）**

こっちのオリキャラは増えます。

妄想大好きですので！

優羽と蒼夜のお相手！

間太は後で考えるかな。

## プロローグ

ジリリンという音が鳴ると目を覚まして目覚まし時計を止める。

「朝…」

目をこすりながら小柄な体を起こしてベッドから起きると、制服に着替えて洗面所に行き、

鏡をみながら髪を櫛で綺麗にしてから鈴付きリボンをつけて顔を洗い、タオルで顔を拭く。

次に洗濯物を干して、二人分の朝食の準備をする。

「さて、アキ君を起こしに行かないと！」

咳いて学生鞆を持って玄関に向かうとなぜか喧嘩してる声が聞こえる。

いや、喧嘩といえるかは不明だ。

「ま、またなの？」

今日はないと思っていたのにと深く落ち込んでいるつぐみ。

意と決して、玄関を開けると・・・

黒くて長い髪で星型の髪飾りをしている女性と黒髪で霧島と同じ長さでポニーテールで綺麗系な女性が居た。

「恋ちゃんと優羽ちゃん。近所迷惑になるから、静かにしよつよ！」

「あ、つぐみちゃん！」

「あ、つぐみん」

つぐみが声をかけると二人はいつせいに振り向いてつぐみは抱きしめられた。

「ちょっと、恋ちゃん。つぐみんは私が抱きしめるんだよ？だから、離れてよ」

「そんなことさせません。私が抱きしめるんです！そっちが離れてください」

「ちょ、ちょっと苦しいよー！！」

朝から振り回されるつぐみに、全然気にしていない優羽と恋が目撃されことはもう日常茶飯事なくらいにあったとか。

だから、近所の人はもう慣れていたりする。

この後つぐみがぐったりとなるまで続くかと思っただが、明久が慌てて来て優羽と恋をなんとか止めた。

つぐみが正気に戻ると朝食を急いで食べて、学校に向かった。

「あ、早く学校に行かないと！！」

「そうですね、急ぎましょー！！」

「ゆっくりでいいじゃん」

「ダメだよ、急がないと！」

明久が時計を見て焦りながら言うと恋は頷いて言うが優羽はしれっ

と言い、つぐみが慌てて言い、背中を押す。

「つぐみん可愛い〜」

「わぶっ!?!」

「ちょっと！遠月さん、なんて羨まし……じゃなくて。今は急がないとダメですよ!」

「今、本音でかかってなかった!?!」

再びつぐみを優羽は抱きしめていたら、恋ちゃんが優羽から離そうと近寄って言い、明久は思わずツッコミをいれていた。

しばらくして学園の校門についた。

その校門には西村先生が立っていた。あだ名は鉄人と生徒から呼ばれている。

「遅刻だぞ。桜木に吉井に雨宮に遠月」

「す、すいません!西村先生」

「に、西村先生、遅刻してすみません。後、おはようございます」

「鉄……じゃなくて、西村先生。遅刻してすみません」

「西村先生、おはよ〜」

西村先生につぐみ、恋、明久、優羽という順番に挨拶する。同情めいた表情をしてつぐみに言う西村先生。

「雨宮：毎日大変だな」

「あ、あはは（汗）」

つぐみは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まあ、いい。ほら、お前等の新しいクラスがこれに書かれている」

西村先生がそういうと箱から4つの封筒を取り出して渡してきた。

「まったく、お前だけだぞ。テスト中にデッサンなぞしていたのは、絵の出来は素晴らしかったがな」

「いいじゃん、Fクラス。ガリ勉Aクラスより楽しそうだし」

優羽ちゃんがそう言うのと西村先生はため息をついていた。

優羽の紙には『遠月優羽：Fクラス』と書かれていた。

「桜木は試験を途中で退席しなければ、Aクラスにいけたのに」

「あはは、仕方ないですよ。体調の管理をちゃんとしてなかったのが悪いんですから」

「そうか、雨宮。お前がしたことは教師としては認めることはできませんが、個人としてはいいことをしたと思うぞ」

「ありがとうございます！」

恋は苦笑いしてつぐみは笑顔でお辞儀して言う。  
この学園の振り分け試験で途中退席すると例外なく0点になるのだ。  
恋とつぐみは紙を見ると『桜木恋……Fクラス』と『兩宮つぐみ……  
Fクラス』書かれてあった。

「え！？ つぐみもなの！？」

「うん、恋ちゃんの体調が悪そうだったから」

「恋ちゃん、ずるい〜！！私もつぐみんに付き添ってほしかった！」

「試験場所が違うんですから、仕方ないですよ」

明久が驚くとつぐみは詳細を語る。

優羽は羨ましそうに言う。恋は笑顔で答えていた。

西村先生はその様子を見てFクラスの先行きが不安になっていたら  
しい。

「それより、アキ君はどここのクラスなの？」

「え、あーうん。ごめんね、つぐみ……」

「…もしかして」

「あはは、僕も途中退席しちゃって」

「えー！！！！？」

つぐみは明久が持つてる紙を見ると

『吉井明久……Fクラス』

となっていた。

こうして、つぐみ達の最低クラスでの生活が幕をあけた。

## プロローグ（後書き）

つ、次はあのキャラを登場させます!!

感想と評価をお待ちしております



## バカテスト 第一問

### 問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウム代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希と桜木恋の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点  
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

『正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんと桜木さんは引っかけかりませんでしたね。』

16

久遠光一の答え

『問題点……ガスコンロの火力が低すぎる事、火炎放射機でも使用するべき』

合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント

『そんな事したらこの問題以前の問題です。  
そして合金の例の方は“ジェラルミン”ではなく“ジュラルミン”です。』

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

『そこは問題じゃありません』

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強い』

教師のコメント

『すごく強いと言われても』

雨宮つぐみの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点』

合金の例……鉄』

教師のコメント

『鉄は間違いです、問題点は合っていたのに残念です』

遠月　優羽の答え

『問題点……調理するのが面倒だったから』

合金の例……ガンダリウム合金』

教師のコメント

『問題を全否定しないでください。あとあっている問題をわざと消して間違えないでください』

## バカテスト 第一問（後書き）

バカテストを書いてみました！

その他作者の人に怒られないか不安です（汗）

## 第1問Fクラスの教室で

靴箱に到着すると知り合いがそこにいた。

「あ、久遠君。おはよう！」

「久遠君、おはよう〜」

「久遠君、おはようございます」

「ん？ 明久につぐみに遠月と桜木か。よう」

「おはよう、光一。どうだった？」

明久の悪友でつぐみとは明久を大切にしている同盟の一人となっている。

お互いが明久を大切にしているからでもある。

西村先生に目をつけられてはいるが、明久と同様な扱いとなっていたりする。

明久の質問に苦笑いしてジェスチャーして答える。

「Fだった」

「じゃあ、僕達と同じだね」

「ははっ、まあ仲良くやろうや」

「久遠君と一緒にか。また、アキ君を支えようね？」

「そうだな……ただ、聞いていいか？」

「何かな？」

「どうして、遠月に抱きしめられてんだ？」

「……これには深い事情があって」

苦笑いしながらつぐみは光一の質問に答える。

「あ、またですか！つぐみちゃんが困ってるじゃないですか！」

「だって、つぐみん可愛いんだもん」

「いつもの事なんだな、明久」

「うん、もう日常茶飯事ってくらいに」

明久はため息をはいてどう止めようかと悩んでいた。

「そ、それより。教室に行こう？」

「あ、忘れてたよ」

「そうですね！」

「まさに鶴の一言だな」

「確かに」

つぐみの一言で正気に戻ると優羽と恋を見て光一は言うつと明久は頷いた。

そんなこんなでAクラスの教室前にきたらつぐみ達は驚愕した。

「うわ〜……大きい教室」

「こんなに大きい教室あったんだね」

「凄い教室」

「広いね〜」

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあるつかという広さを持つ教室だった。

その教壇に立つにはクールで知的な大人の女性の高橋洋子先生が居た。

黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイには高橋先生の名前が表示されていた。

「学年主任の高橋先生か、知的で大人の雰囲気か素敵だな〜。」

低い身長に童顔な自分がコンプレックスなので知的美人には憧れを抱く。

その一方で明久はAクラスの設備に目移りをしていた。

「うわっ！席広っ！エアコンにパソコンに、あ！冷蔵庫まであんの！?」

「システムデスクにリクライニングシート…あれじゃ、教室というよりホテルだな」

この設備には光一も苦笑いを浮かべるしかない。

「では、はじめにクラスを代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような白い肌を持つ少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

「……霧島翔子です。よろしくお願いします」

先ほどと同じようにプラズマディスプレイに大きく名前が表示された。

「綺麗な人……」

「つぐみ？」

「つぐみん……」

「……つぐみちゃん」

つぐみの呟きに明久と光一と恋と優羽は聞こえていたのかつぐみを見る、するとつぐみは笑顔で振り向いて

「さて、そろそろ行くっ？」

「あ、うん」

「行くか」

「そうですね」

「つぐみんは可愛いから、霧ちゃんにだって負けてないのに」

明久の手をひっぱって旧校舎にあるFクラスに向かう。  
その後を光一と恋と優羽が続く。

「な、なんというか」

「うん…… Aクラスとは別の意味で凄いね」

「予想ど通りの教室だね」

「予想していたんですか？」

「この教室を見ただけで、もう嫌気がさしてきた」

場面変わってFクラス前で明久もつぐみも呆然と佇んでいた。  
同じ旧校舎にあるEクラスと比べてもこちらは酷い。

2年F組と書かれたプレートがボロボロの木の板であることから推測すると部屋の中はさぞ酷いだろう。

「設備格差にしては酷い気がするよ」



そう呟きながら、つぐみは教室の戸を開ける。

「遅いぞ、ウジ虫やる…」

教壇に立つ野性味たっぷりの顔の少年はつぐみに気づいて固まった。

ドサツ、つぐみは学生鞆を落としてしまう。

「ふえっ…ウジ虫…じゃ、ないもん」

みるみるうちに目に涙が溜まり、涙目になるとポロポロと頬とつたつてこぼれおちる。

「す、すまん！明久だと思って勘違いを『総員ねらえ〜！！』うおっ！？」

「坂本君、オハナシしましょうか」

「雄ちゃん、つぐみんを傷つけるなんて酷いよ〜？」

光一の号令で雄二に向けてFクラスに大半が上履きを構える。そして、恋と優羽がゆらりと雄二に近寄っていた。

「お、お前ら！！落ち着けて…ぎゃあああ！！！！」

「黙れ！こんな可愛い子を怒鳴りつけるなど」

「言語道断だ！」

「幼女最高!!」

「ロリっ娘最高!!」

「ロリっ娘は人類の宝だ!!」

「成敗です!!」

「つぐみんの敵!!」

清々しいほどの連携ぶりだ。

つぐみは死んでませんよ、優羽さん（苦笑）

「あれ、つぐみ。どうしたの？」

「う、ウジ虫って……言われて」

「あ、明久か！助ける！」

「雄二、くたばれええ!!」

「お前もかああ!!」

数分後、雄二が謝るということで、みんなは矛を収めた。

「雨宮、悪かった。さっきのは雨宮の後ろにいるバカに言おうとしていたんだ。」

だから、雨宮に対して言ったわけじゃない」

優羽の幼なじみで明久と光一を介して知り合った雄二が謝っていた。

「まったく、雄二ももう少し考えてからいいなよ」

「そうだな。だから、お山の大将きどりのゴリラ野郎と言われるんだ」

「バカとモヤシに言われたくないな。ウジ虫野郎」

「なんだと!」

「んだと!」

明久が怒り、光一が懐からエアガンを取り出そうとすると

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

そんな3人の後ろから覇気のない声が聞こえる。

振り向くとそこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえないおっさんがいた。

「それと、席についてもらえますか? H Rをはじめますので」

どうやら担任教師が到着したようだ。

明久も雄二もつぐみと優羽と恋と光一と男子生徒もそれぞれの席に座る。

「大丈夫、つぐみ?」

「ぐすつ……うん、大丈夫だよ、アキ君。」

ニコツと笑って言うつつぐみは改めて周りを見る。

「良かった。それにしても凄い教室だね」

「凄いというより、酷い教室だよね」

ホッと安心した明久も周りを見て言うつつぐみは周りを見ながら答える。

「畳敷きに卓袱台に座布団。畳はカビ臭いし……あ、蜘蛛の巣だ。明日から、カビキラーとファブリーズでも持ってこようかな」

そつつぐみが言うてるうちに先生は教壇に立ち、自己紹介をする。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生はお世辞にも綺麗とは言えない黒板に名前を書こうとして、やめた

「あれ、なんで黒板に書かないのかな？」

「ああ、それか。俺が教壇に立った時にみたら、チョークのくずしかなかった」

つつぐみが不思議そうにしていると雄二が答えた。その状態に苦笑いをこぼす、明久とつつぐみ。

「つぐみんかわーいーいー！」

「ちょっと、独り占めはダメです！」

「たーすーけーてー！」

「飽きないな、こいつ等」

「うん、てか。つぐみがまた挟まれてるよ」

「優羽は可愛い物に目がないからな」

つぐみを抱きしめると優羽とそれを止める恋に助けて欲しそうなつぐみの様子を光一と明久と雄二は眺めていた。

**第1問Fクラスの教室で（後書き）**

感想と評価をお待ちしております！

つぐみは光一の影響で少しは積極的になっているかと思えます。

## バカテスト 第二問

### 問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

『正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。』

久遠光一の答え

- 『(1) 雄二を木から撃ち落とす
- (2) 泣きつ面にマシンガン』

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面に雄二』

教師のコメント

『君たちは坂本君になにか恨みでもあるのですか』

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

『シユールな光景ですね』

桜木恋の答え

『(1) 猿も木から落ちる』

『(2) 弱り目に祟り目』

教師のコメント

『正解です。』

遠月優羽の答え

『(1) 雄ちゃんの川流れ』

教師のコメント

『貴女もですか』

雨宮つぐみ

『(1) 河童の川流れ』

『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

『正解です』



**第2問Fクラスで自己紹介(前書き)**

ヒヨウガ様、レイン様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！

## 第2問Fクラスで自己紹介

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば、申し出てください」

不備という言葉に、全員がありまくりと言わんばかりに名乗り出た。と言うより、どこが完備されてるのかむしろ聞きたいと言わんばかりに。

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

一つ一つの不備の声に福原先生は答えて行くが、完全な解決策とはなっていない。

これが最低クラスなんだね。

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂う。

きつと床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生から指名を受け、廊下側の生徒の一人が立ちあがり名前を告げる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年1年、よろしく頼むぞい」

彼は木下君。久遠君経由で知り合ったんだけど、女の人を間違えてしまうほど、似てるんだよね。

「……土屋康太」

次の人も知り合いでアキ君経由で知り合った忍者みたいな人。異名はムツリー二というらしい。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手です」

また、綺麗な女性だと思いながら、つぐみは見ていたが次の言葉にムカツときた。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

チリンッ

つぐみが動くとき鈴が鳴り、立ちあがって美波を睨んだ。

「な、何？」

「そういう趣味はよくないと思うの。」

「なんで、そんなこと言われなさいいけないのよ」

「いいから、訂正してよ！アキ君に失礼でしょ！？」

「喧嘩はそこまで。島田さん、席についてください」

もの凄く不機嫌な彼女にそう言われた美波はムツとなるが、福原先生が止める

「…はい」

「…すみませんでした」

つぐみも座りなおすと美波も座った。

どこかギスギスした空気になったが、明久には分からない為つぐみに聞いた。

「つぐみ、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

明久に聞かれたつぐみは微笑んで言う。

過保護だけと同じように明久を大切にしている光一にとっては気持ちかわかるような気がした。

「私は桜木恋といます。趣味は歌を歌うことと読書をする事です。よろしくお願ひします。」

「はいっ！質問です！」

一人の男子生徒が手を上げて恋ちゃんを見てる。理由は分かるけど。

「なんででしょうか？」

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な質問ですが無理もないよ。みいちゃんと同様に成績いいから、Aクラスだろうと思ったのに、ここにいるからね。

「熱で倒れそうになってしまいましたので……」

恋ちゃんは普通に答えてる。

その言葉を聴き、クラスの人々は『ああ、なるほど』と頷いていた。

「遠月優羽です。つぐみんに手を出す人は蹴散らすからそのもつもりで」

「遠月さんなら、いいんですか!？」

「禁則事項だよ」

優羽ちゃんはクラスメイトの質問にのらりくらりとかわしてるよ。

この後なんも質問もなく終わると優羽ちゃんは座ってあたしを抱っこしてきた。

「……です。よろしく」

ぼんやりと考え事していると、あたしの前でいる人が終わっていた。次はあたしの番だね。

「雨宮つぐみです。部活は美術部です。趣味は料理で特技は声マネです」

優羽ちゃんから離れて立ち上がって自己紹介する。

あたしがペコリとお辞儀するが勢いあまって卓袱台に顔をぶつけてしまった。

あうっ、痛いよ。

あれ？教室内が鎮まってる。優羽ちゃんと恋ちゃんの反応もなんか変だね？

「っ、つぐみ？」

「ら、らいらりよつぐみ」

『ぐはあっ！！』

涙目でなんとか痛みに耐えながらみんなを明久を見るとFクラスの男子数名が鼻血の海に沈んだ。

「…明久」

「うん。あれは慣れててもキツイよ」

雄二と明久もクリーンヒットしたみたいだが、なんとか耐えてる。前かがみになつてる人が多いのはなんでかな？

その後、つぐみが座ると久遠君が立ちあがる。

「久遠光一。サバイバルゲーム愛好会の一員で、その木下秀吉とは幼馴染」

「まあそれなりに仲良くさせてもらっておるぞい。姉上共々な」

『木下優子とだとお！！？』

木下優子と言えば、秀吉と瓜二つの双子であり、現在Aクラスに所属する優等生。

ほぼ全員が久遠君に対してカッターを構えるが、久遠君がポストンバグからマシンガン（エアガン）を取り出したよ。

「ちなみに銃が好きで、常日頃から持ち歩いていないと気が……調子が狂うほど。」

当然腕にも少々自信あります」

「とんでもない事をサラリと言うでない」

「ちなみに秀吉とは親友ではありませんが、こいつの姉木下優子とは他人以上知り合い未満程度ですので、誤解のない様お願いします」

エアガンだとわかっていた物の、流石に銃を見て構えた全員が萎縮してるよ

久遠君ならやりかねないと思ってるのかな？失礼すぎるよ

「まさかと思うけど、それ本物じゃないよね？」

「エアガンにきまつてるだろ、ここ日本だぞ？ それより明久、次はお前の番だぞ？」

「あ、そうだった。」

次はアキ君の番となり、軽く咳ばらいをした。  
何をするのかな？

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアーリーーン!!』

野太い声の大合唱が響く。

これはキツイ。なにがって？色んな意味で。

当然アキ君はめちやくちや笑顔をひきつらせ、混ざらなかつた木下君と久遠君も苦笑いしてる。

「……………失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

「なんつー不快な大合唱だ」

「確かに、当事者でないワシも鳥肌が立ったぞい」

気分悪そうに明久は座るとあたしはアキ君を見た。

久遠君と木下君が何か話していたけど、今はアキ君を心配しないと！



「なにやってるの」

「いや、これくらいのノリがないと盛り上がらないかと思って」

「いらなと思うよ。そういうのも」

明久の言葉に苦笑いしながらつぐみは言う。  
次の人が立ちあがる。

「神埼深紅や。趣味は罨とか暗躍や機械いじりや。特技はなんでもできるで」

ニカツと笑顔で神埼さんは笑って言う。

水色のロングヘアーで花の髪飾りが可愛いな！。  
スタイルもいいし、身長だって……羨ましいよ。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

「あの、遅れてすみません」

『えっ？』

誰からともなく、教室全体が豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。クラス内が騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度良いですね。」

みなさんに自己紹介して貰っているところなので、姫路さん、永久さん。あなた達もお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願ひします……」

「はい、永久渚です。趣味は料理です。よろしくお願ひします  
そこにいる久遠光一と木下秀吉とは幼なじみです」

つぐみほど小柄ではないがその体をちぢこませて声を上げる瑞希ち  
ゃん。

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかかそうな髪は保護役をか  
きたてるようだ。

もう一人は瑞希ちゃんとあんまり変わらない感じの子で髪の色は黒  
髪のサイドポニーで茶色の瞳で美人さんでした。

ふと、ぼんやりしていると久遠君と木下君が驚いていました。

「おま、いつ」

「そうじゃ！連絡などなかったぞ！」

「おとといかな。色々準備で忙しくて連絡できなかつたんだよ」

ニツコリと微笑んで永久さんは笑って答えている。

幼なじみにあえて嬉しいんだろうね。

「はい！質問です！」

「あ、は、はい！なんですか？」

「何かな？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。

その小動物的な仕草が可愛かったりするらしい。  
というか恋ちゃんと同じように質問してるよ。

「なんでここにいるんですか？」

これまた聞きようによつては失礼決まわりない質問が浴びせられる。  
でも、これはクラス全員が思っている疑問だ。  
ここも恋ちゃんと同じだね

可憐な彼女の容姿は一目を引くし、なにより彼女の学力は入学して  
最初のテストで学年2位を記録し、その上位一桁以内に常に名前を  
残しているほどだった。

だから、誰もが彼女はAクラスにいるに違いないと思っていた。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながら瑞希ちゃんは答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「実はこっちも熱を出して」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。  
試験途中での体積は0点扱いとなる。  
結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあつた弟が心配で集中できなくて』

『ああ、お前には妄想の弟がいたんだつたな』

『つぐみちゃんが寝かせてくれなくて』

「あたし行ってないよ!!?」

『異端者だ!』

『嘘です! すんません!』

これは想像以上にバカだらけだ。

「で、では、一年間よろしく願いますっ!」

「一年間よろしく願います」

そんな中逃げるようにして瑞希ちゃんはアキ君と坂本君の隣に空いてる卓袱台に着く。

永久さんは久遠君の隣に座ってるよ。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す瑞希。

「よう姫路、体調は大丈夫か?」

「あつ、久遠君に……よ、吉井君につぐみちゃんに恋ちゃん!?」

よほど緊張して周りが見えていなかったのだろう。今気付いた様子で言う

「姫路。明久が不細工ですまん」

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そうだよ！アキくんはカツコイイんだからね！..」

姫路のセリフに便乗するようにキツパリと言う。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔しているかもしれないな。

俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え？ それは誰……」

『『それって誰ですかっ!?!』』

「確か、久保……」

二人が明久のセリフをさえぎって聞くと坂本が話だす。

「……………利光だったかな」

久保利光 (性別ノオス)

「……………」

明久は黙ってしまふ。

「明久……うつつうしいからさめざめと声を殺して泣くな。」

「もう僕、お嫁にいけない!!!」

「冗談だ……半分はな」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

坂本は明久の質問を無視して姫路に問いかける。

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「良かった。アキくんに聞いて心配したんだよ？」

「心配かけてすみません」

「でも、誰が連れて行ってくれたの？」

二人で悩んでいると、明久が声を張り上げる。

「ねえっ!!! のこりの半分はっ!!!？」

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

さすがに福原教諭に注意されてしまった。四人が居住まいを正して謝ろうとした瞬間。

バキィツ バラバラバラ……

教卓が音を立てて崩れ落ちた。寿命だったのかもしれない。

「……えーと、替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭は気まずそうにそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

苦笑いする、瑞希を見てから、明久は坂本に声をかける。

「……雄二、ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

「……じゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

立ちあがって廊下に明久と坂本は出る。その時一瞬だけ、瑞希ちゃんと目があつた気がする。

それにしても、あたしはいつまで優羽ちゃんに抱きしめられてたらいいのかな？

とりあえずは……。

「……どうしたの？」

「あ、つぐみちゃん。吉井君が坂本君と廊下に出たので気になって」  
教卓の残骸を片付けながら廊下を見る瑞希に話かける。秀吉と須川君も手伝って来ています。

「アキくんと坂本君が？なんだろう」

明久が真剣な時は大抵だれかが絡んでいることが多い。予想を立てるとしたら、瑞希の為だろう。

お人好しな彼らしいことだ。

しばらくするとアキ君と坂本君と久遠君が戻ってきたのと同時に福原先生が戻ってきた。

「えー、須川亮です。趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原教諭が雄二に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。

その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ」

そこで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いとやり方だ。



「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問

題意識を抱いている」

雄二は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声が  
あがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要  
求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が  
大きすぎる！』

『そつだそつだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは俺の代表としての提  
案なんだが」

自信たっぷり、野生味溢れる笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
う」

彼、坂本雄二は戦争の引き金を引いたのであった。

## 第2問Fクラスで自己紹介（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

## 新キャラ 改

名前)

とわなきさ

永久渚

年齢)

光一と同じ

性別)

女

容姿)

黒髪のサイドポニーで茶色の瞳で美人。

少しだけ幼い感じ。

性格)

世話焼きで明るくて元気。

得意科目)

数学と英語。

不得意科目)

保健体育

成績)

Cクラス。

備考)

つぐみとは気が合う仲で光一と秀吉と優子の世話を焼く。

光一達とは幼なじみで小学生の頃引越してから、高校生になって戻ってきた。

銃やエアガンやモデルガンに関しては結構知識があり、サバイバル同好会に入ろうかともくろんでいたりもする。

素直じゃない優子に対してヤキモキしてる反面安心している。

光一と秀吉を大切に思っており、手を出す輩には黒いオーラーを放つとか。

## バカテスト 第三問

### 【第三問】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
」

姫路瑞希 & 桜木恋 & 久遠光一 & 永久渚の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

「正解です。4人共きちんと勉強していますね。」

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

「訳せたのはThisだけですか。」

吉井明久の答え

「 \* x 」

教師のコメント

「できれば地球上の言語で。」

遠月優羽の答え

『これは私の祖母の本棚です』

教師のコメント

『わざと書いてませんか？』

雨宮つぐみ&神埼深紅の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

『正解です』

**第3問 使者と屋上でミーティング（前書き）**

レイン様、ヒョウガ様、エミ様、秋雨様

感想ありがとうございます



### 第3問 使者と屋上でミーティング

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんと桜木さんと遠月さんと神埼の姉御と永久さんがいれば何もいらぬ』

『雨宮を抱きしめたい』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないでおう。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことができるのだ。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦つことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。  
その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違う。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からない。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。  
だが、雄二はそれを否定してみせる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本君はそう宣言した。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『そんなことより、雨宮を愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきた。

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

雄二が自信満々に笑って言う。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす坂本君。優羽は楽しそうに笑い、恋と雫は黙っている。

「おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定する。

瑞希が慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあのある有名な、寡黙なる性識者だ」  
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

『ムツツリーニ……………だと？』

『ヤツがそつだというのか？バカな……………』

『だが見る。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そつとしてい  
るぞ……………』

『ああ……まっただくだな。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「????？」

ただひとり、瑞希だけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「えっ！ わ、私がですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希。それを見て頷く雄二。

確かに彼女ほど頼りになる人材はいないだろう。

「それに、姫路に次ぐ実力の持ち主で、あの『歌姫』とも呼ばれている桜木だっている」

「ふえっ？ 私もですか？」

瑞希ちゃんに続いて恋ちゃんの実力も半端ないんだよ。恋ちゃんもかなり頼りになるし。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんとあの『歌姫』の桜木さんがいるんだっ』

『たしかに彼女達ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女達がいれば、ほかに何もいらぬいな』

『雨宮たん、かわゆす!!』

さきほどから、瑞希ちゃん達やあたしにラブコールを送る輩が増えているのはなんでかな。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが3人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室内で満ちている。

「違う、4人だ。紹介しよう、遠月優羽だ。皆、知っての通り気まぐれ猫の呼び名だ」

雄二の発言に場がどんどん盛り上がっているのがわかる。

『気まぐれ猫ってたしか授業を3回しか受けてないのに進級できたって言う』

『確か、観察処分者になりかかっていたこともあるとか!』

ざわざわと優羽ちゃんのことでも盛り上がってる。

『このメンツならできるんじゃないか!?!』

テンションが上がり上がりしている所で坂本が一気に下がるようなことを

「それに、久遠光一と吉井明久、このコンビが居るんだ」

なんでここで悲鳴があがるのかな?

久遠君に失礼だよ。

『久遠って……あの学園の過激派筆頭って話の!?!』

『ああ。マフィアからスカウトが来てるって話だろ?』

『けど、吉井明久って誰だ? 久遠とコンビってことは、相当な悪人ってことじゃないか?』

むむっ！それってどういう意味なのかな？

「ちよつと雄二！　どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？」

しかもなんか、変な設定までつけられてるよ！！？」

「久遠の事は知っているみたいだから良いとして、明久を知らないなら教えてやる。」

こいつは“観察処分者”だ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違っよっ！ちよつと、おちゃめな16歳につけられる愛称で」

「そうだよ！アキくんはおちゃめでおっちょこちょいだけど、実は優しいし頼もしいんだから！」

あたしも慌ててフォローするんだけど、意味不明になってきたよ。

「そうだ。バカの代名詞であり、久遠の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちよつどいい」

「肯定するな、バカ雄二！！」

「酷いよ！坂本くん！自分からふっっておいてその言い方はどうかと思っよー！」

「まあ、落ち着け、つぐみに明久。これから挽回していけばいいだろっ？」

久遠君に宥められてあたしとアキ君は一先ず席に座る。

「明久以外にもこの《観察処分者》がいる」

「わっちのことやね？」

「ああ、宜しく頼むぞ。神崎深紅<sup>かんざきみく</sup>」

にんまりと笑った女性に雄二は答える。

「まあ、教師立ち会い下でしか召喚できないし、フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が被るんだがな」

『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しむってことか』

『おいおい、それじゃあ、おいそれと召喚できないヤツが二人いるってことじゃないか』

「あ、ちなみに神崎に課された 観察処分者 の肩書きは、バカの代名詞という意味ではない」

雄二はみんなに説明しているが、肝心の深紅ちゃんはどうでもよさそうにしている。

深紅ちゃんにはあらゆる面で観察しないとイケないと思われてアキ君と同じ称号を持つてるの。

「あ、明久はザコだから、いてもいなくても関係ないがな」

「どこまで追い打ちかけるのっ?!」



「やっぱり、酷いよ。坂本君！」

「とにかく。まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「人の話を聞け!!」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう?」

『当たり前だ!!』

「ならばペンを執れ! 出陣の支度を始めるぞ!」

『おおーっ!!』

「お、おー……」

周りに流されながら瑞希は腕を上げる。  
なんか不安な気分になってきたよ。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ!」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ  
て行ってみる」

「本当に?」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「ゴリラやる」

「ああ、ゴリラだ」

「神崎にモヤシ……てめー」

「ま、まあまあ」

怒る坂本君を恋ちゃんが宥めていた。

「と、とにかく。大丈夫だ、俺を信じる。俺は友人を騙すようなマネはしない」

「じゃあ、あたしが行くね！」

「ちょっと、待て！！お前は行ったらダメだ！」

「どうして？安全なら、あたしが行っても問題ないよね？」

「そ、それは」

「もしかして、雄二。僕を騙してるな！！」

明久はそう言うと雄二に掴みかかり大騒動になったのはいうまでもない。

「なら、わっちが行くわ」

「な！？神埼が行ったら制圧しそうなんだが」

「そんなことせーひんよ。世の中面白い方がええやろ」

「大丈夫か？荒事だったら得意分野の俺も行ってやってもいいぞ？面白そうだし」

「大丈夫やて、でも…一緒に行こうかえ。楽しそうやし」

ニツコリと笑って深紅が言うと光一と一緒にさっさとDクラスに向かった。

隣の教室にて断末魔が聞こえたのは気のせいだと思いたいFクラスのメンバーだった。

「雨宮、あの時はごめんね」

「島田さん。あたしもごめんね」

「ううん、ウチも悪いしね。これからはウチ、素直になってみる」

「うん！頑張つてね」

いつのまにか来ていた美波につぐみはお互いの非を認めて笑顔で会話を話した。

これにて一件落着かな？

数分後

「ただいま、戻りましたえ」

「無傷かよ」

「なんや、わっち見たら。姉御言われてしもつて、宣戦布告もして  
いたんやけど。なんもされんかったえ」

『さすが、姉御！』

これでも皆のテンションあがるんだね。

「ほら、お前等作戦会議するから、屋上に行くぞ」

「あ、うん！行こう、アキ君、久遠君、優羽ちゃんに恋ちゃん」

「そうだな」

「そうだね」

「うん」

「そうですね」

「わっちらも行くえ」

皆でぞろぞろと屋上に向かった。

あ、お弁当も持参しているよ！

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。

雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希のスカートに注視するムッツリー

二以外のメンバーは目を細める。

「神埼、いつ頃にしたんだ？」

「今日の午後の開戦予定やで」

「なら、先にご飯だね」

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久」

「わかってるよ」

「アキくんのお弁当はちゃんとあるよ」

ニツコリ笑って笑顔で言うとムツツリー二が明久を妬ましそうに見る。

「妬ましい……」

「なるほど。今までの弁当は、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部じゃないよ。僕も作ってるし」

「ほう、ということは明久もお弁当は作れるということじゃな」

秀吉は明久を見て言う。明久にゲームはあまり買わせないようにしている為、二人で日程を決めて弁当と食事当番を決めているのだ。

「優羽はサンドイッチなんやね」

「うん」

「俺はカロリーメイトだな」

「カロリーは取れるようやけど、わっちの分食べるえ？」

「わたしもお弁当を作りたいのですが、許可をもらってないので作れないんです」

「え？そうなの？」

「当然だよ。料理に薬品をいれるんだよ？」

「マジ？」

「うん、一度だけ、姫路さんのお弁当食べたら、病院に入院してたんだ」

「それから、瑞希ちゃんにはちゃんとしたお弁当が作れるまでは禁止したんだよ」

あたしはため息を吐きながら言うと雄二と秀吉とムツツリー二と美波は青ざめていた。

恋ちゃんもその被害に合ってるから、なんとかしてるみたいだね。

優羽ちゃんはスケッチ中かな？

「ということはまた練習するんだよね」

「うん、まだまだ、だからね。」

「ウチも参加していい？」

「どうぞです」

「じゃあ、私も」

「私も作る〜」

「じゃあ、私も」

「わっちも〜」

美波ちゃんと瑞希ちゃんと優羽ちゃんと恋ちゃんとあたしと永久さんと神崎さんも参加して料理教室になった。

「明日が楽しみだね」

「うむ、そうじゃのう」

「明日はごちそうだな」

男性陣も嬉しそうに笑っている。

「それじゃ雑談はそこまでにして、そろそろ本題に入らないか雄二」

「ん？ ああ、そうだな」

「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

まず真つ先に、秀吉が疑念をぶつけた。それもそのはず、段階を踏んでいくならEクラスが妥当であり、目的はA。

「簡単だ。姫路と桜木と優羽に問題がない今、Eなら正攻法でも勝てるが、Dクラスは難しい。」

それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

「成程。つまりこれは、最初のステップってなのかな？」

「ああ、ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「まあ、ぼちぼち行くで」

「……………(グッ)」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

「うーん、雄ちゃん、モデル件をしてくれるなら。参加するよ」



そう皆がいい、士気が上がる。

「それじゃやるか、明久」

「うん！ 僕達コンビの力、見せてやるう！」

「代表として、頼りにさせてもらうぞ。光一だけ！」

「ひどい！！」

「坂本君酷すぎる！」

Fクラス VS Dクラスの戦いが幕を開けた。

## バカテスト 第四問

問・以下の問いに答えなさい。

(1)  $4 \sin \theta + 3 \cos \theta = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $\theta$  の値を1つ答えなさい

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $\theta$  の中から選びなさい

?  $\sin A + \cos B$

?  $\sin A - \cos B$

?  $\sin A \cos B$

?  $\sin A \cos B - \cos A \sin B$

姫路瑞希と神埼深紅と遠月優羽の答え

『(1)  $\theta = \frac{\pi}{6}$ 』

『(2) ?』

教師のコメント」

『そうですね。角度を  $\theta$  °』ではなく』  
『で書いてありますし、完璧です』

遠月さんはいつもこうやって真面目に書いてくれれば良かったのに』

土屋康太の答え

『(1)  $\theta = \frac{\pi}{3}$ 』

教師のコメント

『およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません』

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

『先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです』

久遠光一の答え

『(1)  $X \parallel 30^\circ$ 』

教師のコメント

『惜しいですが、ニアミスです。』

象限における角度は『 $^\circ$ 』ではなく『 $^\circ$ 』で書いてください。』

桜木恋の答え

『(1)  $X \parallel$  たぶん3』

教師のコメント

『およそやたぶんをつければいいということではありません。』

雨宮つぐみの答え

『(1)  $\parallel$  / 6』

『(2)  $^\circ$ ?』

教師のコメント

『正解です。結構なちゃんだよね』

**第4問Dクラス戦、終結！（前書き）**

レイン様、秋雨様！

感想ありがとうございます！

#### 第4問Dクラス戦、終結！

明久達が紛争するなか、つぐみは回復試験を瑞希と一緒に受けていた。

「次をお願いします」

「こっちもです」

「こっちもだよ」

「お、同じく！」

シュババツ

次々と問題を解いて行く、瑞希とつぐみにそれを素早い動作で取り、点数をつける、高橋先生がいた。

ある程度とけると、つぐみは立ち上がる。

「？もう、行くんですか？」

「早いね。つぐみん」

「あまり、無理してはダメですよ？」

「うん、大丈夫だよ。それに、アキくん達が心配だし」

ニコツと笑って言うとレポートを使い回復試験の教室から出て行

く。

「邪魔者は！ 殺します！！」

戦線にテレポートすると叫びとともに、明久の召喚獣に襲いかかる女子生徒がいた。

「アキくん！ 危ない！ 試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

魔法陣が展開され、姿を現したのはうさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみをデフォルメした感じで武器はキャロットバトンでそれで相手を叩いて倒した。

『Fクラス 雨宮つぐみ 化学 134点 VS Dクラス 清水美春 化学 41点』

頭上には点数が表示されていた。

「そ、そんな！……」

「戦死者は補習だー！！」

呆然としている美春に西村先生が現れて言つと肩に担ぎあげて歩き出す。

逃げようとする暇も与えられなかった。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんかからね！ このまま無事に卒業できると思わないでください」

最後まで言えずに補習室に連行される、美春だった。

だが、思い人にそういう言い方はいかなものか。

「アキくんは久遠君、大丈夫？」

「う、うん。平気だよ、つぐみ。それより、島田さんが」

「俺も平気だが」

つぐみが明久と光一に聞くと微笑んで返事し、美波を見ると深紅に宥められていた。

「よしよし、えろっ怖かったやろっ」

「うう、本当に怖かったわよう！！」

「深紅と居ると姉妹みたいだな」

「そっやろっか？」

「ああ」

「……神崎さん、いつのまに（汗）」

「……あたしにもわからないよ（汗）」

本当に謎な人物である。

やっと落ち着いて美波を見て深紅は言う。

「とりあえず、島田は回復試験を受けた方がええよ」



「気をつけて戻れよ」

「そうね。雨宮、助けてくれてありがとうね」

「あ、ううん」

美波はつぐみの頭を撫でて言うと言って行った。

「素直だね。」

「そうだね。さて、あたし達もこの後を頑張ろうね！」

「新鮮やね」

「そうだな」

『おー！！』

つぐみが笑顔で言うと士気が上がった。

戦線に戻り、今の渡り廊下はつぐみと深紅と光一のおかげでなんとか持っていた。

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り2人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかない！ 援軍を頼む」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！」

想像以上に劣勢かも。

五十嵐先生側はどうしようかな

「行きます！」

「行こうかな」

回復試験を終えた優羽と恋が召喚獣を召喚して五十嵐先生側の援軍に来た

「布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！」

五十嵐先生側の人は総合科目の人と桜木さんと遠月さんと交代しながら効率良く勝負をするように！

藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！」

『了解！』

皆が明久の指示に従って陣形を組んでる、これは明久を隊長として扱ってくれているのだろう

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「なにを待っているんだ！？それにAクラス成績の遠月と桜木もいるなんて、どうなってんだ！」

戦い方と恋ちゃんと優羽ちゃんの登場でどうやら気づかれつつあるようだよ。

「大変だ！ 斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって

報告が！」

「せ、世界史の田中だと!？」

「Fクラスのやつら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

Dクラスの偵察部隊に、テストの採点でやってきた田中先生が見つかったようだ。

世界史の田中教諭はおっとりした初老の男性で、その採点の甘さに定評がある。

その代わり採点には少々時間がかかるけど、長期戦の場合は田中先生の方が都合がいいんだよ。

「吉井、Dクラスは数学の木内を連れ出したみたいよ」

美波ちゃんは一度点数補充に戻って情報を入手してきたみたいだね。

数学の木内先生は厳しいけど、採点の早さは群を抜いています。

どうやら、Dクラスはこちらとは対照的に、一気にケリをつける気みたいだね。

でも、アキ君達の作戦のためにはそうそう簡単に突破されるわけにはいかない。

とにかく前線を長く保つことがあたし達の役割の一つなんだから。

「須川君！」

「なんだ？」

どうやら、アキ君はなにか思いついたのか須川君に話かけてるけど、

何かな？。

「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐ為に」

「偽情報？ それは構わないけど。スグにバレるんじゃないか？ Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声大きいから上手くいつてもあつと言う間に混乱を収められてしまっぞ」

須川君の言うとおり、Dクラスの塚本君は声大きいんだけど。

さっきから指示が聞こえるのはありがたいけど、その分混乱を招きにくいのが現状。

「大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

「と、言うこと？」

「先生達に流すんだよ。他の場所に向かってくれるように」

「……………なるほど。それは確かに効果的だ」

「で、でしよっ？」

「ああ。流す偽情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみせよ」

「うん。よろしく」

「あ、ちょっと待ってくれひん？」

「どうしたんだ、深紅」

「ちよつと、ええこと思いついたんや」

イキイキした表情で動こうとした須川君を神崎さんが引きとめた。  
久遠君は不思議そうだけど

「なんだ？」

「ちよつと耳かして」

「わ、わかった」

須川君は深紅ちゃんと会話してる。

「し、しかし」

「お願い聞いてくれへんの？」

「須川にしかできないことだぜ」

「了解しました！」

須川君は敬礼してさっさと走って行ったけど、何したのかな？  
久遠君や優羽ちゃんが若干楽しそうに見えるのはなぜだろうか、恋  
ちゃんは苦笑い浮かべてた

「さて、明久。指示を頼むぜ」

「あ、うん。皆、僕らは1対1じゃ勝てないからね！ コンビネー  
ションを重視して！」

爽やか笑顔の久遠君を見てアキ君は苦笑いを浮かべてたけど、ちゃんと指示をだしていたよ。

数分後……

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待っている！ 今、数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらく拮抗した状態を続けていたら、僕達Fクラスにとっては好ましくない会話が聞こえてた。

数学の船越先生（45歳・女・独身）を呼んだのは採点目的じゃなくて立会人になってもらう為なのかな。

これ以上戦線を拡大されると実力差がよりはつきりと出てしまうことになるよ。

ピンポンパンポン！

《連絡致します》

聞き覚えのある声が校内放送から流れだした。

この声は須川君？ 職員室より放送室を選んだのは捕まえやすくする為だろうね。

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出し相手は丁度今話題に上がった船越先生のようにだけ。

《坂本雄二君が体育館裏で待っています》

え、ええー!!!?さ、坂本君を使った!

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》  
船越先生は婚期を逃してついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった人だよね。

「坂本代表……アンタあ男だよ!」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて!」

前衛部隊の仲間達が感動してるよ。

「おい、聞いたか今の放送!」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ!」

「あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか……?」

Dクラスはいい具合に混乱しているようだけど、いいのかな。

「皆、坂本代表の死を無駄にするな!」

「絶対に勝つぞーっ!」

「隊長、行けますよ! この勢いで押し返しましょう!」

「ああ!! 雄二の為に皆、いくぞー!」

『おおーっ！』

これで戦意も上がるってどんだけ、なんだろう。

『須川あああっ！！』

あ、どこかで坂本君が叫んでるよ。

須川君は放送室からでられなくなってないかな。

『……雄二…浮気は許さない』

おや？どこからか怨念のような声が聞こえてきたのはなんで？  
あ、疑問に思ったことを聞かないと！

「ところで、どうして。あんなの事になってたの？」

「ああ、それはね……」

つぐみが疑問に思ったことを聞くと明久はあの時起こった出来事を  
教える。

「そ、それはやっかいだね」

「相手が嫌がってるのに、分かっているひんのやな」

「まったく、傍迷惑なヤツだな」

「そうかもね。おっと、神崎さんに光」



「あらほら、さっさ 久遠君、任せたえ〜」

「おう、つぐみ」

「うん、よっ!」

4人は会話しながら、敵を即席コンビネーションで倒していく。即席な子もいるのにこの4人には抜群のコンビネーションで敵をさばく。

「あ、アキくん。危ない!えい!」

「おっと、足払い!」

「くらいな!」

「ほい、とどめやで」

「そ、即席なのに、なんでこんなに強いんだ!?!」

そんなの作者が聞きたいものだ。

この様子を見ていたDクラスの前線部隊を指揮している塚本は啞然となる。

召喚獣の操作は難しいが、明久と深紅がいるおかげで楽にさばけるし、つぐみのフォローも二人で補っているし、

つぐみと明久は長年の仲なので相手がどうするかなど、造作もないのだ。

それに光一の射撃と深紅のフォローでなんなく撃退していく。

『明久、雨宮に光一に神埼！ 無事か?!』

良く通る声が響くのでそちらを向くと雄二が走って来ていた。どうやら、雄二の声のようだ。

「雄二！」

「本隊が動いたみたいだね」

「そうみたいやね」

「くっ、援軍か。残存兵力は俺とともに後退だ！」

Dクラスの塚本がそう言うのと彼らは後退していく。

自分達もこの後は後退して、戦力を増やすことになった。

両軍とも一時的に後退し、戦力の補強ということになったのだった。

「明久、よくやったな」

「それじゃあ」

「ああ、補給組はだいぶ回復できたぞ」

「良かった」

「安心だな」

「そつやね」

雄二はニヤリと笑って言う。つぐみが安心すると光一と深紅も安堵していた。

「ところで、須川を知らないか？」

「え？……まだ、放送室じゃないの？」

「そうか」

今の雄二を見てつぐみは怖いなと考えていた。

即席のブラックジャックに包丁を使って何をする気なんだろう。

「そんなことより、Dクラスとの決着をつけひん？」

「そんなことじゃねー!!」

「よし、お前等！そろそろDクラス代表の首級を穫りに行くぞ！

雄二も出るから安心しろ！ みんな続けえっ！」

『おおー!!!!』

「俺の意思はないのか!!!？」

「坂本君……どんまい」

「雄ちゃん、強く生きてね」

「」愁傷様です」

雄二を置いてつぎつぎと教室を出て行く、つぐみ達だった。出る前に深紅は雄二に何か言っていたけど、気にしない方がいいかな。

いよいよ、最終局面に来た。今なら、帰宅する生徒もいるし、上手く倒せるだろう。

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

不機嫌だけど雄二の指令が戦場に響く。

「そつちから、周り込め！ 俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！」

Dクラスの連中を囲んで、Fクラスのメンバーは倒していく。そんな中に声があがった。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはDクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！」

「正念場だね」

「頑張ろうね！」

「さ、行きまひよ」

「行くか」

「つぐみんの為に捧げるよ」

「これも作戦ですので」

そう言うのと明久とつぐみと深紅と優羽と恋と光一は飛び出した。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え！ 残りは包囲されている者を救出だ！」

平賀の号令の下、あつというまに雄二を中心にたFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラス、撤退だ！ 分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

Dクラス代表の声に従い追撃する……が、Dクラス本体に隙ができた。

「Fクラス 神埼深紅が」

「同じく久遠光一が」

「近衛隊の13人に総合科目で勝負だ(や)」

『え!?!』

明久に目配せした深紅と光一がしたり顔で言う。  
どこまで気が合うのだろうか。

Dクラスの生徒は光一と深紅に怯えているようだ。

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!」

『し、<sup>サモン</sup>試獣召喚!!!』

【Fクラス 神埼深紅 総合科目 1456点 & Fクラス 久遠光一 総合科目890点 VS Dクラス 近衛隊X13 1230点】

お互い頭上に点数が表示される。

『え!?!』

「バイバイや」

「俺の弾は必ず当たる」

一方では一瞬で召喚獣が切り裂かれ、もう一方ではライフルの弾のみだれうちをくらい倒れて行く。

ちなみに深紅の魔方陣が展開されて、召喚獣が出現する。

容姿は同じで姿はデフォルメされており、姿は某ゲームの青い騎士

と同じ姿となる。

毛皮のジャケットに、黒いスラックスに編み上げブーツ、そして右手にはライフル、左手に自動拳銃を持ったデフォルメ光一。

「頼んだよ、姫路さん」

「お願いするね」

「頼みましたよ、瑞希」

「頑張つてね」

平賀君の後ろにいるみいちゃんに笑顔でつぐみ達は言つと。

「は、はい」

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下通らなかつたと思うけど」

現状が理解できない様子の平賀君、それはそうですよね。更にみいちゃんがFクラスだとは思わないでしょう。

「Fクラスの姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「Dクラスの平賀君に現代国語を申し込みます」

「はあ……つぐみ」

「えっと…試獣<sup>サモシ</sup>召喚です」

《Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点 VS Dクラス 平  
賀源二 現代国語 129点》

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対しています。

けど、相手にならなそうですね。みいちゃんの召喚獣は強そうですし。

あの剣は背丈をこえていますね。

「い、ごめんなさい！」

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄するみいちゃんの分身。相手の反撃の許さずに、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となりました。



**第4問Dクラス戦、終結！（後書き）**

恋ちゃんと優羽ちゃんと光一の出番が（泣）

もっと精進しないと！！

## バカテスト 第五問

### 【第五問】

問 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『粒子』

教師のコメント

『よくできました。』

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

『先生もRPGは好きです。』

桜木恋の答え

『闇と対なる』

教師のコメント

『ファンタジーな問題ではありません。  
というよりわざと珍回答をしていますか？』

坂本雄二の答え

『眩しいもの』

教師のコメント

『違います。』

久遠光一の答え

『ビーム』

教師のコメント

『先生も昔は憧れていました。』

遠月優羽の答え

『殺人ビーム』

教師のコメント

『真面目にやってください』

神埼深紅の答え

『心である』

教師のコメント

『周りに合わせて珍回答は止めてください』

**第5問Bクラス対策と楽しい弁当の時間(前書き)**

F O O L様、レイン様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！

## 第5問Bクラス対策と楽しい弁当の時間

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさばらだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「雨宮を抱きしめたい!」

代表である雄二を褒め称える声がいきたるところから聞こえてきた。

「お疲れさま、アキくん」

「つぐみもね」

「わっちには？」

「神崎さんもお疲れ！」

「おおきに」

「光一もお疲れ。」

「明久もな」

つぐみは明久を見て笑顔で言うと明久も笑顔で言い、深紅はそれに割り込んで聞いてくるとつぐみは苦笑いしながら言う。  
明久は光一に近寄って言うと光一は笑って言う。

「つぐみん〜」

「わ!?!」

「またですか! つぐみちゃんが困っていると何度いったらわかってくれるのですか!」

「おい、お前等。帰るぞ」

「ん? もう話は終わったのか?」

「ああ、条件もDクラス代表に言ったしな」

「そっか。なら、帰ろう」

「あ、あたしは瑞希ちゃん達と一緒に弁当の買い物してくるよ」

「わかった、じゃあ……また、後でね」

「明久、行くぞ」

「あ、待つてよ。光一」

「俺を置いていくな」

明久は光一を追いかけて教室を出て行くと雄二も追いかける。

「皆。行こうか」

「そうですね」

「はい」

「なんだか、楽しみね」

「ワクワクするで〜」

「つぐみんは抱っこしてあげるね」

「そこまでちっこくないよ!?!」

「背が届かなかっただら言ってくださいね?」

「恋ちゃんまで!?!?」

つぐみ達は鞆を持って店に行き、弁当の材料を買つとその足でつぐ

みの家に向かった。

「到着！ここが、あたしの家だよ」

「へへ、いいマンションやね」

「いつも迎えにきてるから、わかるよ」

「そうですね」

「つぐみちゃん…大変そうですね」

「それに関しては同感ね」

「美波と同意見だわ」

つぐみは苦笑いしながら、鍵を取り出してドアを開ける。  
ちらつと明久の部屋を美波と瑞希は見ていた。

「置いてくよ？」

「あ、すみません！」

「ま、待って！」

「やれやれやね」

「恋する乙女ほど厄介だよな」

「そうですね？」



「そつやて」

「あの二人の恋のキューピッドでもしようかな」

「ちよい待ち、どこからそんな衣装を取り出したんや」

「禁則事項だよ」

優羽は天使の衣装を取り出してウインクした。  
その間に瑞希と美波はつぐみの家に入る。  
渚と恋は先に入って部屋を眺めていた。

「さよか」

「反応がつまりらないよ」

「わっちに何を期待してるんよ」

「深紅ちゃんに優羽ちゃんも早く〜」

呼ばれた深紅と優羽はつぐみの家に入った。

「食材は冷蔵庫でキッチンはこっちでリビングはあっちね」

「つぐみん、冷蔵庫に入れたよ〜」

「優羽ちゃん、いつの間に入れたの!!!?」

「今日もつぐみちゃんのツッコミがさえますね」

「あ、私を送った巨大ピコハンを使ってるんですね」

「確か、あれはオハナシでも使えるんやっただけ」

「そうですよ」

優羽を巨大ピコハンで叩いて言うとその様子を恋と深紅は眺めて会話をしていた。

「よし、食材は全部いれたね。あ、そうだ」

つぐみは飲み物を持ってきて皆をリビングに案内するとテーブルに飲み物を置く。

「これを飲んで待っててね。あたし着替えるから」

「つぐみん、つぐみん、着替えの手伝いしようか？」

「いや、遠慮するよ(汗)」

「もう、遠月さん。つぐみちゃんのお着替えは私がしますから、いいんですよ？」

「いやいや、恋ちゃんもしなくていいからね!!?」

つぐみは優羽と恋にツッコミをいれていた。

「本当に賑やかだね」

「賑やかな方がええと思うで」

「ねえ、止めなくていいの？」

「わっちは被害にあいとうない」

「あつたことあるんですか？」

「いんや？」

しれつと答える深紅に瑞希と美波と渚は思った。単にめんどいから止めないのではと。

そんなこんなでつぐみは着替えに戻った。優羽と恋はなぜかついて行ってる。

「ひゃあああ！！？」

「つぐみんにはゴスロリだよ」

「いいえ、普通に可愛い服ですよ！」

という声がつぐみの部屋らしき方向から聞こえてきていた。

「何があつたんやろ」

「気にしないでいいんじゃない？」

「そつでしょうか？」

若干心配そうな瑞希がオロオロしていた。

しばらくして私服に着替えたつぐみが恋と優羽と一緒に戻ってきた。

「なんや、また遠月に抱っこされとんか？」

「好きで抱きあげられたわけじゃないんだけど」

「あー、ご愁傷様や」

優羽は幸せそうにつぐみを抱きしめており、反対につぐみはどこか疲れている様子だった。

そんな様子に苦笑いしながら深紅はつぐみに言う。

「両親はいないんか？」

「今日は仕事が長引くから遅いんだって」

「そうなんや」

「それより、料理をしようよ」

「……雨宮。なんで、あなたの胸は大きいのよ！！？」

「え、なんでって言われても（汗）」

美波の圧倒するオーラにつぐみは困っていた。

「あ、あの。美波ちゃん！女は胸じゃないと思っんです！」

「瑞希が言っても意味ないんじゃないかな」

「同感や」

「あはは（苦笑）」

瑞希がフォローするよつに言つが渚がしれつと言ひ、深紅は頷いて恋は苦笑いしていた。

「でも、この身長で胸だけが大きいんだよ？変じゃない？」

「そんなことないと思つて」

「そうですよ」

「つぐみんは可愛いよ」

「私も可愛いと思いますよ」

「つぐみちゃんは可愛いんだから、自信を持つて」

「ウチも同意見よ」

俯いてるつぐみに深紅と恋と優羽と瑞希と渚と美波は笑顔で言つ。

「でも、あたしは深紅ちゃんと美波ちゃんや恋ちゃんや優羽ちゃんの方が羨ましいよ」

「へ、ウチ？」

「わっち？」

「わたし?」

「そうでしょうか?」

つぐみは二人を見上げて言うと美波と深紅と優羽と恋は不思議そうに言う。

「で、でも、ウチ、可愛くないし、おっぱいだって……ちっちゃいし……」

「わっちより、島田や桜木や遠月の方がええと思うんやけど」

「いえいえ、私よりは美波ちゃんですよ」

「わたしも島田さんの方がいいとは思っよ」

「そんなことないよ!」

つぐみは美波と深紅と優羽と恋を見上げてきっぱりと断言する。

「みんな素敵だよ、背高いしスタイル良さそうだし」

「……そ、そう?」

「……わっちはそんなことあると思うんやけど」

「なんだか照れますね」

「そうだね、でも、つぐみんが一番可愛いよ」

照れる者や苦笑いを浮かべたりする物が続出した。

それから7人は、明日のお弁当の相談をし、一部の仕込みをしてから、翌朝また雨宮宅に集まることになった。

すでに死屍累々の状態だったので、瑞希にはつぐみの許可がでるまで料理は禁止にされた。

「じゃあ、みんな、また明日」

「うん、また明日ー」

「明日はがんばりましょう」

「また、明日ー」

「また、迎えに行くからね」

「では、また明日です」

「ほな、さいなら」

そう言うつつぐみ以外の者は歩いて帰って行った。

みんなで登校して席につくとどつと疲れたのか卓袱台につつぐみに  
つぐみはなった。

「何があつたんだ？」

「あー、殺人料理の直し方に苦労しただけや」

「僕、つぐみが心配になって部屋に入ったんだけど。あれは阿鼻叫喚な光景だったよ」

「なんか、よくわからないが。聞かない方がよさそうだな」

光一の質問に深紅は苦笑いしながら答えて明久は遠い思い出のように光一に言う。

恋と優羽と美波と渚もぐったりしており、瑞希は済まなそうにしていた

時間になると姿勢を正して授業を受ける。

「うあー……づがれだー」

「そうだね」

机につつぶすつぐみと明久。

雄二もぐったりしていた、それもそのはず。あの船越先生に目をつけられたのだから。

なんとか、近所にいる男性を紹介して事なきを得たそうだ。

「うむ。疲れたのう」

木下君がいつの間にか近くに来ていました。

今日の髪型はポニーテールだった……本当に男として見られたいのかわからない（汗）

「……（コクコク）」



康太はいつのまにか居た。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

勢いよく立ち上がる雄二からは全然疲れが感じられないのだ。それにしても、昼食のメニューはそれで良いのか？

「お弁当いらないの？」

「せっかく作ってきたのにね」

つぐみと渚に言われてはっとなる男性陣。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうですね」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？ 雄二は何所か行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日、頑張ってくれた礼もかねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二君と美波ちゃんは財布を持って教室を出て行った。

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空だった。

「あ、シートもあるんですよ」

みいちゃんがバックからビニールシートを取り出した。

「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」

「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全な男子高校生にとって最高の贅沢だ」

「うむっ、男として心から同意じゃ」

「……………（こくこく）」

「みんなで作ったから、量が多いかもしれないけど」

つぐみは座って重箱の蓋を持ち上げる。

全員が期待してこちらを見ていた。

どれも素晴らしく美味しそうなお弁当が並んだ。

「「「「おおっ！」「」「」

今、4人の男の声の一つとなった。

「つぐみちゃん、喜んでくれていますね」

「そうだね」

「作ったかいがあるね」

「こんなに喜ぶことなんやろうか」

「ま、いいじゃん？」

「薬品をいれると生死をさまようんですね」

女性陣の反応はまばらだ。特に瑞希は実感がこもっていた。どこか虚ろな様子だ。

「とりあえず、食べようか」

「そうだな」

「美味しそうじゃのう」

みんなで楽しく弁当を食べてると雄二と美波も飲み物を買って戻ってきて一緒にお昼のお弁当を食べた。

もちろん弁当の味は男子5人からはかなりの高評価だった。

薬品をいれた瞬間、つぐみが瑞希を巨大ピコハンで叩いて瑞希自身に味見をさせたからか、瑞希は薬品に手を出すことはしなくなった。

「あ、デザートも寒天もあるよ」

「ティラミスもありますよ」

「わっちは団子やね」

「私と瑞希はドーナツです」

食後もデザートまでも豪華だった。みんなで美味しくいただいて有意義な時間となった。

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

楽しい昼食の後、美波は雄二に話しかけていた。

「試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

「ああ。そつだ」

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスでしょう？」

つぐみ達の目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないのだ。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言。

とはいえ、無理もないだろう。文月学園はAからFの6クラスから成るけど、Aクラスは各が違う。

高成績のエリートが属する場所だ。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う」

「Bクラスを？」

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

雄二は明久を見て聞いたが。

「設備のランクを落とされるんやろ？」

「ああ。そうだ」

深紅はニツコリと笑って言う、どこかBクラス戦の戦いが楽しみのように思える。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「あたし達のクラスと上位のクラスの設備の入れ替え…でしょ？」

「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

「成程な。設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させる。」

そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませる……か？」

光一が雄二に言うと雄二は頷いた。さっきの説明で明久はわかったのかなるほど、と呟いていた。

「しかし、上手く行くのか？ 向こうとしては試召戦争の方が確実なのは事実だ」

「そうじゃな。低得点じゃが実力者の光一は当然として、姫路と桜木の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりもまずは、Bクラス戦だ」

「Bクラスへの使者はわつちと久遠君でええ？」

と、突然に深紅が話にくわわって言う。

「なんでだ？」

「Bクラスの代表、あの根本って聞いたことあるから」

「根本だと!？」

「それにBクラスには戦いたいヤツがあるんよ」

「戦いたいヤツ？」

光一が言うのと雄二は驚き、つぎに深紅は笑顔で言う。

つぐみと恋は不思議そうにし、光一は疑問を口にした。

「そや、あっちは暗躍するやろっから。わっちも暗躍しようと思ってるんよ」

「知り合いなのか？」

「秘密や」

深紅は笑いながら言うのと光一を明久はどこか納得がいかなさそうだった。

「そういえば、優羽ちゃんの幼なじみがBクラスに」

「あー、蒼ちゃんのことだね」

「なるほどな」

雄二はもう一人の幼なじみを思い浮かべて呟いた。

「かなりの策士だから、気をつけるよ」

「そうやね、一筋縄ではいかなそうやし」

「勝てるのか？」

「わっちは勝つ、つもりやで」

雄二が深紅を心配し、深紅は苦笑いしながら言うと光一が質問したら、ニヤリと笑って答える。

「でも、光一や神埼さんだけというわけには」

「なら、明久も来るか？心配しなくても、コレクションとこれ位なら貸してやるよ」

「自動拳銃とスタンガン（20万ボルト）…えろっこっついもの持ってんやね」

明久に手渡す光一を見ながら深紅は言った。

「護身用と俺の趣味だからな」

「さよか」

「……また、僕は危険人物として知れ渡るのかな？ 365度どう見ても美少年なのに」



「バカとしてなら知れ渡ってるぞ？　ちなみに5度多い」

「うむつ。実質5度じゃな」

「2人とも嫌いだ！」

「もう！木下君に坂本君！」

「つぐみん、落ち着きなよ」

「つぐみちゃんはいつも大変です」

雄二と秀吉に怒るつぐみ。それを宥める優羽と苦笑いを浮かべる恋。

この後、宣戦布告に行った、光一と深紅と明久は無事に戻ってきたのだった。

深紅は目的の相手がいたので凄く楽しそうに見えた。

普通の試召戦争だといいいのだけだと、つぐみは心のそこからそう思った。

## バカテスト 第六問

### 【第六問】

数学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『 $C_6H_6$ 』

教師のコメント

『簡単でしたかね。』

桜木恋の答え

『 $C_6H_5NO_2$ 』

教師のコメント

『それはニトロベンゼンの化学式です。』

名前にベンゼンが含まれている物を指したわけではありません。』

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

『君は化学をなめていませんか。』

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

『あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。』

久遠光一の答え

『癌善』

教師のコメント

『君も後で職員室に来るように。』

神埼深紅と遠月優羽の答え

『ベン』

教師のコメント

『お願いですから、真面目に書いてください！！』

第6問(前書き)

レイン様、FOOL様、秋雨様、リザク様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！

## 第6問

午後のテストも無事終了し、放課後。

「アキ君、大丈夫？」

「うん、神崎さんと光一のおかげでなんとかね」

「全て、明久の元へと行くとは厄介やったで」

「だな、エアガンを見て脅したからなんとかなったが」

「御苦労さまじゃのう」

「うう、光一と神崎さんには迷惑かけるね」

「アキ君、気にしたらダメだよ。二人はアキ君の親友として居てくれてるし守ってくれてるんだから二人の気持ちも大事にしないと！」

「つぐみ……うん。そうだね、頑張るよ」

「あつきーを励ますとはつぐみんさまさまだね」

「そうですね。でも、つぐみちゃんを支えるのは私と優羽ちゃんですけどね」

帰り道をつぐみと明久と光一と深紅と秀吉と恋と優羽で歩いていた。帰る道は違つが途中までは一緒に帰ろうということになったのだ。

「明日にはBクラスと戦うんだよね」

「ワクワクしてくるぞ」

「それは深紅ちゃんだけだよ」

「そ、それより、根本が卑怯なことをしないといいんだけど」

「あー、多分大丈夫やて」

「なんで分かるの？」

「わっちの勘や」

「ふーん」

「あ、ここでお別れじゃな」

「みたいだな。俺等はここで、また明日な」

「また、明日なのじゃ」

分かれ道に着くところで光一と秀吉を別れた。

しばらくして、深紅とも途中で別れた。

「じゃあ、ここで。また、明日です。つぐみちゃん、吉井君」

「じゃあねー。また明日」

恋と優羽とも途中の分かれ道で別れた。

「アキ君、勉強頑張ろうね」

「そうだね」

つぐみと明久は同じマンションに帰るとそれぞれの部屋に戻って勉強して晩ご飯を食べたのだった。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つ雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

『おおーっ！』

「やる気の子が違うよー！？」

「言っても無駄ですよ、つぐみちゃん」

一向に下がらないモチベーション。このクラスの唯一の武器と言ってもいいだろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。」

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ!』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んで来い!」

「が、頑張ります」

『うおおーっ!』

一緒に戦えるということがかなり嬉しいのか雄たけびをあげるクラスメイト。

それについていけないつぐみと恋と瑞希がいた。

前線部隊の士気があがっているので良いことにしておこう。

「坂本くん。私はどうすればいいんですか?」

「ああ桜木、お前は姫路達と一緒に前線で戦ってくれ」

「わかりました」

キーンコンカーンコンー!!

昼休み終了の合図が鳴る。

「よし、行って来い! 目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー!』



「あ、坂本。わっちはここに居るから、前線は他の奴らにまかせたえ」

「あ？なんでだ？」

「ちょっと確かめたいことがあるねん」

「？わかった」

つぐみ達が出て行こうとしてる時に雄二と深紅がそんな会話していることに誰もが不思議に思った。

「なら、俺も残る」

「そうじゃな、Bクラス相手は光一には荷が重いかもしれぬ」

「おい」

「わっちは別にええよ」

「んじゃ、決まりだな。明久につぐみに桜木に遠月、頑張れよ」

「光一は来ないんだ。うーん、頑張ってみるよ」

「後はよろしくね！」

つぐみ達は光一と深紅と話をして教室から出て行く。

「いたぞ、Bクラスだ！！」

「高橋先生を連れて居るぞ!!」

正面を見るとざっと10人程度の人数がいた。  
様子見程度なのだろう。

「生かして帰すなー!!」

物騒な発言が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 総合 1943点 VS Fクラス 近藤  
吉宗 総合 764点』

『Bクラス 金田一祐子 数学 159点 VS Fクラス 武藤  
啓太 数学 69点』

『Bクラス 里井真由子 物理 152点 VS Fクラス 君島  
博 物理 77点』

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。  
止めをさせられる前にフローしないとやばい。

「援護するよ!」

「同じく」

つぐみと優羽が援護しに向かい、召喚獣を召喚して戦う。

「Bクラス 坂上智也 物理 166点 VS Fクラス 雨宮つ  
ぐみ 物理 180点 & Fクラス 遠月優羽 物理 450点」

「いつけー！」

「つぐみんには触れさせないよ」

Bクラスの生徒は二人の攻撃で一撃でやられた。  
次の指示を出そうとしていると

「すみません。遅れました」

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

全力疾走についてこれなかった二人が来た。  
恋と瑞希はすまなそうに言う。

「来たぞ！ 姫路瑞希と桜木恋だ！」

恋と瑞希には警戒しているのか目つきが変わった。

「姫路さん、桜木さん。来たばかりで悪いんだけど……」

明久が瑞希と恋に話かけている。

「じゃあ、行ってきますね」

「は、はい、行って、きます」

そういつてBクラスの人たちのところへ向った。

「アキ君、あたし達は？」

「うーん、僕等と一緒に戦ってくれない？」

「わかったよ」

「めんどいけど、つぐみんの為」

明久とつぐみと優羽が会話していると

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「同じくBクラスの中村将太です。Fクラスの桜木恋さんに数学勝負を申し込みます」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「桜木恋です。お願いします」

「律子、私も手伝う！」

「俺も中村を手伝う」

さっそく勝負をいどまれたのか、律義に返事して言う。

一人相手に二人がかりで挑むあたりはかなり警戒しているようだ。

『試獣<sup>サモーン</sup>召喚！』

喚声に応じて魔法陣が展開。おなじみの召喚獣が顔を出す。

瑞希の方には鎧を着て、背丈の倍くらいある大剣を持ったデフォル

メされた瑞希が現れた。

恋の方には黒いマントを身に纏い、頭に力チューシャを着けて、瑞希の大剣を小さくしたようなのを二つくっつけたような、いわゆる両剣という奴を持ったデフォルメされた恋が現れる。

恋の相手の召喚獣が弓とハンマーを構えていた。  
瑞希相手の召喚獣は剣と槍を構えている。

「あれ？ 姫路さんと桜木さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「私もです」

「アキ君、結構解けるとアクセサリーが追加されるんだよ」

「これなら、簡単に勝てそうだね」

瑞希と恋の召喚獣は左手首に腕輪をしていた。

「そ、それって!？」

「私（俺）たちで勝てるわけないじゃない（んか）！」

「じゃ、いきますね」

そういつて、瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向ける。

「ちよつと待つてよ!？」

「律子！ とにかく避けないと！」

二人は大袈裟なくらいに横に跳んだ。  
その直後に瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

瑞希の召喚獣から光がほとばしり、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189点 & 151点』

腕輪とは、400点以上の点数を取った人につけられて、それぞれ特殊な能力を使うことができるのだ。

「さて、私の方も片付けましょうか」

そういつて、恋も腕輪の能力を使う。

「な、なんだ!?!」

腕輪が光り、恋の周りに無数の武器が現れた。

「ま、待ってくれ！」

「待ちませんよ？ それに、勝負を仕掛けたのはあなたたちですよ

「？」

そういつて恋は、周りに浮かばせてる武器を一斉に相手の召喚獣に飛ばした。

『Fクラス 桜木恋 数学 405点 VS Bクラス 中村将太  
&柴村卓也 数学 186点 & 180点』

「「う、うわああーっ！」」

相手の召喚獣はで八つ裂きになり、一瞬で決着がつかしました。もちろん瑞希の方も決着がついていた。

「い、岩下&菊入ペアと中村&柴村ペアが戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な!？」

「姫路瑞希に桜木恋、噂以上に危険な相手だ！」

どうやらBクラス前線の残り六人の士気を下げられたみたいだ。

「み、皆さん、頑張ってください！」

瑞希が指揮官らしくない指示を出したけど

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「桜木さんもステキだぜーっ！」

それでも士気がかなり上がった。

「瑞希ちゃんに恋ちゃん、とりあえず下がってって」

「あ、はい」

「わかりました」

特殊能力は威力の分だけ消耗が激しいという話なのだ。

「中堅部隊と入れ代わりながら後退して、戦死は絶対するな！」

そんな相手からの声がある。

その頃、深紅と光一はここで待機しているとBクラスの男子生徒が来た。

「Fクラス代表に話がある」

「Fクラス代表は俺だが、なんだ？」

「Bクラスの代表が用事があるんだと、来てくれないか？」

「わかった」

雄二はBクラスの使者に気づかれないように深紅と光一を見てから承諾して教室を出て行く。

「なあ、本当に誰もいないのか？」



「あの根本がしくるわけないだろ」

「だよな」

「さっさと終わらせるぞ」

ちなみに深紅は光一を掃除道具に隠れさせてから、自分は教壇の後ろに隠れる。

この後、Bクラスの連中がFクラスに入ってきて、卓袱台を壊そうとした瞬間に光一が掃除用具入れから出て懐からだしたエアガンでBクラスの男子に当てた。

その隙に深紅は相手に足払いしてナイフを突き付ける、この俊足についてこれる者はいない。

「あんさん等、何をしようと思ったんや？」

「言葉次第では解放してやってもいいぜ？」

深紅と光一は楽しそうに笑って言うとBクラスの男子達は怯えた。

「ま、話さないなら。ここで戦うだけや」

「だな、先生。召喚許可を」

「あ、はい。承認します」

物理のフィールドが展開された。

ちなみに先生には壁紙を被せて目立たなくしていた。

『Fクラス 久遠光一 物理 490点 & Fクラス 神崎深紅 物理 435点』

V S

『Bクラス モブキャラ 3人 物理 241点』

ジャケットにスラックスを纏い、右手にライフルと左手に自動拳銃を持った光一の召喚獣と赤いドレスを纏い、歪な剣を持った深紅の召喚獣が現れ、頭上に点数が表示される。  
モブキャラの召喚獣は西洋風の兵士だった。

「さ、お終いやで」

「俺等に裏をかくなんてさせないからな」

『そ、そんな!!』

光一の召喚獣のライフルが相手の召喚獣にめがけて弾を放つ、深紅は歪な剣で相手の召喚獣を一撃で倒していくと、箱を被っていた西村先生が現れて。

「戦死者は補習だー!!」

「いやだー!鬼の補習は嫌なんだー!!」

「助けてー!!」

「逃げろー!!」

逃げようとするBクラスの男子達はすぐに西村先生によって捕えられた。

「こいつらはなんでここにいるんだ？」

「せやね〜、Bクラスの代表の命令やろ」

「声についても録音済みだしな」

「お前等な……。まあ、いい……。本人に聞けばいいからな」

深紅と光一の笑った顔に苦笑いを浮かべて言おうとしたが止めて西村先生はBクラスの生徒を持ち上げて去って行く。

こうしてBクラスの強襲は失敗となった。根本はこれを知り悔しそうにしていたのはここだけの話。

蒼夜はますます、深紅との戦いが楽しみになり、動きだすことに決めた。

## 第6問(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

## バカテスト 第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希・桜木恋と久遠光一の答え

『good better best

bad worse worst』

教師のコメント

『その通りです。』

吉井明久の答え

『good gooder goodest』

教師のコメント

『まともな間違え方で先生驚いています。』

goodやbadの比較級と最上級は語尾に erや estをつけるだけではダメです。 erや estをつ

覚えておきましょう。』

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

神埼深紅の答え

『good better best  
bad worse worst』

珍回答を思いつかひんかった！

教師のコメント

『思いつかないでいいです』

雨宮つぐみの答え

『good better best』

教師のコメント

『一つはできましたがもう一つは思いつかなかったみたいですね』

遠月優羽の答え

『good better best  
bad worse worst』

教師のコメント

『真面目に書いたことに驚いています』

第7問（前書き）

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、リザク様、FOOL様

感想ありがとうございます！

## 第7問

「あれ、光一に神崎さん。どうしてここに？」

「本当だ」

「もしかして、先に感づいてここにおったのかのう？」

「木下君、正解や」

「あの根本だからな。」

「用心したんだね」

明久達と一緒に教室に戻ると深紅と光一がいたことにつぐみ達は驚いて言う。

「何かあったの？」

「そうやね…Bクラスの生徒が教室に侵入してきたことやね」

「大方この卓袱台を壊す気だったんじゃないか？」

「卑怯なことするね」

「まっただね」

明久が聞くと深紅は答えると光一も言い、それを聞いて憤慨するつぐみにのほほんとしている優羽がいる。



「とりあえず、戻るかのう?」

「そうだね」

「深紅と久遠君はどうする?」

「俺がここに残るから平気だぞ。」

「なんや、おわったんか?」

「ああ、その様子だと。しかけてきたらしいな」

「その通りや」

「いったい、なんの話なの?」

つぐみは不思議そうに聞くと

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。」

その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。っていう協定を結びにいく間に何かあるかもしれないから、って神埼が言っているに光一と残ったんだ」

「なるほど。それ、承諾したの?」

「そうだ」

「でも体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利じゃないの?」

「姫路と桜木以外は、な。神崎と光一がいるから、なんとかかなるとは思うが」

「えー、まだ。やるの？」

「優羽、この勝負に勝ったら、一日雨宮と遊べるよう手配してやる」

「えー!? ちよっ、いきなり何決めてるの!?!」

「よっし、頑張るぞー!」

「やる気十分だし!?!?」

雄二の提案に優羽は承諾しつぐみはツッコミをいれる。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだよな。このままだと本丸は落とせないだろうし」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路と桜木達個人の戦闘力の方が重要になる」

「だから、受けたんだね。その方が瑞希ちゃんと恋ちゃんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

つぐみの質問に雄二は答えると明久達も納得したようにいる。

相手の作戦も崩せたのだからいいが。

「後はゴリラに任せて、俺等は前線に戻るか」

「そうだね」

「おい、モヤシに明久！ゴリラ扱いすんな！！」

後ろで叫ぶ雄二をほっという明久はつぐみ達を連れて前線に戻る。

「では、くれぐれも用心するんじゃぞ」

「秀吉もね」

「行くぞ、明久につぐみに深紅に遠月」

「うん、光一」

「う、うん」

「ほな、はんなりいきますえ」

「了解」

互いに警告し合い、光一達と話してそれぞれの部隊に戻る。

「吉井！ 久遠！ 神埼！ 雨宮！ 遠月！ 戻ってきたか！」

出迎えてくれたのは須川君。

「あれ？ 部隊の副官の美波ちゃんは？」

「島田が人質にとられた」

「な！？」

「今度は人質なん？」

「さすが卑怯なヤツだな」

「まさに卑怯な手段の王道だね」

「おかげで相手は残り2人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、つぐみ達の部隊はそのせいで敵と睨みあいになっているらしい。

「とりあえず、状況をみたいな」

「光一のいう通りだね」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君が前を歩き、つぐみ達が後に続く。

部隊の人垣から抜けると、そこには須川の言う通り2人にDクラスのモブキャラと捕えられた美波とその召喚獣の姿があった。

そして、そばには補習担当講師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

なんだかドラマみたいだね。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

美波を捕えている敵の1人が明久を牽制してくる。  
つぐみは苦笑いを浮かべてから美波を見ると精神感応テレパスを使い

「美波ちゃん…【何してるの？】」

「ごめん…しくったわ【吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなったって聞いて】」

「あほや」

深紅はなぜか呆れていた。

「久遠君、どうしよう？」

「そうだな……突撃させるか」

「ええ！？美波ちゃんがいるんだよ！！？」

「大丈夫だよ、島田さんなら分かってくれるぞ」

「そ、そうかな」

「ま、納得はいかひんけど。相手を動揺させる為やと割り切ろうぞ」

「そうそう」

光一と明久は突撃させる気満々だが、つぐみは不服そうだった。

「総員突撃用意いーっ!!」

「アキ君!?!」

「隊長それでいいのか!?!」

「いいんだよ」

「ま、待て、久遠に吉井!」

敵からちょっと待ったコールが出た。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている?」

「馬鹿だからだろ?」

「馬鹿やしな」

「馬鹿だもんね」

「ちょっと、三人共!?!?」

「殺すわよ」

しれっと答える光一と深紅と明久につぐみは驚いて言う。

「コイツ、吉井が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて1人で保健室に向かったんだよ」

「島田…」

「な、なによ」

「怪我をした明久に止めを刺しにいくなんて、お前は鬼か？」

「違うわよ！」

明久は肩をガタガタと震わせていた。

「ウチが吉井の様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

「島田さん。 それ、本当？」

「そ、そうよ。 悪い？」

ちよつとは素直になったのか美波の耳が紅い、そんな美波の発言に明久は驚いている。

「へっ。 やっとわかったか。 それじゃ、おとなしく」

「（あれは本当だよ、アキ君に久遠君。 美波ちゃんは本物だよ）」

「（そうか、なら…どうするか）」

「（ここは敢えて偽物扱いしいひん？）」

「（なんで？）」

「（あ、深紅ちゃんの考えわかった！その方が面白いからだよね）」

「（その通りや）」

「（ダメだよ！？美波ちゃんが可哀想だよ！）」

小声で光一達は会話している為に周りには聞こえていない。

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

「えー！！？」

「あの島田は偽物だ！ 変装している敵だぞ！」

「おい待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

狼狽するBクラス生徒：もう、モブキャラでいいや。

「黙れ！ 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ  
！」

「だから本当にー！」

『英語W Bクラス・鈴木二郎 33点 VS 65点 田中明・



Fクラス』

『英語W Bクラス・吉田卓夫 18点 VS 59点 須川亮・Fクラス』

死にかけの二人を撃破するとつぐみ除いた者達で美波を包囲する。

「ぎゃあああー……！」

「たすけてえー……！」

近くにいた補習教師に二人は連れて行かれた。

「さて、もうええやる」

「だな、包囲を解いていいぞ」

「そうなのか？」

「うん、美波ちゃんは本物だよ」

「島田、大丈夫やった？」

「ええ………だけど、なんでわざわざウチを偽物扱いするのよー！」

「えー、よく言うやろ？敵を騙すのにはまずは味方からやって」

「ぐっ！」

深紅の正論になんとも言えない美波だった。

「でも、美波ちゃん。まんまと騙されすぎだよ、アキ君が瑞希ちゃんのパンツを見て鼻血が止まらなくなったと聞いて単身1人でいくだなんてさ」

「ううっ……でも、つぐみなら、わかるでしょ?」

「というより、誰でも嘘だとわかるで」

「え?なんで?」

「姫路は桜木といるし、明久はつぐみといるんだからよ」

「あ……そっか」

やっと気づいた美波はつぐみを見て納得していた。

「え?え?何?」

「つぐみん可愛い〜」

「むぎゅっ!?!?」

つぐみは混乱していたが優羽に抱きしめられていた。

「ま、明久も島田を偽物やと思ってたろうし、島田も見え透いた嘘に騙されたということだ」

「こっでーっ罰だ。お互いが名前で言い合っこと」

「え？うん、別にいいけど」

「わ、わかったわ」

深紅と光一の提案を明久と美波は承諾した。

「とりあえず、美波ちゃんは教室に戻ってて」

「そうするわ、つぐみ達も無理しないでね？」

美波は教室に戻って行く。

「よし、みんな！行くぞ！」

『おおー！！』

美波が去った後、光一が激励して再び教室前に攻め込む。

そこで今日の戦争は終わって休戦となった。

「一応計画通り教室前に攻め込んだわけだが、こちらの被害も少な

くはない」

雄二がこちらの被害を書いたメモを見て読みあげる。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調だな」

「まあな」

「良かったよ」

「まだ、気はぬけひんな」

「そうですね」

「ま、気楽に頑張ろうよ」

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

土屋君は情報係で、戦闘には参加せずに周囲を警戒していたようだ。

「ん？ Cクラスの様子があやしいだど？」

「……………(コクリ)」

土屋の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。

まず、Aクラスではないだろうから

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「土屋、そこに根本はおったんか？」

「……………いた」

「神埼さん、どういこと？」

「恋はんと話してる時に、たまたまその話になったんよ」

「それで土屋君を使って確かめることにしたんです」

「恋ちゃんに深紅ちゃん、凄い」

つぐみは深紅と恋を尊敬していた。

「つまり、深紅の情報から推測すると根本とCクラス代表の小山さんは付き合っているんだな」

「そうやで、久遠君はちゃんとわかとつたみたいやね」

「なるほどな」

雄二は深紅の情報網に関心していた。

「つぐみに光一、どういうこと？」

「つまりにね、アキ君。漁夫の利を使ってこちらに攻め込むと見せかけてCクラスに来させて」

「協定を結びに来た時に倒すんだよ、協定違反だというのを盾にな」

「卑怯だね」

「まったくですね」

つぐみと光一の説明を聞いて卑怯な手段に皆が不機嫌になる。

「ま、わかった、以上。その誘いにわざと乗っていくか」

「俺も行くぜ、雄二」

「わっちもや」

「じゃあ、僕達はここにいるね」

「おう」

雄二と光一と深紅はCクラスへと向かった。

「アキ君……大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。光一と神埼さんがいるんだし」

「そうですよ！」

「心配しなくても大丈夫だよ」

不安そうなつぐみを明久と恋と優羽が励ましていると

「失敗した奴らの顔は笑えたで」

「だな」

「深紅の情報網がなかったらやばかったな」

三人が帰ってきた。

「あ、お帰り」

「どうだった？」

「深紅の予想どおりだった」

「そっか」

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にすぐCクラス戦はきつい」

向こうもそれが狙いなのだろうけど、こちらが勝ったとしても休憩する暇も与えないだろうし。

「それならどうしようか？ このままじゃ、勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「心配するな。」

野性味たっぷりの活き活きとした顔で雄二は告げる。

「向こうがそう来るなら、こっちだって考えがある」

「ほう……それは、なんだ？」

「詳しく聞きたいで」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しとなった。



## 第7問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

## バカテスト 第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『初潮』

教師のコメント

『正解です。』

桜木恋の答え

『所長』

教師のコメント

『読みは合ってますが、字が違います。』

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

『随分と急な話ですね。』

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初径という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

『 詳し過ぎです。』

久遠光一の答え

『 初恋』

教師のコメント

『 恋は人を変えろと言いますが、残念ながら外れです。』

神崎深紅の答え

『 初潮』

教師のコメント

『 正解ですが、珍回答が思いつかないからって渋々と書かないでください』

遠月優羽

『 いつか』

教師のコメント

『 保健体育は苦手なんでしょうね』

第8問（前書き）

レイン様、FOOL様、秋雨様、リザク様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！！

## 第8問

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校したつぐみらに雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦？ でも開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦時刻は九時となっている。

「Bクラス相手じゃなくて。Cクラスの方やね」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

「まさか」

渚が嫌な予感がしているのか呟いた。

雄二が取り出したのは女子の制服だった。

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「」「いやいや、よくないでしょ……！」

思わずつぐみと恋がツツコミをいれていた。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

「スルーなの!!?」

「楽しそうでいいじゃん」

優羽の楽しい限定はなんなのだろうか。

この場にいる誰もが思ったとか。

秀吉にはAクラスに双子の姉がいる。

一卵性双生児かと思われるほど似ていて、違う箇所なんでテストの点数と喋り方くらいなのだ。

光一はふざけて間違えるほど似てはいるが、完璧に見分けられるのは渚と光一くらいだ。

「というわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

「後、桜木。お前は翔子として秀吉と共に向かってくれ」

「え!?!わたしもですか!」

いきなり名指しで呼ばれて恋は驚いていた。

「ああ、お前だって髪飾りをはずして強気ばい目をすれば翔子に似ているぞ」

「そ、そうですか?」

恋は髪飾りをはずして

「「じつ…ですか？」

『おおっ！似ている！』

確かに似ていた。

恋に被害がでないのといいなとつぐみは親友である恋を心配していた。

「……話し方は、これでいい？」

「ああ、ばっちりだ」

そうこうしているうちに秀吉も着替えが終わっていた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあね？」

「……さあな？」

渚と光一は苦笑いしながら言うと呆れてFクラスのメンバーを見る。

「バカばっかやね」

「あたし達それに入るのかな」

「つぐみんは可愛いから、いいんだよ」

「答えになってないよ!!!？」

つぐみは優羽にツッコミをいれていた。

「おかしな連中じゃのう……ん？……Aクラス代表がなんでここに  
いるのじゃ？」

「私ですよ秀吉くん」

「その声は恋か？ お主も随分とそっくりじゃのう」

「そ、そうですね？」

「凄いよ、恋ちゃん！」

「ありがとうございます、つぐみちゃん」

恋に近寄ってつぐみが言うのと微笑んで恋が言う。

どこか和む空気が流れたのは気の所為ではないだろう。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「はい」

「あ、僕も行くよ」

「あたしも！」

「わっちも行くで」



「俺もだ」

「私も」

雄二に続いて恋と秀吉が出て行くと明久とつぐみと深紅と光一と優羽もついていくこととなった。

そのまましばらく歩いてCクラスを目の前にして立ち止まるつぐみ達。

「さて、ここからは済まないが二人だけで頼むぞ、秀吉、桜木」

「気が進まんのう……」

「はい……」

そうだろう。一人は双子の姉の振りでもう一人は親友の振りなのだから。

気が重いだろう。

「そこをなんとか頼む」

「むう……。仕方ないのう……」

「そうですね」

「後で霧島さんに謝ればいいよ！一緒にいて行くし」

「ありがとうございます、つぐみちゃん」

まだ、気がすすまなそうにしている恋につぐみが話しかけて言うと

頭を撫でられた。

「え？え？え〜！！？」

「あつ！恋ちゃん、ずるいよ！」

「つぐみちゃん、可愛いです」

恋と優羽に抱きしめられるつぐみを微笑みながら見ていた。

この後秀吉と恋はCクラスに向かった。

「雄二。秀吉と桜木さんは大丈夫なの？」

「そうだよ、別の作戦を考えた方がいいよ」

「秀吉なら、大丈夫さ。優子になりすましてやるんだから、面白いことになるだろうしな」

「ずいぶん楽しそうやね」

つぐみ達は隠れながら会話していたら、扉を開ける音がした。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

『……優子、いきなりそれはどうかと思う』

えー！！その言い方はどうかと思うとつぐみは思っていた。

「おおっ、優子だ」

「木下さんの性格はああいった性格やったんか」

「優子さんってああ、なんだ」

「ああ、本人には内緒な。身体の間接が壊されちゃうから」

「大変やね」

「認めちゃうの!!!?」

この挑発に乗るのだろうかと思いつつも、人を豚扱いはどうかと思うとつぐみは思っていた。

『な、何よアンタ達!』

多分Cクラスの代表の小山さんだろう。  
入ってきていきなり豚呼ばわりなのだから怒るのは当然だろう。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

『……優子。話しかけたのはこっちなんだからそれは変……』

自分から来た癖にその言い方は、もうシッコミどころが多いよ。

「いいぞ、もっとやれ。優子ならもっと高飛車にやるぞ」

「ちよ、久遠君!!!?」

「なんや、久遠君は優子さんに偉い酷い目にあってんやね」

深紅に意見に関して明久も同意見だったようで頷いていた。

『アンタ達、Aクラスの木下に霧島さんね？』

ちよつと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！

何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！』

貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！』  
『？』

『……小山さん、Fクラスは豚小屋ほど酷くない』

というか、小山さんにとってFクラスは豚小屋なんですか？とつぐみは思っていた。

それ以前にFクラスとは言っていないし。

「見事に冷静さを失っているな、さすが優子」

「彼は秀吉君だよ！！？」

「冗談でいつとんのか本気なのかわからん所が久遠君らしいで」

つぐみは思わずツッコミをいれて深紅はニヤリと笑って言っていた。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

優子さんって本当のこんな性格なのが気になってきた。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。』

近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!』

『……すみませんでした』

秀吉が先に出ると恋ちゃんも謝って言い、一緒にCクラスの教室から出て行った。

「これで良かったかのう?」

「ああ、本当に優子かと思っただくらいだから……本人には内緒かな?」

「わかっておる。こんな事が姉上にはばれたら、ワシも生きた心地がせんわい」

「だったらあそこまでやらなければよかったのに」

「木下君……あのね。人を豚呼ばわりはよくないと思うの」

「むっ……少しいすぎかのう」

「少しというより、かなり」

「次からは気をつけるのじゃ」

つぐみが苦笑いしながら言うと秀吉は反省するよつに言う。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めよう！』

「Cクラスからヒステリックな小山さんの声が響いた。でも、罪悪感があるよ。」

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めよう！」

「あ、うん」

つぐみ達は早足でFクラスへと向かった。

「ドアと壁をうまく使ってください！ 戦線を拡大させないでくださいね！」

瑞希の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、昨日中断されていたBクラス戦という位置から進軍を開始した。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのことだった。そんなわけで指示を遂行しようとしているのだ。

「勝負はなるべく単教科で挑むのじゃ！」

「補給も念入りに行ってください！」

「敵に弱みを見せるんやないで？」

「危ないヤツはすぐに下がれよ」

副司令官の4人も支持を出していた。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む」

「行きます！」

瑞希は古典の方へ向かい、戦っている。

「古典の点数が残っている人は左側入口の方へ行って瑞希を援護してください」

「消耗した人は補給に回れ！」

指示を恋と光一がしていた。

「いくで！」

深紅は得意な教科で突撃していく。

「皆、頑張つて！」

つぐみと優羽も色々フォローに回っているようだ。

それにしても……

「なんか、神崎さんの方ばかりに敵がいつてない？」

「だね、まるで点数を減らしているかのよう」

明久とつぐみは今の戦況を見て呟いた。

光一もそれに気づいてはいるが、抜けるわけにはいかないみたいだ。

「誰かの作戦でしょうか？」

「だろうね、誰かは予想がつくけどね」

恋と優羽も深紅の状況に気づいているようだ。

「光一、大丈夫か？」

「こつちも人数が多くてキツイな」

そして光一の方も人数が多かったが秀吉がフォローしていた。



## 第8問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

## バカテスト 第九問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希・桜木恋と雨宮つぐみの答え

『脂質 炭水化物 タンパク質 ビタミン ミネラル』

教師のコメント

『流石は姫路さんに桜木さんに雨宮さん。優秀ですね。』

吉井明久の答え

『砂糖 塩 水道水 雨水 湧き水』

教師のコメント

『それで生きていけるのは君だけです。』

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

『保健体育のテストは一時間前に終わりました。』

神埼深紅の答え

『闇社会 秘密 ナイフ 資金 情報』

教師のコメント

『そんな生き方できるのは神埼さんだけです』

久遠光一の答え

『銃社会 銃 銃弾 金属 火薬』

教師のコメント

『君の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。』

遠月優羽の答え

『可愛いもの 食糧 スケッチ 資金 気まぐれさ』

教師のコメント

『先生は君の将来が心配になってきました』

第9問（前書き）

レイン様、ヒョウガ様、リザク様、秋雨様、闇介様

感想ありがとうございます

## 第9問

「そろそろ、ヤバいかもしれひん」

「そうですか、では……僕と戦ってもらいましょうか」

深紅が焦っているとBクラスの生徒が下がり、短髪の黒髪の青年で身体付きは中肉中背のようだ。

彼はBクラスの代表にふさわしいはず、なのだが代表を辞退しているらしい。

「なんや、これはあんさんの作戦やったか。雨咲」

「勝ち目がない戦いはしたくないですから」

ニツコリと笑って言う青年に深紅は楽しそうに笑って言った。

彼は優羽と雄二と翔子の幼なじみ雨咲蒼夜である。

「ど、どうしよう！神崎さんが危ないよ」

「助けにいかないと！」

つぐみが動こうとすると

「大丈夫や、つぐみは明久の護衛と久遠君のフォローしてやり」

「でもっ！」

深紅はつぐみを見て言い、それでも動こうとするつぐみに

「つぐみん、みーちゃんなら大丈夫だよ」

「そうです、信じてこちらでも戦いましょう」

「大丈夫だよ」

優羽と恋と明久が励ますように言った。  
つぐみはちらつと深紅を見ると

「わつちを信じてくれひん？」

「信じるよ、無理しないでね！」

深紅が言うつとつぐみはまっすぐ見つめて言い、明久達の所に戻る。

「さて、勝負といきまひょうか」

「ええ、ですが……僕は負けませんよ」

向かいあうようになると召喚獣を相手が召喚した。

蒼夜をデフォルメした見た目に西洋甲冑に刀という不釣り合いな装備をした召喚獣が現れる。

そして点数が頭上に表示された。

【Fクラス 神埼深紅 日本史 76点 VS Bクラス 雨咲蒼  
夜 320点】

深紅は連戦で点数を消費している為、蒼夜より低い点数となっていた。

「うっん……大分点数削られたけど、なんとかなるやる」

「余裕ですね、そうでなくては」

二人が笑みを浮かべて言うとお互いの召喚獣が武器を構える。辺りに静寂が満ち、そして深紅が先に召喚獣を動かした。

「いくでっ!」

「参ります」

ガキンッ!

二人の召喚獣の武器が交差する、点数は相手の方が上なので深紅はおさがちだ。

召喚獣の操作は深紅の方が上だが、蒼夜も負けてはいない。

「あははっ……こんなに楽しいとは思わへんかったわ」

「僕もですよ」

歪な剣を振り上げて深紅の召喚獣は攻撃するが蒼夜の召喚獣はその攻撃をいなして攻撃をかえす。

「危なかったわ」

「避けてばかりでは勝てませんよ?」

「そやね、この瞬間で決めたる」

「できますかね」

ふう、と息をついて深紅が言うと蒼夜は笑って言い、体制を立て直  
すべく離れて

「確かに点数は雨咲が上やけど、これならどうや!」

「なっ!?!」

蒼夜の攻撃を深紅の召喚獣の腕で受けてから蒼夜の召喚獣の喉元に  
剣を突き刺した。

【Fクラス 神埼深紅 日本史 42点 VS Bクラス 雨咲蒼  
夜 日本史 0点】

「わっちの勝ちや」

「負けましたか」

戦闘の結果も表示されると深紅はニツと笑って言い、蒼夜はどこか  
スッキリしたような心持で言うと

西村先生が来て。

「戦死者は補習だ」

「今、行きますよ。西村先生」

蒼夜が西村先生の方へ行こうとすると深紅が声をかけて



「雨咲。また、戦おうで」

「ええ、次は負けませんよ」

笑顔で二人は会話し、ここで別れた。

その頃、つぐみ達は

「皆、負けないで！」

「このまま押し返すんだ！」

つぐみと明久の指示がBクラスの教室前で響く。

「「いきます！」」

「「「行かせない！」」」

恋と瑞希ペアがBクラスの入り口に入り、戦闘をする。

【Fクラス 姫路瑞希 日本史 345点 & Fクラス 桜木恋  
日本史 345点】

VS

【Bクラス モブキャラ 5人 日本史 745点】

が、一撃で一層された。瑞希と恋の二人のペアに勝てる輩はそうはいないだろうと誰もが思ったとか。

「さーて、屑野郎。てめーの相手は俺だ」

「う、うわあぁっ!」

逃げようとしたがそれは無理だった、なぜなら

「どこに逃げようとしてるんやろうな」

「逃がさないよ」

「そのままでないよー」

つぐみと深紅と優羽が周りこんでいたからだ。光一はニヤリと笑うと根本を見て

「Fクラス 久遠光一がBクラス 根本恭二に物理勝負を申し込む」

【Fクラス 久遠光一 物理 456点 VS Bクラス 根本恭二 物理 189点】

「俺に狙われたのが運のつきだったな」

ライフルの引き金を引いて根本の召喚獣の頭に弾がぶち当たり、爆発した。

「久遠君、凄い!」

「せやね、物理の点数には驚きやで」

「光一にしかできない攻撃だよな」

「久遠君のライフルに狙いをつけられた方は大変そうです」

「まあまあ、いいじゃん。これで戦争は終結したんだからさ」

Bクラス戦は光一の活躍によって終結した

第9問（後書き）

Bクラス戦の戦後対談も頑張りたいと思います

戦闘描写は苦手だ（苦笑）

次回もお楽しみに！

第10問 嬉しはずかしの戦後対談？（前書き）

リザク様 ヒヨウガ様 秋雨様、レイン様

感想ありがとうございます！

## 第10問 嬉しはずかしの戦後対談？

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「では不貞腐れたクソヤロー君、覚悟は良いかね？」

「……」

そう言うと雄二と光一の視線は床に座り込んでいる根本に向かった。今の根本はさつきまでの強気が嘘のようにおとなしい。それを見た光一は実に楽しそうだった。

「本来なら設備を開け渡してもらい、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着くんや、皆。坂本が前言ったように、わっちらの目標はAクラスや。」

「ここがゴールやないで」

「ここはあくまで通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を飲めば解放してやるんだ」

雄二の発言に続くように光一と深紅はクラスメイトの皆を見て言った。

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問いかける。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄い言い様だけど、そうやって言われるだけのことを彼はやっている。

だからこそ周りの人間は誰もフォローしない。本人もそれは分かっているみたいだ。

「そこで、お前等Bクラスに特別チャンスだ」

昨日雄二が言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。」

「ただし、宣戦布告はしたらあかん。すると戦争は避けられひんからな。」

あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんや」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけで良かったんだが。

「ああ。Bクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

「ねもつちにはこれを着てAクラスに行ってもらおうよ」

優羽が持ってきたのは、女子の制服だった。

「安心してサイズは完璧だから！」

最高の笑顔で優羽が言った。

つぐみは休日のことを思い出したのか根本が哀れに思っていた。

「ば、バカな事を言うな！ この俺が、そんなふざけた事を！」

根本が慌てふためく。制服のサイズについてのツッコミは誰もしないようだ。

『Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間達からの温かい声援。

これを見るだけで根本が今までどついつた行動をとってきたか分かる気がする。

「随分と評判が悪いな、お前は」



「評判が悪いなら、情けは無用やで」

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

「手間が省けたな、さっそく着つけにはいるか」

「手伝うよ、光一」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ちこんだBクラス男子。  
さすがの雄二も変わり見の早さに驚いていた。

光一はすぐに我に帰ると根本の着つけにかかる。と明久も手伝いはじめた。

「ちよ、二人とも！！」

「つぐみんは近づいたら駄目だよ」

「そうです、汚れてしまいます！！」

つぐみが止めようとする。と優羽と恋が押しとどめる。  
その間に光一と明久は根本の制服を脱がせている。

「う、う、う……」

「ん？ 明久、ちょっと離れる」

「うん」

うめき声をあげる根本。それに気づいて光一はスタンガンをとりだすと明久を見て言っていると

「えいつ！」

「がふっ！」

「あ、すみません。足が滑りました」

恋が根本の鳩尾辺りに蹴りをいれて言った。

周りが恋を恐ろしいものを見るような目で見たのはいうまでもない。

「わっちが蹴りたかったやけど、しゃーないか」

「しゃーなくないからね！！むしろ深紅がしたら、根本君がポロポロになるんじゃない？！」

「それも面白くていいかも」

「面白くないからね！！」

その光景を見ていた深紅があっけらかんと言うとつぐみはツッコミをいれて言い、優羽は笑顔で言うと言つと再びつぐみはツッコミをいれていた。

漫才コンビ？とBクラスも面々は思ったとか。

「と、とりあえず、脱がそう」

「そ、そうだね」

光一と明久は根本の制服を剥いで女子の制服をあてがうと

「うーん……。これ、どうするんだろう？」

「その前に順序はどうなんだ？」

男子の制服と違い困惑していると

「私がやってあげるよ」

Bクラスの女子の一人が提案してくれた。

「そう？ 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言い様だ。

「わっちも手伝うで〜」

深紅がBクラス女子に近寄って笑顔で言った。

彼女の手にはメイクセットが携えてあったのは気にしないでおこつと明久は思った。

次に光一が深紅に消毒液を渡してから、明久と光一は根本の制服を捨ててから消毒液を使い手を洗った。

その後、恋はつぐみと一緒にAクラスの教室に向かった。  
優子と翔子に謝ってからじつくりとお説教されたのだった。  
その帰り道に根本の声が聞こえたので見てみると

長いロングのかつらにメイクされた根本が居た。

傍からみたら完璧女子になっていたので写真が売られてそうだ。

なんでも女装の天才スマイリー隈本を呼んであの姿に根本はなっ  
たとか。

本当かどうかは深紅とBクラスの面々だけが知っている。

第11問(前書き)

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、  
龍夜Mk2様

感想ありがとうございます!!

## 第11問

「よーしお前ら、席に着けー。今日は転校生がやってくる」

転校生か…どんな子かな？

「…！先生！女子ですか！？」

「女子だ」

『来たああああ！』

転校生が女子とわかった途端、クラスの男子が沸きあがった。

「……うるさいです」

『すみませんでした！』

恋ちゃんが言うとなんでかすぐに謝っていた。

「まったくお前らは……七咲、入ってこい」

「はい」

西村先生に呼ばれて、髪の高い女の子が入ってきた。

恋ちゃんと目が合うと笑っていたけど、知り合いかな？

「七咲ななつきです。」

この間引っ越して来たばかりですが、皆さんよろしくお願ひします」

「よし。じゃあ空いてる席に座れ」

「はい」

そういわれた七咲さんは、恋ちゃんの後ろに座った。

「つぐみんつぐみん、なんか面白いことになりそうだよ」

「え？そうなの？」

ニコニコ笑顔で優羽ちゃんが言うから不思議だったけど、楽しくて平和な日だといいな。

「ではこれで朝のHRを終了する。号令！」

HRが終わると七咲さんの方に集まり、お互い自己紹介をして学校案内することになった。

優羽ちゃんに抱っこされた状態はかなり恥ずかしかったけど、七咲さんが早くクラスに馴染んでくれるといいかな。

点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよ、Aクラス戦を残すのみとなったあたし達は、もうじきお別れ予定となるFクラスで最後の作戦の説明をうけていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたのにも関わらず

ここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

壇上の坂本君が礼を言った。  
なんかこそばゆいけど、嬉しいかも

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「でも、言うのは早いと思うぞ」

「せやね、そういうんは終わってからがええんよ」

「ああ、そうだな。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。」

勝って生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そっだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負の前に、皆の気持ちが一つとなったそんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったから驚きはしなかったけど、クラスの皆はかなり驚いているみたい。  
教室内でざわめきが広がってる。



『どづいつ事だ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本君が教壇を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子さんとFクラス代表の坂本雄二くん。クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然といえば当然なんだけど。

でも、どうやって勝とうとしているかはわからないんだよね。優羽ちゃんに聞いても教えてくれなかったし。

「でも、どうやって勝つのさ。霧島さんは強いんでしょ?」

「まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

アキ君の疑問に坂本君はもつともだというように頷いて肯定する。

「だが、Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう? まともによりあえば、俺達に勝ち目はなかった」

確かにそうだよな、今こうして勝ちぬいてこれたのは奇跡としかい  
いようがないし。

深紅ちゃんは特に大変だったしね。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入  
れる。」

俺達の勝ち揺るがない」

ここまで勝利を導いてきた坂本君を否定する理由はないけど、大丈  
夫なのかな？

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今に見  
せてやる」

『おおおーっ！！』

信頼の証としてクラスメイト達は雄たけびをあげた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定す  
るつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

どうして日本史なんだろう？

霧島さんが不得意というわけではないだろうし。  
何か意味があるのかな。

「ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

「小学生程度のレベルで満点ありですか」 雫

「それやと、満点が前提となって、ミスした方が負けるといった注意力勝負になるんやない？」 深紅

「正面きつてやりあうよりは勝ち目があるかもしれないけど」 つぐみ

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？」

「そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに吉井君の言う通りですね」 恋

勝ち目が少しはあるかもしれないけど、あまりにも分が悪いと思うよね。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？」

「幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「??? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「霧ちゃんなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら、なんの問題もないよ」 優羽

「雄二、あんまりもつたいぶるな。このからくりのネタを明かしてもいいんじゃないか？」 光一

クラスの皆も久遠君の言葉に頷いていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、坂本君は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？ なんだろう。

「その問題は――『大化の改新』」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？  
そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

確かに受験校なら出てくるかもしれないけど、そんな簡単な問題  
がでるかな？

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと何年に起きた とかのことですか？」 恋

「おつ。ビンゴだ、桜木の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「大化の改新って言うってと、鳴くよウグイス？ いや、良い国

創ろう大化の改新だっけ？」 光一

「645年だ！！明久でも間違えないことを間違えるな！」

そつとアキ君を見るとアキ君は視線をそらした。

うん……間違えて覚えてたんだね。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！これは確実だ。

だからその問題が出たら俺達の勝ち。はれてこの教室とはおさらばだつて寸法だ！」

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ、姫路」

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

「あれ？ 知らないの？ 雄ちゃんと霧ちゃんは私と同じ幼なじみだよ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急にそのライフルを構える！？」

アキ君の号令でクラスメイト達がアサルトライフルやマシンガンを坂本君に向けて構え始める。

「ちよ、なんで深紅も参加してるの……！？」

「あ、面白そうやったから」

そんな笑顔で言うことじゃないよね!!

恋ちゃんは驚いているし、七咲さんは楽しそうに見てるし。

あ、そうだ！久遠君は！

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様を殺す!!」

「俺が何をしたと!?!」

「待て！ それ全部俺のコレクションじゃねえか！ いつの間に抜き取った!?!」

いつも久遠君が持ち歩いているボストンバッグの中が空っぽになっていた。

みんな、一体どうやって取り出したの!?!?

「ごめん光一、でもあいつを抹殺するにはこれが良いんだ!」

「だったら弾代含めてレンタル料1人1000円出せ!」

「もう！いい加減にしなさい!」

巨大ピコピコハンマーでクラスメイトと明久を叩いて言う。

「つぐみんのピコハン裁きは凄いな〜」

「渡したかいがありました」

なんて優羽ちゃんと恋ちゃんが言ってたけど気にしないでおこづ。

「そつそれより、光一だつて木下優子と幼馴染だろ!？」

「ちよつ、それは今関係ないだろ!」

明君を除く級友が彼にも殺意を向け、半分が久遠君にも銃を構えた。

「ちよつ、ちよつと待て! 優子とはもう何でもないぞ!！」

「もうつて、まさか光一、木下優子さんといい関係だったとか!？」

「それは違うのじゃ明久。光一は姉上にフラれておるのじゃから、そんな事ありえん」

一瞬時が止まった。

「ひつ、秀吉君? 久遠君、今にも崩れそうなんですけど……?」

「え? ……あつ、すつすまぬ……」

古傷をえぐられ、その場にうずくまってしまう久遠君。その姿を見て、原因を作った張本人は罪悪感を感じる。

「……まあ、その、なんだ……光一、すまなかった」

「……昔だよ。気にするな……」

「そつか……幼馴染だからって、それが良い関係であるとは限らないだね」

「……」

その姿に何も言えなくなり、全員が銃を下した。あたしも自分の気持ちを伝えるのが怖くなってきていた。

「あの、吉井君？」

「ん？ 何、姫路さん？」

「吉井君は、木下さんや霧島さんが、好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし……えっ、どうして姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？」

それと美波、どうして君は僕に向かってなんて危険な物を投げようとしてるの！？」

「瑞希ちゃん、美波ちゃん！」

はっとなる二人はあたしを見て動きを止めた。その様子を深紅は少し呆れて見ていた。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は…

…」



『システムデスクだ！』

そして、久遠君と木下君を残してあたし達はAクラスへと向かった。

第11問（後書き）

次は闇介さんの闇太が登場します

**第12問Aクラスへと突入！！（前書き）**

ヒヨウガ様、レイン様、闇介様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！！

## 第12問 Aクラスへと突入！！

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である坂本君を筆頭に、アキ君、あたし、恋ちゃん、優羽ちゃん、瑞希ちゃん、深紅、木下君に土屋君と首脳陣勢揃いでAクラスに来ているの。

「うーん、何が狙いなの？」

現在坂本君と交渉のテーブルにしているのは木下君の双子のお姉さんの木下優子さん。

木下君達と久遠君が幼なじみなのは驚いたかも。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも無理はないよね。下位クラスに位置するあたし達が、一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑むこと自体が不自然なのだから。

当然裏になにかあると考えるのは普通だよ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。ここからが交渉の本番となる。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

坂本君が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけれど、それだけだったよ？ なんの問題もなし」

木下君と恋ちゃんの挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの（、）……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだ出されていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間をとらない限り、試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めとなっているの。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的には、あの戦争は『和平交渉にて終結』となっていてるってことを。規約には何の問題もない。…………… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法なんだよ。

「……………それって強迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

なんだか、坂本君が根本君のように見えるよ。この交渉の仕方、悪役だもん。

よくない交渉だと思っただけど。

「うーん……………わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？ 本当？」

意外とあっさりした返事に驚いて会話に参加していないアキ君が声をあげていた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

そつえば、久遠君とアキ君が根本君に女装させてたっけ。その結果で交渉が通るなんて凄いかも。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて……………お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三階勝った方の」

「いや、七対七だ」

という声が聞こえてそちらを向くとAクラスの男子生徒が立っていた。

「薄刃<sup>うすば</sup>！」

どうやら、彼は深紅の情報に乗っていた。薄刃<sup>うすばあんだ</sup>闇太  
彼は要注意人物で文月の闇という存在らしい。  
そうは見えないよね？

「ちょっと、何を勝手に」

「別にいいだろ？ 俺も暴れたいんだ」

すごい気迫、みんな動けない感じだよ。  
でも、深紅だけは平然としてるけど

「大事な交渉に口を出すのは感心せんえ？」

「いや、いい。文月の夜との戦いなんてそうそうあることじゃない  
からな」

深紅が言っていると坂本君が笑って言い、薄刃君はニヤリと笑った。

「ただし、科目はこちらが貰うぞ」

「全部はさすがにダメよ。七回中四回はそちらにあげる」

「わかった」

「交渉成立ね」

そう言つて木下さんが緊張をとこつとしていると

「……待つて」

静かな、でも凜とした声が響いてそちらを見るとAクラス代表の霧島翔子さんがいた。

「翔子か」

「代表？」

坂本君と木下さんは突然現れた霧島さんを見て呟いた。そして、なんでか霧島さんの視線がこちらに来た。

「な、何？」

あたしが聞くと答えないまま霧島さんは坂本君を見た。

「……雄二。個人的な賭けをしない？」

「断る」

坂本君が即答した。少しは悩んであげてもいいと思うのに。

「……雄二達が勝つたら諦めてもいい」



「……本当か？」

霧島さんは坂本君の答えに気にしたこともないのか言つと坂本君は聞いた。

すると霧島さんは頷いた。

「わかった。勝負は十時からでかまわないか？」

「……かまわない」

交渉が終わるとあたし達はAクラスから出て行く。

「Aクラス戦が楽しみだね」

「うん」

「どうしたんですか？つぐみちゃん」

恋ちゃんと優羽ちゃんとで歩いていると恋ちゃんは聞いてきた。

「霧島さんのあの視線はなんだつたのかなって思つて」

「つぐみん、霧ちゃんにライバル視されたのかも」

「ええ！？なんで？」

恋ちゃんと優羽ちゃんとあたしの三人でFクラスに戻るまではそんな会話していた。

深紅はAクラス戦が楽しみそうだったのは言うまでもないかな？

そつえば、なんでかわからないけど雨咲君がFクラスに来ていた

んだけど、久遠君と何か話してみたい。  
なんだったのかな？

**第12問 Aクラスへと突入！！（後書き）**

感想と評価をお待ちしております

### 第13問Aクラスとの戦闘（前書き）

リザク様、レイン様、闇介様、ヒヨウガ様、秋雨様

感想ありがとうございます！

### 第13問 Aクラスとの戦闘

「改めてみると、すごいな」

「だよな」

「ここまで大きいとは」

「広すぎて眠れそうもなさそうや」

「眠る気ですか!？」

皆でAクラスの教室を見てそれぞれ言い合っていると、深紅は不服そうに言い、恋はツッコミをいれていた。ここにも振り回される存在が増えたのはいうまでもないかと。

「両名とも準備は良いですか？」

高橋先生は立ち会いし、眼鏡を押さえて代表達に聞いた。

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラスだ。どこか緊張した空気が満ちる。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「Fは当然、俺からだ」

「アタシが行くよ」

Fクラスからは切り込み隊長こと深紅と明久の相棒の久遠君が。久遠君が出るとAクラスからは木下君のお姉さんにして、久遠君と渚の幼なじみの木下優子さんが出てきた。

「科目は何にします?」

「じゃあ、物理に……」

「ちょっと待って」

選択科目の時に木下さんが割り込んだ。それも憤怒の表情だったから、余計怖いよね

「? ……どっ、どうしたんだ、優子?」

「ちょっと話があるんだけど、良いかな? 秀吉と渚も」

「えっ!? あっ、姉上? せめて、この勝負が終わってからで構わんかの?」

「そうそう、てか…私は関係ないと思うのよ!」

「じゃあ光一は後でいいわ。大丈夫よ、すぐ終わるから」

「いや、ちょっと!聞いてる?」

そう言うと渚ちゃんと木下君を連れて教室から出て行った。  
二人とも大丈夫かな？

「アンタ達、Cクラスで何してくれたのかしら？  
どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になっ  
てるのかなあ？」

「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！  
ちがつ、その関節はそっちには曲がらなっ……！！」

「だから、人の話を聞けっ……！！」

スッパーン！！

教室の外で何か騒いでいるかと思ったら渚ちゃんの怒った声が響い  
て何かで叩かれる音がした。

久遠君を見るとなにやら、理解したのかため息をついてた。  
うっん…幼なじみだからこそ、分かるのかな？

ガラガラ！！

「あゝ、頭がガンガンするわ」

「人の話を聞かないからでしょ。後、秀吉も反省しないとダメだか  
らね？」

「うむ、わかっておるのじゃ」

三人揃って教室に戻ってきた。

木下さんは頭を押さえてて、渚ちゃんは呆れながら言うと木下君にも忠告していた。  
「なんだか、保護者みたいだな。」

「……改めて、教科は物理でお願いします」

「さて、それじゃ。始めましょうか」

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」」

お互いが立ち位置につくと召喚獣を召喚した。

《Fクラス 久遠光一 物理 498点 VS Aクラス 木下優子 物理 398点》

毛皮のジャケットに右手にライフル、左手にショットガンを持った久遠君の召喚獣と西洋鎧に、ランスという装備の木下さんの召喚獣が現れた。

点数はこちらが勝ってるけど、油断は禁物だね。

「行くわよ！」

ランスを持って突撃してくる木下さんの召喚獣。それに照準を合わせてショットガンをぶっ放すと木下さんの召喚獣がふっとんだ。

「凄い！」



「久遠君の武器が前と変わってるけど、どうなってんのかな？」

「わっちがそうしたんよ」

「勝手にそうして怒られませんか？」

アキ君は驚きながら言うつとあたしは気になったことを呟く。

そしたら深紅は笑顔で言い、恋ちゃんも苦笑いしながら訊いた。

「平気やて」

「いえ、でも」

「本人は喜んでおるんやから」

深紅の台詞に久遠君の方を見ると本当に喜んでいた。

銃の反動も少なくて扱いやすくなってるのが、あのショットガンを使いやすくしているのだろう。

「よし、良いぞ久遠！」

「やったれFクラスの切り込み隊長！」

「お前をつつた木下優子に、目にも物を見せてやれ！」

ドスッ！！

「ちょっと、光一に何を言ってるのよ！」

「す、すまん。禁句だったな」

渚が須川君に怒ってるみたい。

確かにあの発言はどうかと思うよね

「あの、木下さん。フッタというのは、どういう事ですか？ 久遠君と交際されているのでは？」

「なっ！ ちつ違うわよ！ あんな犯罪者臭いバカなんて、知り合いどころか接点がある事すら嫌だっていうのに！！」

ドスッ！！

「こ、光一！！？」

「……………」

「すみません！この戦いは棄権します！」

「手伝うで、渚」

久遠君の状態を見てこれはやばいと認識したのか渚ちゃんが言ってる深紅と一緒に久遠君を運びだした。

でも、なんでお姫様だったの？

Fクラス棄権につき、Aクラス勝利に終わった。

「あの、木下さん。もっと言い方というものが……………」

「……優子、今の言い方は酷過ぎる」

「あの、そういう意味で言ったんじゃないくて、その……」

「酷すぎるだろ、木下」

だが木下さんに対して、Aクラスの面々の反応は冷たかった。  
一回戦目はAクラスの勝利となった。

「次の人出てください」

「私が行きます。Aクラス佐藤美穂です」

眼鏡をかけた少女が頭を下げて言う。

「次は明久、頼む」

「わかったよ」

「え、あたしが行くよ!」

「わ、わたしも!」

「雨宮も瑞希も落ち着いてくれ、まだ、出すわけにはいかないんだ」

「でも」

「大丈夫だよ」

明久はつぐみに微笑んで言う。

「雨宮。幼なじみを信じてやれ」

「……うん」

「頑張れよ、明久」

「うん。じゃあ、行ってくるよ」

明久が出ると相手は眼鏡をかけた少女は明久を警戒しながら見る。

「いくよ。試獣<sup>サモシ</sup>召喚！」

「負けません。試獣<sup>サモシ</sup>召喚！」

【Fクラス 吉井明久 物理 130点 VS Aクラス 佐藤美穂 物理 389点】

これだと、勝ちにくいかもしれない。アキ君……大丈夫かな

「吉井君でしたか。よくぞ、ここまで高めましたね」

「つぐみと神埼さんと光一のおかげだよ」

それを聞いてつぐみは嬉しそうに笑い、深紅はニツと笑ったのは言うまでもない。

美波と瑞希が羨ましそうにしていたのは、見てない振りです。

「アキ君」

「……」

雄二が近寄るとワシャワシャと不安そうなつぐみの頭を撫でる。

「ふにゃあああ!!!?!?」

「おー、撫で心地最高だな」

「それってちつちやいって言いたいの!?!?」

「丁度いい場所にあるからな」

「あたし、ちつちやくないよ!!!」

「雄ちゃんばかりずるい!!!」

「そうです! つぐみちゃん親衛隊の前でそんな愚かな行為をするなんて!!!」

小柄な体で必死に抵抗するが、坂本君は止めずにもつと撫でる速さをあげるていると恋と優羽ちゃんが坂本君に怒っていた。

「いや、ちつこいから、つい」

「ちつこくないやい!!」

「坂本君、覚悟はいいですか」

「そうだよ、つぐみんに触れたのは許せないな」

なんだか、不穏な空気が満ちてきたよ。

これってあたしの所為だよな!?

一方明久達の方では

「でやあああ!!!」

「はああああ!!!」

明久の召喚獣の武器の木刀と相手の召喚獣の槍が火花を散らす。

お互いの点数は削られて行くが、お互い一步も引かない様子だ。

【Fクラス 吉井明久 物理 120点 VS Aクラス 佐藤美  
穂 物理 242点】

こっちの方がかなり削られていっているようだが、明久の目には強い光がある。

「まだまだ!」

佐藤さんの召喚獣がこっちに向かってくるが足払いしてその上に追いつく打ちの打撃を与えるが、相手も負けていられないのか明久の召喚獣に蹴りをいれると下がる。

そして、お互いの均衡が続くなか、明久の召喚獣の点数と相手の召喚獣の点数があとわずかなくらいになる。

ここでケリをつけなければならぬ。

「これで終わらせる！」

「こちらが勝ちます！」

両方の召喚獣がツツコム。これで勝敗が決まった。

「はあああつ！！！！」

【Fクラス 吉井明久 物理 0点 VS Aクラス 佐藤美穂  
物理 1点】

「勝者、Aクラス」

なかなかきわどい戦いだったが、お互いいい勝負をしたのか晴れやかだった。

「ごめん、まけちゃった」

「いいの！アキ君は頑張ったよ！」

「そうやで、負けても次に誰かが勝てばええんやし」

「そうだぞ」

「明久は頑張ったと思うぞ」

「そうだよ、アッキー！」

「吉井君は皆の為に頑張ったんですから、気にしてはダメですよ」

出迎えたあたし達はアキ君を見て笑顔で言う。

みんなは明久が負けたのに笑顔で出迎えている、Fクラスだからの特性なのかもしれないな、とあたしは思ったよ。

渚ちゃんはそんなあたし達の様子を楽しそうに眺めていたみたい。

二回戦目もAクラスの勝利だったけど、まだ…頑張れそうな雰囲気があった



### 第13問Aクラスとの戦闘（後書き）

光一にはショットガンを持たせたかったんです！！

うーん…これだと全員が活躍できそうもないかも（苦笑）

第14問（前書き）

ヒヨウガ様、リザク様、仮面ライダー  
レイン様、門矢綺羅様、闇介様  
様、秋雨様、エミ様、

感想ありがとうございます！！

## 第14問

「では次の方、どうぞ」

「……（スック）」

ムツッリーニがここで立ちあがる。

相手は二勝しており、後二点取られるとこちらの負けだ、負けるわけにはいかない。

「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

誰もが誰だろうと考えていると女の子が答える。

「一年の終わりに転入してきた、工藤愛子です。よろしくね」

「科目は何しますか？」

「……保健体育」

高橋先生の問いにムツッリーニが答える。

この科目はムツッリーニの最強の武器となっている。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子は余裕そうにムツッリーニに話しかける。

「でも、僕だつてかなり得意なんだよ？……君とは違って、実技でね。」

「……！（ブシャアアア！！）」

愛子の言葉に興奮してしまったのかムツツリーニは鼻血を吹きだす。

「ムツツリーニイ！！！！」

「今のごとで興奮できるのかな？」

「さあ？わうちにはわからひんよ」

「実技つてなぐに？」

「そうですよ！」

あたしが呟くと恋ちゃんに肩を掴まれて言われた。優羽ちゃんはわからないのか不思議そうだった。

驚いたというか、なんか知ってはいけないというような雰囲気がある恋ちゃんにはあったかな。

「そのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？つて……キミの場合はそのちっこい子の方が嬉しいかな？」

「な、何言ってるですか／＼／＼！！？ 別にアキ君とはそういうんじゃない……でも……」

「ちよ、つぐみ！落ち着いて!!」

「あつ、俺も混ぜて。出来れば実技での教授を希望したい」

「良いよ……って、もう復活したの？」

「元々フラれてる訳だし、優子の性格もガキの頃から知ってるから、これ位どうという事はない」

あたしが工藤さんの台詞にオーバーヒートを起こしていたら、久遠君が工藤さんに声をかけていた。

でも、その久遠君の台詞に木下さんがなんか複雑そうな表情をしているのが見えた。

「じゃあ光一も交えて、是非ご教授を……」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらなのよ!」

「美波ちゃん、その言い方はないよ」 あたし

「そうですよ、吉井君に悪いです」 瑞希ちゃん

「てか、勝手に決め付けるのはよくないと思いますよ」 恋ちゃん

「みなみん、つぐみんの言う通りだよ」 優羽ちゃん

あたしと瑞希ちゃんと恋ちゃんと優羽ちゃんは美波ちゃんをジト目で見て言った。

勝手に決め付けてたらその人の人生台無しになっちゃうもの。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣<sup>サモン</sup>召喚っと」

「……………試獣<sup>サモン</sup>召喚」

忍び装束に2本の小太刀を持つ土屋君の召喚獣。

そして工藤さんの召喚獣は、セーラー服に巨大な斧を持ち、その腕には腕輪も装備されてる。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣が、腕輪を光らせて踏み込む。

斧が雷光を纏い、高得点で得たスピードで距離を詰め飛び上がった。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

そして豪腕で斧を振るう。危ないと思ってついあたしは叫んでいたんだけど

「土屋くん!」

「……………加速」

両断されてしまかうかと思った直後、土屋君の腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え?」

相手の戸惑う顔。でも、深紅はワクワクしながらそれを見ていた。つぐみ達にはなにが起こったのか、わからないままだ。

「……………加速、終了」

ボソリと康太が呟くと一呼吸おいて愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

【Fクラス 土屋康太 保健体育 572点 VS Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点】

この戦いは土屋君の勝ちで決まった。

「そ、そんな……………！この、僕が……………！」

工藤さんは膝をついている、相当ショックだったみたい。

三回戦目はFクラスの勝利、工藤さんには申し訳ないけど…勝ててよかったかな？

「これで二対一だね」

「ああ、だが。油断はできない」

「まだ、他の一騎討ちがあるもんね」

「ここが正念場ですね」

「ワクワクするね」

「一先ず終わった戦いに安心してから坂本君と話をする。負けるわけにはいかないもんね。」

「次の方は誰ですか？」

「僕が行こう」

「なら、こっちへ。わっちが行くえ」

「あちらはAクラスの学年次席だ。姫路がいたら、三席にいたほどの実力者。」

「頼んだぞ、神埼」

「ほいほい」

「（心配だ（汗））」

「無理するなよ」

「わかつとるで、久遠君」

「楽しそうに進んで行く深紅に不安になるFクラスの面々。だけど、あたしと恋ちゃんと久遠君と優羽ちゃんは勝つと信じていた。」

「科目は何にしますか？」

「総合科目で」



「ちょっと！」

「大丈夫だよ」

「そうだけ、明久」

「つぐみに光ー？」

「なんでかな、深紅ちゃんなら。勝てると思えるの（ニッコ）」

「俺も同意見だな」

そう言うとは故か倒れる人が続出して優羽ちゃんと恋ちゃんに抱きしめられちゃった。  
なんでかな？

「明久に光ー」

「言わないで、わかってる」

「無自覚は恐ろしいな」

この光景を見ていたアキ君と坂本君と久遠君は何か話をしていただけ、何していたのかな？

「つぐみんかーわーいーいー！！！」

「妹にしたいです！！！」

「うにゃああ！！？、なんで撫でるのー！！！」

優羽ちゃんと恋ちゃんに頭を撫でられたんで離れようとしたんだけど、全然離れられないんだよ!!!  
瑞希ちゃんに助けを求めただけど、謝られた。渚ちゃんはよそ見をしていて気づいてないし。

「では、始め!」

「サモン試獣召喚!」

「サモン試獣召喚や!」

お互いの召喚獣が魔方陣から出てくる。

久保君の召喚獣は戦士で武器はせんぶ戦斧だ。

深紅ちゃんの召喚獣は赤いドレスに歪な剣の装備でとても強そうに見えるよ。

「さあ、やるつかえ」

「……っ!」

深紅ちゃんの目が鋭くなる。それに久保君はおじけづくこともなく、召喚獣を動かす。

「ここまでの力あるのになぜFクラスへ?」

「Fクラスの方が楽しそうだから」

戦っている時に会話するのも凄いよね。あたしにはできないかもし

れない。

深紅ちゃんの召喚獣はアキ君より、機敏な動きで相手を翻弄し、まるで踊るような戦いかたでした。まるで意志があるかのような感じに見える。

「まだまだや！」

「くっ！」

深紅ちゃんの召喚獣が剣を振り回すと【ロサ・イクトウス花散る天幕】を使用した。久保君の召喚獣は一撃で撃破されたのだ。

「なかなか、楽しめたえ」

「君は強いな」

《Fクラス 神埼深紅 総合科目 5478点 VS Aクラス

久保利光 総合科目 3997点》

「勝者、Fクラス」

「ただいま」

『お帰りー！』

深紅は笑顔で戻るとあたし達は駆け寄る。もちろん久遠君も近寄ったよ

「これで同点か」

「二対二やね」

「まだまだ、油断はできないな」

そう、まだ三戦の戦いが残っているのだ。

選択科目の譲渡に気をつけながらいかないとヤバいだろう。

「後、二勝しないと勝てないね」

あたしが言つとみんなも頷いてこれからの戦いに不安を抱いていた。  
四回戦目もFクラスの勝利となった。

第14問(後書き)

感想と評価をお待ちしております!!

第15問(前書き)

ヒヨウガ様、秋雨様、レイン様、仮面ライダー  
様、リザク様

感想ありがとうございます!!

## 第15問

### 第五回戦目

「次の人は誰ですか？」

「私が行きます」

「なら、俺が行こう」

雫ちゃんが前に出て言うとAクラスからは薄刃君が出てきた。  
どこか緊張感があるのは気の所為だろうか？

「科目は何にしますか？」

「古典でお願いします」

雫ちゃんは先生の問いに答えた。

科目が決まると先生は薄刃君と雫ちゃんを見て

「では、始めてください」

「「サモン試獣召喚！」」

薄刃君の召喚獣は白いフード付きのコートでフードはかぶらない。

武器は双剣で、右手の剣は鋭く細いあまり頑丈じゃない剣、左手の剣は幅広の頑丈な切れ味が鈍い剣といった感じだった。

対して雫ちゃんの召喚獣はこの制服がモデルかわからないけど、

白が基準の制服を着て頭に緑色のヘアピンを着けていた。

獲物は……槍……いや、ガンランス？

ともかく、槍と銃をあわせた感じの武器みたい、銃槍という感じだったよ。

「文月の夜、ヤミ。参る！」

「行きます」

薄刃君の召喚獣は地を蹴って、雫ちゃんの召喚獣に双剣をで攻撃しようとしていた。

雫ちゃんの召喚獣は槍でその攻撃を防ぐ。

遅れて頭上に点数が表示された

『Fクラス 七咲雫 古典 203点 VS Aクラス 薄刃闇太  
古典 138点』

お互い腕輪の装備はできてないみたいだけど、ここからどうなるかはまだわからないからね。

雫ちゃん、大丈夫かな。

「『放電』」

ジジジジジ…

剣の先より放射状に雷が走る。それが雫ちゃんの召喚獣にヒットし



た。

でも、点数は変化なし。なんの効果なんだろう？

『Fクラス 七咲雫 古典 203点 VS Aクラス 薄刃闇太  
古典 118点』

「（点数は減ってない…でも、何か違う意味があるのかもしれないね）」

雫ちゃんは何か考えているみたいだったけど、何を考えているんだろう？

「薄刃：やるやん。模擬戦でもええから、戦いたいで〜」

「戦いか…俺も戦ってみたいな」

ワクワクしてる深紅と久遠は戦闘を見ながら喋っていた。  
本当に似たもの同士だね。

「やあ！」

雫ちゃんの召喚獣が槍を横薙ぎにするけど、動きにズレがあった。  
薄刃君の召喚獣が左手の剣で受け、右手を突き出す

「くっ」

『Fクラス 七咲雫 古典 127点 VS Aクラス 薄刃闇太  
古典 118点』

「この攻撃はタイムラグを発生させていますね」

「気づくの早いな、その通りだよ」

薄刃君の召喚獣にそんな能力があるなんて、驚いたよ。  
ノイズでも発生しているのかな。

雫ちゃんは一旦離れると銃槍から弾丸が放たれて相手を撃ち抜いた。

「銃としても使えるのかよ」

『Fクラス 七咲雫 古典 127点 VS Aクラス 薄刃闇太  
古典 78点』

お互いの点数が削られているけど、雫ちゃんの方が点数は高いみたい。

薄刃君は銃の弾を避けるけど、雫ちゃんは照準を合わせて撃ってる。  
あれが銃形態なのかな？

でも、連射して弾は持つのだろうか

「弾切れですか」

あ、リロードしてる。

今の状態だと、かなりやばいよね!?

「その隙は逃さないぜ」

「くっ!」

案の定、その隙をついて薄刃君が接近してきた。  
銃槍に戻して防ぐ。

「なんや、ハラハラ展開やね」

「もう、何呑気な事言ってるの!」

深紅は戦闘を見ながら言うので思わずあたしはむっと思いながら言う

「はあっ!」

「くらえっ!」

双剣で連激してる薄刃君と銃槍で攻撃をしのいでは、攻撃する。

「ちっ!」

「今ですっ!」

薄刃君の召喚獣が銃槍の攻撃を避けて下がるとそのタイミングを逃さないように銃槍から弾丸を放った。それが薄刃君の召喚獣に当たると勝敗がついた

『Fクラス 七咲雫 古典 127 VS Aクラス 薄刃闇太  
古典 0点』

「勝者、Fクラス」

五回戦目はFクラスの勝利。

「やったあ」

「やりました!!」

皆で雫ちゃんの勝利を喜んでいると

「ちょっと、薄刃。どこに行くのよ!」

「しばらく、旅にでるんだが」

「なんで、そうなるのよって、無視していくな!」

Aクラスでは、なんだか騒がしい事が起きてるのは気の所為かな?

「次の人は誰ですか?」

「ワシが行こう!」

「秀吉君、頑張って」

「う、うむっ」

Fクラスの方から6人目は秀吉が出ると相手の6人目は女の子が出たが、

こちらは150cmのくらいだ。

「綺麗で身長が高い」

「羨ましいのか？」

「とうぜん！」

もはや苦笑いするしかない雄二だった。

「秀吉君だっけ、よろしくねん」

「うむ、よろしくなのじゃ」

お互いが固い握手をした

「科目は何にしますか？」

「英語で」

高橋先生に聞かれて女の子が選択する。

「では、始めてください」

「行くぞい！試獣<sup>サモシ</sup>召喚」

「行くよ、試獣<sup>サモシ</sup>召喚」

【Fクラス 木下秀吉 英語 60点 VS Aクラス 狐邑梨来  
英語 232点】

二人が召喚すると魔方陣からお互いの召喚獣が出現する。そして頭上に点数が表示された。

木下君の召喚獣は袴に胴着だった、相手の方は狐の耳と尻尾が生えた着物のチャイナドレス版の格好をした召喚獣だった。

「うわ!？」

「点数高い!」

さすがAクラス、点数も高い。これは一瞬でケリがついてしまうのか。

「負けるわけにはいかんのじゃ!」

「わたしもそうだよ」

一斉に動きだすお互いの召喚獣。得意の鉤爪で秀吉を劣勢させる。秀吉の召喚獣も薙刀で応戦するが押し切られてしまい、こちらが負けた。

「すまぬ。負けてしまったのじゃ」

「相手が強かったし、操作もあっちが上だからね」

「だが、よく頑張った」

「そ、そうかの?」

「うん!負けてしまったけど、秀吉君は強くなれると思うよ」

「あ。ありがとうなのじゃ」

秀吉は涙ぐみながら言つと鼻血を噴出する。Fクラス男子数名がでた。  
こんな終わりかたもあり、だよな

## バカテスト 第十問

### 問題

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋&七咲雫の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

その通りです

神埼深紅の答え

『シルヴァラント、テセアラ、テレジア』

教師のコメント

先生もテイルズ系は好きです

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

『香川、徳島、愛媛、高知』



教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

久遠光一の答え

『魏、呉、蜀』

教師のコメント

先生も三国志は好きです

遠月優羽の答え

『 バカには見えない文字で書いてます

教師のコメント

後で職員室に来なさい

第16問(前書き)

レイン様、秋雨様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます!!

## 第16問

「最後の一人どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子が出る、こちらは

「俺の出番だな」

Fクラス代表の坂本雄二君。

「科目はどうしますか？」

「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言に、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

雄二のねらいが当ればこちらは確実に勝てる。当然なかつたら、こちらが負けるだけ。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待ってください」

ノートパソコンを閉じて、高橋先生は教室を出て行く。

「雄二。あとは任せたよ」

「負けたらゆるさへんえ」

「へマするなよ」

アキ君と深紅ちゃんと久遠君が坂本君に近寄って言う。  
これが最後の戦いなんだよね

「頑張ってくださいね！」

「雄くん、ふおいとー！」

「ああ、任された。」

恋ちゃんと優羽ちゃんも応援するように坂本君に近寄って言う。  
雄二はニヤツと笑って言うとまたあたしの頭を撫でる。

「って、またなのー!!!??」

「撫でごこちがいいなー」

「あ、坂本君！つぐみちゃんに撫で撫でするなんて、ずるいですっ  
「！」

「そつだよ！ つぐみんに触れるのなら、つぐみんファンクラブ会員？1と？2を倒してからにしてよね！」

あたしが坂本君から逃れようと身をよじると、恋ちゃんと優羽ちゃん、不機嫌そうに坂本君に近寄って言う。雫ちゃんは渚ちゃんとか、話していて助けをもとめれそうもなかったよ。

「……………」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

土屋君は坂本君に近寄ってVサインをしていた。

坂本君はお礼を土屋君に言う。  
すると、

「……………」

土屋君は口の端をあげて元の場所に戻る。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

高橋先生が戻ってきて、雄二達は教室を出る

\*\*\*\*\*

『問題を配ります。制限時間は五十分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかっているぞ』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

「吉井君、いよいよですね」

「そうだね。いよいよだね」

アキ君と瑞希ちゃんは緊張しながら会話していた。

「勝てる、かな?」

「どうだろうな、しっかり勉強してたら」

「大丈夫やろうけど」

あたしの呟きに久遠君と深紅ちゃんは返事をして言う。  
他の皆はディスプレイを見てる。

「これで、あの問題がなかったら」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね」

瑞希ちゃんが不安そうに言うとアキ君は緊張しながら言い、

「でも、もし出ていたら」

「私達の勝ちですね」

優羽ちゃんはどこか楽しそうに言うと恋ちゃんは笑顔で言う。  
誰もが固唾をのんで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

( ) 年 平城京に遷都

( ) 年 平安京に遷都

次々と問題が表示されていく、アキ君はわかっているのか。  
自分でもわかると呟いていた。

( ) 年 鎌倉幕府設立

( ) 年 大化の改新

「あ………！」

次の問題が出たら、瑞希ちゃんが声をもらった

「で、出てたよ！」

「やった！」

あたしも嬉しくて喜んでいたら、アキ君に抱きしめられてた。

「これでわっちらの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったFクラス全員の言葉。

「最下層に位置した僕等の、歴史的勝利というわけだな」

『うおおおおっ！！』

教室を揺るがす歓喜の音が響く

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》 VS 《Fクラス 坂本雄二

53点》

卓袱台から……みかん箱に代わってしまった。



## バカテス 第十一問

問 次の( ) に正しい年号を記入しなさい

『 ( ) 年 キリスト教伝来 』

霧島翔子の答え

『 1549年 』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993年 』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

神埼深紅の答え

『 1192 』

教師のコメント

良い国作ろう鎌倉幕府ではありませんよ。  
後で、職員室にきなさい。

吉井明久の答え

『 1192 』

教師のコメント

貴方もですか。

第17問(前書き)

レイン様、ヒョウガ様、今宵闇介様、秋雨様、リザク様

感想ありがとうございます!!

## 第17問

「雄二、てめえコラ!!」

視聴覚室の扉が開かれ、Fクラスの武装集団が押し寄せる。

「4対3で、Aクラスの勝利です」

それに構う事なく、高橋女史はそう宣言。

そのそばでは、座りこむ坂本君とその傍で坂本君を見下ろす霧島さん。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！ 歯をくいしばれ!!」

「待て明久、その前に八手の巢にするべきだ!!」

掴みかかるうとするアキ君を制し、両腕や肩、背にコレクションを重装備した久遠君が両手の銃を坂本君に突き付ける。

アキ君はそれを見て頷き、先程久遠君から渡されたアサルトライフルを坂本君に突き付けた。

「アキ君と久遠君、ダメだつてば!! 深紅ちゃんと優羽ちゃんも参加しようとしなない!!」

「いややわ、ほんの冗談やん」

「そうそう」

あたしは慌ててアキ君と久遠君に近寄って言うと深紅と優羽を見て注意した。

「吉井君、落ち着いてください！」

「光一も落ち着きなさいよ！」

あたしに続いて瑞希ちゃんがアキ君を、優子さんが久遠を制し、坂本君から引きはがそうとした。

「大体、53点って何！？ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃ……」

「いかにも、俺の全力だ」

「糠喜びさせんな、このゴリラ野郎……」

「そうやで、ゴリラ野郎」

アキ君が坂本君の襟をつかんで怒りながら言うと久遠君はスタンガンを取り出して、坂本君につきつける。深紅は楽しいからか、坂本君をいじっていたよ。

だがそれは、美波によって阻まれる。

「吉井、久遠、落ち着きなさい！ アンタ達だったら、30点も取れないでしょうが……」

「それについては否定しない！」

久遠君とアキ君の声が、寸分の狂いもなく合わさった。双子みたいに息が合うね。

「久遠君と吉井君……双子みたいに息があいますね」

「私も同意見ですよ、恋」

その様子を見ていた恋ちゃんと雫ちゃんは呟いていた。

「それなら、坂本君を責めちゃダメっ！」

「くっ、4人とも何故止めるんだ！？このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

「待て明久、まずは逆さに吊るし上げて俺のコレクションと投げナイフ的にしないと」

「待ちなさい光一！前半はともかく、後半が明らかに処刑でしょう！」

あたしと瑞希ちゃんと優子さん、3人に引き留められアキ君と久遠君は大人しく(?)引き下がってくれた。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

「潔いのは結構やけど、あまりにも情けなさすぎひん？ 手を抜いて負けるやなんて」

「……ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの台詞に土屋君は突然撮影準備をしはじめた。約束って……………あの時のことかな？

「え？ どういう事？」

「霧島さんの提案で、負けた方は何でも言う事を聞くなって約束をしたんよ」

「……………成程ね」

久遠が不思議そうに言うので深紅ちゃんが笑顔で説明していた。お似合いの二人って感じで羨ましいなあ。

視線を戻すと瑞希ちゃんに視線をやった後に坂本君に視線を戻した霧島さんが……………

「……………雄二、私と付き合って」

と、きつぱりはっきりと言った。

「霧ちゃんは本当に一途だね」

「優羽ちゃん、知ってたんだね」

のほんといつた感じで言う優羽ちゃんを見て言うと

「幼なじみだからね」

「そっか」

ニッコリ笑って言うのはいいけど、あたしを抱きしめるのはやめてほしいな。

「あ、遠月さん。ずるいですっ!」

え、恋ちゃんもなの!?

優羽ちゃんに抱きしめられたまま、恋ちゃんに抱きしめられたあたしはどうしたらいいのかな?

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか?」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

アキ君はいまの状況に混乱しているようで、深紅ちゃんは久遠君に近寄っていた。

「その話は何度も断っただろ? 他の男と付き合う気はないのか?」

「……私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

霧島さんは一途に坂本君を想っていたのが、色々な噂がついたわけなんだね。  
噂って凄いなあ。

「拒否権は？」

「雄二、んなもんある訳ないだろ」

「……その通り。約束だから、今からデートに行く」

坂本君の質問を久遠君が呆れたように言うと霧島さんは頷いて坂本君の手をひいて歩き出した。

「離せ！ やつぱりこの約束はなかったことに！」

坂本君はそのまま霧島さんに引きずられていかれた。  
その場には沈黙が流れていた。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？ 鉄人……鉄村先生？ 俺たちに何か？」

「そこは西村先生だよな！？ そんな斬新な名前はダメだよ！！！」

久遠君の台詞にあたしは思わずツッコミをいれていた。

「あ、そうやったね。すんまへん、鉄人先生」



「神崎さんも悪ノリしすぎです!!」

笑顔で言う深紅ちゃんに恋ちゃんがツツコミをいれた。

「雨宮、桜木。……苦労するな。……今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

あたしと恋ちゃんに言うつと西村先生はFクラスの皆を見て言った。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「……なにいつ?!?!?」「」「」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに、グウの音も出なかった。

「吉井と久遠、そして坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“過激派筆頭”。ならばに“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ! 何としても監視の目を掻い潜って、今ま

で通り楽しい学園生活を過ごして見せます!」

「その通り! 一筋縄でいくとは思わない事ですね。村人先生」

「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか? それと久遠、勝手に斬新な名前をつけるな」

そんな気はないのはポーズだけだよ、ね。  
そう思うコトにしよう!

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

「2時間か、頑張ってみまひよか」

「うえっ!?! ……けど、ちと頑張ってみるか? どうせ3ヶ月何もできないんだし」

「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

それぞれやる気を出す久遠君とアキ君と深紅ちゃん。  
それでいいの!?

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか?」

「ありません!」

「きっぱり断言しないでよ! ……てか、堂々と言い放つことじゃない

でしょ!？」

思わず、久遠君とアキ君にツッコミをいれていたあたしがいた。

「久遠君、ちよつとええ？」

「?なんだ。深紅」

皆が帰ろうとしていたら深紅ちゃんが笑顔で久遠君に近寄っていた。

「あんな、久遠君のこと。名前で呼んでもええ？」

「え？」

深紅ちゃんの突然の発言に久遠君が呆然としていた。

「ダメなん？」

「いや、そんなことはない」

小首をかしげて深紅ちゃんが聞くと久遠君が答えた。

「ほな、決まりやな。光一君って呼ばせてもらうで」

にんまりと笑顔で言う深紅ちゃんは本当に嬉しそうに見えた。

「あ、それは映画のチケットやね」

「ん?ああ……行くか？」

ふと目に入った映画のチケットを見て言うと久遠君は映画のチケットを見せて聞いた。

「ええん？ 他に誘いたい子とかおつたんやない？」

「別にいいさ」

深紅ちゃんが聞くときっぱりと久遠君は答えた。

これって……デートだよな？

あ、優子さんが複雑そうな顔してるよ。

「ほな、秀吉はんを介抱してからいきまひよか」

「そうだな」

久遠君と深紅ちゃんってお似合いの二人だよな。

「光一、秀吉のことは。私と優子に任せて、あんたはデートでも楽しみになさいよ」

「ちよ、渚」

久遠君に渚ちゃんが近寄って言うと優子ちゃんが慌てて言う。  
でも、渚ちゃんはスルー。

「そうだな、行ってくる」

「ほなな」

久遠君は深紅ちゃんと一緒に歩き出した。

「買い物くらい、私が付き合っつわよ。それに、今はほっといてあげなさいよ」

「うう……わかってるわよ」

渚ちゃんは見送ると優子ちゃんを見て呆れながら言い、どこか納得がいかないような優子ちゃんが返事した。

「つぐみ、帰ろうか」

「え？うん」

アキ君はいつものまにか隣に来ていてあたしに笑顔で言った。

瑞希ちゃんと美波ちゃんから嫉妬の視線がきてるけど、恋ちゃんと雫ちゃんに引きずられていかれてたよ。

アキ君に手をひいてもらいながら歩くのは少し恥ずかしいけど……嬉しいという気持ちもあった。

このまま買い物して家まで帰るのもいいかな？

「じゃあ、優羽ちゃん、恋ちゃん、雫ちゃん。またね！」

「うん、ばいばい」

「また、明日です」

「またね」

みんなで靴箱まで行くとそれぞれの帰路を歩き出した。

こうして、Aクラス戦は幕を閉じたのでした

## バカテスト 第十二問

問題

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希と姫路亮と桜木恋と雨宮つぐみの答え

『Peace Keeping Operations（平和維持活動）の略。国連の韓国のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の事。』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば、覚えておくといいでしょう

吉井真希の答え

『PK』

教師のコメント

それはプレイヤーキラーの略では

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsumi Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人たちです。

久遠光一の答え

『PK Offsideの略』

教師のコメント

それはサッカーです

## 閑話 映画編

試召戦争が終結してからの翌朝のことだ  
噴水の前で光一は深紅を待っていた。

「よくよく考えると、FFF団はどうして攻撃してこなかったんだ？」

ふと、待つてる間に気になっていることを呟くと

「そんなん、わっちが脅したんにきまっとるやろ」

けたけたと笑いながら深紅は光一に近寄って行った。

服装は着物だった。真紅の着物には蝶の絵がついている。

「そうなのかって……!!」

深紅の声に光一は振り向くと驚いた表情をした。

「?どないしたん?」

深紅は不思議そうに光一に聞いた。

「その格好」

「ああ、これ…普段着でもあるんよ」

光一が深紅を見て言うと深紅は笑顔で言う。

どうやら、家では着物を普段着として着ているようだ。



「気まぐれでワンピースとか着たりするんやけど……どうも似合い  
そうもないんよ」

苦笑いを浮かべて深紅は言った。

スタイルもよく、容姿も良い彼女に似合わない服などないと思うの  
だが。

彼女自身はそう思っていないようだ。

「そんなことはないと思うけどな」

「そうけ？　なら……今度は違う服を着てくるで」

光一が言うつと深紅はニツと笑って言った。

そして、映画館に二人で向かうと

「あれ、つぐみに明久やん。」

「偶然だな」

深紅と光一はつぐみと明久を見つけると近寄って声をかけた。

「あ、深紅ちゃんに久遠君！！」

「光一に神埼さん、デートなの？」

つぐみは驚きながら言うつと明久は小首を傾げて聞いた。

「うーん……デートといえばそうかもしひんな」

「なんか微妙だな」

深紅は苦笑いしながら言う。光一も苦笑いをして言う。  
二人で出掛けてる時点でデートだと思うが、二人はそういうのした  
ことがないからよくわかっていなかったりする。

男子 side

「そっか…所で、光一も映画館？」

「ああ、明久もか？」

明久は苦笑いを浮かべてから尋ねると光一も頷いて聞き返す。

「うん、日頃の感謝をこめてね」

「明久らしいな」

笑顔で明久が言うと光一は笑って言う。

二人はいつまでも仲の良い相棒としているだろう。

もう一方の女子 side では

「映画館ってことは、試召戦争が終了した時のチケットのこと？」

「そうや。相手もおらひんかったみたいやから見に行くんよ」

つぐみは小首を傾げて聞くと深紅は笑顔で答えた。

「そっか……着物似合ってるね」

「おおきに、そう言ってもらえると嬉しいで」

笑顔でつぐみが言うと深紅は嬉しそうに笑って言う。  
よほど、想いれがある着物なのだろう。

会話が終わると映画館に入ることとなった。  
偶然なのかお互い見る映画は同じだった。

映画が終わると

「面白かったね」

「うん、こついう映画は凄く好きかも」

明久とつぐみは笑顔で会話をし

「たまにはこついうもんもええね」

「良いチョイスだったろ？」

深紅は笑顔で言うと光一は笑って言った。

「そついえばさ、雄二が霧島さんと一緒に居たけど」

「なんだか、お互い眠っていたね」

「珍しいな、雄二が暴れていないなんて」

「そつやね。なんか意味あるんやろうか」

ふと気になったことを明久が言うとなつぐみも思い出して言った。すると、光一は意外そうに言い、深紅も不思議そうに悩みながら咳く。

「そつだ、みんなで喫茶店に行かない？」

「いいな。今日はみんなの分、俺がおごるぜ」

明久が笑顔で言うと光一も賛成して言った。

「え、いいよ！！自分の分はちゃんと払うし」

「そつや、光一君は気にせんでええよ」

つぐみは慌てて光一に言い、深紅は苦笑いを浮かべて言う。

誰かにおごられるというのに慣れていないために遠慮をしていた。

「そつか？ 明久はどうするんだ？」

「僕？僕は光一におごってもらおうかな」

光一が聞くと明久は笑顔で言った。

「アキ君、生活費足りてないの？」

「え、あー…そついうわけじゃないよ。ちょっと、欲しい物があつて」

小首を傾げてつぐみが聞くと苦笑いを浮かべて明久は言う

つぐみは明久の生活費の財布を握っているけど、ある程度は明久に渡している。

「ゲームじゃないから、安心して」

「そう？ でも、あんまり無理して食を削らないでね？」

「うん」

明久が笑顔で言うつつぐみは笑顔で言ったので明久は頷いた。そうこうしているうちに喫茶店に着いて、光一側と深紅側に別れて座った。

男子 side

「で、何が欲しがってたんだ？」

「つぐみに贈るプレゼントだよ」

光一が聞くと明久は笑顔で答えた。すぐに答える辺り、本当のことなのだろう。

「へへ。どんなの買うつもりなんだ？」

「うん、うさぎのぬいぐるみか。髪留めにしようかなと思ってるんだ」

ニヤリと笑って光一が言うと明久は少し照れながら言った。

「日頃のお礼にか？」

「うん、そのつもりだけど……変かな？」

光一は明久に聞くと明久はすぐに頷いた。

まだ、自分の気持ちに気づけていない為に常日頃のお礼という意識  
でしているのだろう。

なんとも明久らしいことだ。

そして女子 side では

「アキ君は瑞希ちゃんにプレゼントを贈るのかな」

「なんで、そう思うんや」

つぐみは俯いて言うと深紅は呆れながら言う。

「だって、上の空が多かったから……」

「だからって、そう思うんはあかんよ」

俯いたままつぐみが言うと深紅は優しくつぐみの頭を撫でて言う。

「うん……そうだよ。アキ君、疲れてるだけかもしれないし」

「ま、わうちにはつぐみへの贈り物を考えてるんやないかと思うん  
やけど」

笑顔でつぐみが言うと深紅はニッコリと笑って言った。

「えー！そんなことないよ！ あったとしても日頃のお礼とかだ

「よ」

「断言できる辺りがむなしくなるで」

すぐに否定してつぐみは言うつと深紅は苦笑いを浮かべて言った。

こうして、映画館デートは幕をとじたのでした。

この後、明久はつぐみの贈り物を光一と相談していたことは誰も知らない。

第18問 学園祭プロローグ 改(前書き)

リザク様、サイレント様、FOOL様、ヒョウガ様、秋雨様、レイ  
ン様

感想ありがとうございます!!



## 第18問 学園祭プロローグ 改

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

この文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室を改善を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。

この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。

学園祭準備の為にLHRロングホームルームの時間は、どの教室も活気があふれている。我がFクラスはというと……

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

代表の坂本君は、床にござを敷いて座るFクラスに、だるそうに言った。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として、誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の坂本君。

興味がないのがわかりまくりだ。多分、全部他人に押し付けて坂本君だけは寝るつもりなのだろう。

「吉井君、つぐみちゃん。坂本君って学園祭はあまり好きじゃない

んですか？」

話合いの邪魔にならない程度の小声で明久に話しかける。

「直接聞いたわけじゃないから、わからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね。」

「興味があるならもっと率先して動いてるはずだよ」

「そうなんですか……。寂しいです……」

いつも明るい瑞希の表情に翳りがさす。

「吉井君とつぐみちゃんも興味がないんですか？」

「あたしはそんなことないかな」

「うーん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいてわけじゃないし」

明久の正直な気持ちから言えば、授業が潰れるのは純粹に嬉しいけど、

学園祭でこれをやりたいという目的のようなものがないのだろう。

「つぐみちゃんは同じ気持ちで嬉しいです」

でも、私は吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほえ？」

「アキ君も瑞希ちゃんと一緒に学園祭での思い出を作ろうよ？」

どこか無理がある笑顔で明久に話しかけるつぐみ。自分の気持ちよ  
り、親友を優先していた。

「それに、うちの学園祭ではとつても幸せなカップルができやすい  
って噂があるんだよ」

「そうなの!？」

「はい、つぐみちゃんの言うとおりです」

つぐみが明久に笑顔で言うのと明久は驚きながら言い、それを瑞希は  
笑顔で肯定した。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え?ウチがやるの? うん……、ウチは召喚大会に出るから、  
ちよっと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃない  
の?」

「え? 私ですか?」

突然話を振られて瑞希は小首をかしげる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタ  
イムアップになる」

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会にでるのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと渚ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

と、手を握り締めて言う瑞希。

「学校の宣伝みたいな行事なのに、もの好きやね」

「ウチ達は瑞希に誘われてなんだけどね。」

「瑞希ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないしね」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。」

『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの

「ははっ。バカなのは否定しないが、そこまで言うてくれるなんて嬉しいな。」

「瑞希が怒るなんて珍しいね」

「だって、皆の事を何も分かっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せせんっ」

「あはは（苦笑）」

Fクラスはバカなのはどうも否定できないな」と苦笑いしながらつぐみは思ったとか。

「だから、Fクラスのウチと渚とで組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「その手伝いをする事になったのよ」

確かにこの3人なら、瑞希の父親の鼻をあかすこともできるだろう。

「お前等。こつちの話が続けていいか？」

「ウチは召喚大会に集中したいし、勘弁してほしいわね」

「なら、あたしがやるよ？」

小さな手を上げてつぐみは笑顔で言う。

「雨宮が？背が届くのか？」

「あたし、そんなにちっこくないよ!!」

頬を膨らませて拗ねるつぐみに坂本君は苦笑いする。

すぐに優羽ちゃんの膝の上に戻されたけどね。

「後は副実行委員やね」

「はいはい！私がやる！」

「いえ、私が！」

深紅が言つと優羽ちゃんと恋ちゃんが手をあげて競い合う。  
ふ、二人ともやる気まんまんだね（汗）

「三人で実行委員したらどうだ？」

「ふむ…それもいいかも」

困っていると坂本君が優羽ちゃんと恋ちゃんを見て言つ。  
え、それでいいの！！？

そんなわけで、三人で教壇に立つんだけど。  
し、身長が（泣）

「つぐみ、これを使いなよ」

「あ、ありがとう！アキ君」

明久が西村先生から預かった雨宮専用土台を持っていき、置くと笑顔で言つた。

「これでok！じゃあ、始めるよ！」

教壇に土台を置いてそこに上がると笑顔で仕切る。

「クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してね？」

つぐみが言つと数名が手を上げる。

「はい、土屋君」

「…………（スクツ）」

名前を呼ばれて康太は立ち上がった。

「…………写真館」

「写真館だね。」

つぐみが振り向くと優羽ちゃんが『秘密の写真館』と書いた。

「つ、次は横溝君」

「メイド喫茶………といたけど、流石に使い古されいると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

恋ちゃんが普通に書いてくれた。

「次は、横田君」

「ゴスロリ喫茶なんてどうですか？」

「ゴスロリ？」

『女は似合うだろうが、男には似合わないだろ？』

『だよな』

これには批判を多く出ているが一応意見なので優羽ちゃんに書いてもらった

「他にありませんか？はい、須川君」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川は立ち上がりながら言つと

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せたいの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「それもいいね。」

「追加しときますね」

恋ちゃんは須川君の意見を普通に『中華喫茶』とチヨークで書いた。

すると、厳つい男が扉を開けて入って来た。

「お前等出し物は決めたか？」

「今の所この4つです」

「雨宮が議事進行役か」

「はい」

西村先生は私を見て言い、恋ちゃんと優羽ちゃんを見て



「書いたのは、桜木と遠月か」

「はい」

「そだよ」

恋ちゃんと優羽ちゃんはすぐに答えた。

「ところで、先生。その後ろにいる方は？」

「ああ、転校生だ」

あたしは西村先生の後ろにいる人を見てから聞くと、西村先生はすぐに答えてくれた。

「あれ、亮くん？」

「久しぶりですね。つぐみちゃんに恋ちゃん」

見覚えのある髪の色とメッシュに驚いて言うとニコリと笑って答えてくれたのは、小学校と中学校の時に出会った。瑞希ちゃんの双子の弟君でした。

「あれ、いつ………？」

「みい姉に聞いていないんですか？」

恋ちゃんが困惑したように言うと亮くんは困ったような笑みを浮かべて聞いた。

すぐに瑞希ちゃんを見ると、瑞希ちゃんは視線をそらしていた。

第18問 学園祭プロローグ 改(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

## バカテスト第十三問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希と姫路亮の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも  
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

久遠光一の答え

『新しい恋』

教師のコメント

この回答と何度も書き直した跡を見て、君の哀愁の深さを実感しました

桜木恋と雨宮つぐみの答え

『静かなクラスメイト』

教師のコメント

あなた達も苦勞しているんですね。

雨咲蒼夜の答え

『現状維持』

教師のコメント

何かを求めるのではなく今が一番ということでしょうか……あなたらしい意見ですね。

遠月優羽の答え

『今より広い交友関係』

教師のコメント

ふざけた回答を期待した先生を許して下さい。

神埼深紅の答え

『面白いこと』

教師のコメント

先生までも振り回して楽しいですか？

第19問(前書き)

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、FOOL様

感想ありがとうございます！

## 第19問

「これで決をとるよー！」

「いいと思う方に手をあげてくださいね？」

「あげないと悪戯しちゃうからね」

あたしと恋ちゃんと優羽ちゃんの三人で周りを見て言ったよ。  
これで、人数がちゃんと集まるといいんだけど。

「まずは写真館」

「これだけですか」

手を上げた人数分だけ書き込む

「次はウェディング喫茶！」

写真館よりは多い方だね

「次はゴスロリ喫茶！」

「多いな」

ロリコンが多いのも悩みものだと思ったのはあたし達だけではない  
だろう。

「次は中華喫茶！」

次々と書いて行く恋ちゃんを見てからあたしは多数決の結果を見る。

「多数決の結果、ウェディング喫茶に決まりました！全員で協力して頑張ろう！」

接戦だったが、僅かな差でウェディング喫茶が勝ったのでした。

『Yes!! Little princess!!』

何か変な合言葉が出たのは気にしない方がいいのだろうか。

「次に、誰が料理しますか？」

と恋ちゃんが聞くと

「俺が引き受ける」

「……………（スクツ）」

須川君と土屋君立ち上がったの。

二人とも料理なんてできるのかな？

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

料理が紳士の嗜み？

そもそも彼が紳士かどうか不明なんだけど。



「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうよ。  
厨房班は須川君と土屋君のところ、ホール班はアキくん、お願いね？」

「うん、わかったよ」

「それじゃ、私達はホールに居ますね」

「そうだね、瑞希達女子と木下君はホールで他に男子で料理できそうな人は厨房に行つて、できない人はホールに行つてね」

瑞希の意見に頷いててきばきと指示をする。

「では、僕はみい姉を見張る為にもホールにいきます」

「わ、私もホールにします」

亮君はわざわざ見張る為という言葉を強調してるけど、彼も被害にあつたのかな？

恋ちゃんと亮君は幼なじみなんだっけ。

お似合いカップルなんじゃないかな？

「なあなあ、光一君。わつちと一緒に厨房にいかへん？」

「ん？別にいいぜ」

深紅ちゃんはニコニコと笑いながら久遠君と会話してる。  
うわ、積極的だよ！！

「つぐみはどうする？」

「え？あたしもホールにするよ」

ぼんやりと眺めていたらアキ君に話しかけられていて少し考えてから結論をだした。

「つぐみがホールなら私も」

「わたしもホールにしようかな」

優羽ちゃんと渚ちゃんもそれぞれ担当する場所を決めていた。

「これで決まりだね。みんな、準備頑張るよー！」

あたしが小さな手をあげて言うと

『おー！！！』

クラスメイトの奴らもテンションをあげる。

こんなでちゃんと売り上げを伸ばせるのか不安な気分だよ。

## バカテスト 第十四問

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希と姫路亮の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

久遠光一の答え

『動き易く、品を保てて人目を引く服装』

教師のコメント

君からまともな意見が出て、意外だと思った先生を許してください。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント  
裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え  
『ブラジャー』

教師のコメント  
ブレザーの間違いだと信じています

桜木恋の答え  
『その喫茶店にあった服。雰囲気を壊さなければ私服でも可』

教師のコメント  
雰囲気にあった服装ですか、なかなか良い考えですね。私服ならコストもかかりませんしね。

雨宮つぐみの答え  
『喫茶店をするに適した服装。エプロンとか、かな』

教師のコメント  
確かに喫茶店をするに適した服装でないと動きにくいですもんね。

遠月優羽の答え  
『喫茶店という場を考え、奇抜に行くか堅実に行くかで進路は変わる。』

・後者のアイデアの一つはノーマルに学校の制服との相性の良い調

理実習に使うようなエプロンなどにするのも良い。

・前者の意見を優先するなら、奇抜性を考え、コスプレ、着ぐるみなどなど詳しくは後述

・3つ目はオーソドックスに普通のウエイトレスに近い服装等も良い、またウエイトレスの服に関して詳しくは後述………』  
(以下大学ノート一冊をフルに使い解説と考察)

教師のコメント

そのベクトルを学業に1ミリでも向けてください。

神埼深紅の答え

『チャイナドレス』

教師のコメント

本気で書いてませんか!!!?

第20問(前書き)

ヒヨウガ様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます

## 第20問

「ねえ、恋と亮とつぐみってもう瑞希にあの話聞いたの？」

帰りのHRが終わってから美波が急に話しかけてきた。

「あの話？」

「どっいっことっ。」

「あ、ごめん。端折りすぎたわね、瑞希の転校についての話よ」

そういえば、瑞希ちゃんが朝からそんなこと言ってた気がする。

亮君からもその話を聞いたし。

「あ、その話なら聞きました」

「聞いてるよ」

恋ちゃんはすぐに答えてあたしもそれに続いて答えると

「はい、朝から愚痴られましたから」

亮君は苦笑いしながら答えたよ。

「そう、ならいいわ。後は……アキ、久遠、深紅、ちよつといい？」

そう言っつて、美波ちゃんは久遠君と深紅ちゃんと会話してるアキ君に話しかけた。

「ん、何か用？」

「どうしたんだ、島田？」

「どないしたん？」

アキ君と久遠君と深紅ちゃんは振り向いて美波ちゃんを見て聞いた。

「うん。用というか、相談なんだけど……」

「相談？ 僕等で良ければ聞かせてもらうけど」

「そつやで、わっちらの仲やん」

「とりあえず、聞かせてくれないか？」

美波ちゃんは口ごもりながら言うのとアキ君と深紅ちゃんと久遠君は不思議そうな表情をして聞いてきた。

「うん、ありがと。多分、3人が言うのが1番だと思っただけど……その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張りだせないかな？ ほら、あの様子じゃ坂本が仕切らないと……」

「あー、まあ確かにな」

「興味ないんはしゃーないやろ」

「でもそれは難しいなあ……さっきも言ったけど、雄二は興味ない事に徹底的に無関心だからね」



久遠君は苦笑いを浮かべて言うと深紅ちゃんも苦笑いを浮かべて言い、アキ君は悩みながら答えた。

「でも、アキと久遠と深紅が頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

美波ちゃん、どこにそんな自信があるの？

アキ君の言う通りだと思っし。

「ううん、そんなことない。きつとアキと久遠と深紅の頼みなら引き受けてくれるはず」

まるで確信めいたように美波ちゃんは言う。

「そりゃ確かに、良くつるんではいるけど、だからと言って別に…」

そうだよね、つるんでいるだけだし。

アキ君の被害は大きいけど。

「あんた達、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕、お婿に行けない！！」

「というか、どういう経緯でそんな結論にたどり着いた！？」

「てか、なんでそうなるんや！！」

美波ちゃんの発言にアキ君が突拍子もない一言を言い、久遠君と深紅ちゃんはツッコミをいれていた。

しかも、アキ君は泣き崩れて、久遠君は全身に鳥肌が立ったみたいだし。

アキ君達の噂はよく知らないけど。深紅ちゃんのは素直になれないから、坂本君をいじっているんではっという噂が流れていた気がする。

「誰が雄二なんかと！ 僕はホモじゃないんだから、女の子のつぐみとの噂の方がいいよ！」

「ふ、ふえ！？」

アキ君の突然の発言にあたしの顔が真っ赤になってオロオロしてる。

「凄い告白もあつたもんだな」

「せやね、わっちも同意見や」

久遠君と深紅ちゃんはニヤニヤと笑って言った。

べ、別に告白というつもりでアキ君が言ったわけじゃないだろうし！！。

「あ、アキ君。気持ちは嬉しいけど……まだ、あたし達は高校生なわけだしっ」

「ち、違うんだよ。つぐみ！ あれは、言葉のあやというか！」

冷静になるうとしながら言うとアキ君も慌てて言った。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

美波ちゃんが若干不機嫌に言うとアキ君は頷いて言うと

「なんとかできませんかね？ このままだと喫茶店が失敗に終わり  
そうですし……」

「このままというのもダメでしょうしね」

「で、一体どうしたんだ？ やけに喫茶店に拘ってるみたいだけど  
？」

「そうやね、深刻そうやし。詳しく話してくれひん？」

恋ちゃんは悩みながら言うと亮君も考えながら言い、久遠君と深紅  
ちゃんは不思議そうに尋ねた。

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の  
話で」

「アキくん、久遠君、深紅ちゃん。実のところ本当に深刻な話なん  
だよー！」

美波ちゃんが困っているけど、これはちゃんと言わないとね。

「え？ どういうこと？」

「本人には言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。」  
けど、一応秘密の話だからね?」

と美波ちゃんは真剣な様子でアキ君達を見て言った。

「う、うん。わかった」

「右に同じ」

「同じくや」

アキ君と久遠君と深紅ちゃんは頷いて言う。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん? 姫路さんがどうかしたの?」

美波ちゃんは口を開いて言うとアキ君は不思議そうに聞いたら

「このままだと、みい姉は転校してしまうんですよ」

亮君が苦笑いをして言う。

「あれ、亮君は問題ないの?」

「はい、僕は頑丈なので」

あたしが疑問をもって尋ねると亮君は笑顔で答えた。

頑丈だから大丈夫って言われても、万が一ってこともあるだろうに。

「どっ、どういう事だ？ それに“このままだと”って、一体……？」

「待つんや、光一君。明久が処理落ちしかけてるで」

久遠君も驚いて言うと深紅ちゃんがアキ君の状態に気づいて言った。

「このバカ、不測の事態に弱いんだから！」

「いや、いきなりこんな話されたらパニックになってもおかしくないぞ？ おい明久、しっかりしろ」

美波ちゃんは呆れながら言うのと久遠君はツッコミをいれて言い、アキ君の体を掴んで揺らした。

「いやいや、誰だってこんな話をされたらパニックになるからね！」

「光一……モヒカンになった僕でも、相棒と呼んでくれるかい？」

「………どういう処理したら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら？」

「ある意味、稀有な才能かも知れんの」

「ああ、呼んでやる。呼んでやるから落ち着け」

虚ろな目だったアキ君の発言に美波ちゃんは呆れながら言い、いつのまにか来てた木下君も苦笑いを浮かべて言った。

久遠君はアキ君の発言をスルーしながら言う。

「亮君！ 姫路さんが転校って、どういう事さー!？」

「どっつて……そのまんまの意味ですよ」

つめよるアキ君に亮君は苦笑いを浮かべて言う。

「このままだと、瑞希は転校してしまうかもしれないということですよ」

「このままだと?」

恋ちゃんは苦笑いをして言うとアキ君は不思議そうに言った。

「このままって……まあ、この設備と姫路の体調を考えれば、納得するなという方が無理か」

「そうやね。瑞希は体が弱いからというのも理由やろっけど」

久遠君は教室を見回して言うと深紅ちゃんも同意するように言った。

「桜木よ。その姫路の転校の理由がさっきの話が全然つながらんのじゃが」

木下君は小首を傾げて聞いて

「そつでもないので。瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なんだから」

美波ちゃんは木下君を見てきっぱりと言った。

「ってコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて」

「そうですね。純粹に設備の問題ということに……ケホツケホツ！」

アキ君は考えながら言つと恋ちゃんが頷いて言つと咳き込み

「恋ちゃん。大丈夫ですか？」

「……はい、大丈夫です。それに瑞希は身体も弱いですし……」

「そつだよね。それが一番マズいよね……」

亮君が心配そうに尋ねると恋ちゃんは頷いてからアキ君達を見て言つた。

設備の問題かあ。これは厄介だよね。

「なるほどのつ。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

Fクラスの皆が頭が悪いというのも理由らしいけど、一番は設備の問題だよな。

このままではいけないよね。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……？」

美波ちゃんがアキ君に聞くと

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や桜木さんやつぐみ、秀吉であつても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

きつぱりとアキ君は言い、美波ちゃんは笑顔で言った。  
アキ君は本当に優しいね。

「わかった。そういうことなら、何としても雄二を焚きつけてやるさ！ 協力してくれるよね、相棒？」

「当たり前だ。俺達の為に怒ってくれてる以上、ここで立ち上がり  
にや男じゃないだろ。相棒」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれ  
ん」

「わっちも同意見や」

アキ君は頷いてから言うつと久遠君を見て聞いて、久遠君はキツパリ  
と言つて木下君も真剣な様子で言うつと深紅ちゃんも頷いて言った。

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね？」

アキ君はそう言うつと携帯を取り出して坂本君と連絡を取る。

「あ、雄二？ ちょっと話が……。え？ 雄二、何してるの？ ……



雄二！？ もしまし！ もしまし！

と、何やら意味不明の会話が行われたらしく、通話が切られた。

「坂本はなんて言った？」

「えっと、“見つかった”とか“鞆を頼む”とか言ってた」

「……何それ？」

「きつと翔子さんに追われているんじゃないですか？」

「ああ……」

亮君が美波ちゃんの台詞に苦笑いしながら言うと納得したように言った。

「とにかく、これじゃ坂本くんと連絡を取るの難しいですね」

恋ちゃんは困ったように言うと

「いや、これはチャンスだ」

アキ君は確信めいたように言った。

「え？ どういうこと？」

あたしは不思議そうに聞くと

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。」

「じゃあ秀吉と島田。ちょっと協力してくれるか？」

アキ君とアイコンタクトを交わした久遠君は美波ちゃんと木下君を見て言う。

「それはいいけど……坂本の居場所はわかっているの？」

美波ちゃんは不思議そうに聞いた。

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「じゃあ明久、雄二を頼む。タイミングはそっちに任せるから。」

アキ君はキツパリと言うと久遠君はアキ君を見て言った。

「了解」

ニヤリと笑ってアキ君は言う教室を出て行った。  
それから数分間……

「じゃあ頼むぞ？」

「……こんなので、坂本を引っ張り出せるの？」

「大丈夫やて。おっ、来たみたいやね」

久遠君はアキ君に合図を送ってるみたいで、それを美波ちゃんは見ながら言う。深紅ちゃんは楽しそうに笑って言う。

深紅ちゃんは連絡が来ると携帯を美波ちゃんに渡す。

「もしもし坂本？ ……ちょっと待って、今代わるから」

美波ちゃんは携帯に出て坂本君と会話すると木下君と変わる。

「（頼むぞ秀吉）」

久遠君はそれを見ると木下君に言う。

「（了解じゃ） ……雄二、今どこ？」

木下君は頷くと声を霧島さんに変えて話す。  
すると…

『人違いです』

プツツっといつて一瞬で切られたみたいだった。  
とりあえず、アキ君達が戻ってくるまで待機することになった。

## バカテスト 第十五問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ　？統率力　？行動力　？その他（ ）（ ）」

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『【？かわいらしさ】　候補……姫路瑞希&島田美波&雨宮つぐみ  
&桜木恋&遠月優羽』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】　候補……雨宮つぐみ』

教師のコメント

確かに可愛いですからね

久遠光一の答え

『【？可愛らしさ】　候補……神埼深紅&雨宮つぐみ&桜木恋』

教師のコメント

何度も書き直した形跡がありますが、誰を書きたかったのでしょうか？

坂本雄二の答え

『【その他（結婚相手）】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

桜木恋の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希、霧島翔子、吉井明久、雨宮つぐみ』

教師のコメント

姫路さんは人気ですね。  
それよりも何故吉井君が候補に入っているのが気になります。

雨宮つぐみの答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希、霧島翔子、桜木恋、島田美波、遠月優羽』

教師のコメント

姫路さんが候補に入る確率が高いですね。  
遠月さんも入っていることには驚きました

遠月優羽の答え

『【?可愛らしさ】 候補……雨宮つぐみ』

教師のコメント

雨宮さんもかなり人気ですね。

## 第21話

それから少しして、坂本君を伴ったアキ君が戻ってきた。

「そうか。姫路の転校か……そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？ どうして？」

話を聞いた坂本君が言っているとアキ君は不思議そうに聞いた。

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つ。まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面やね。」

「深紅が言った点は喫茶店が成功したら利益でなんとかできるだろう二つ目は、老朽化した教室。

これは健康に害のある学習環境という面だ」

深紅ちゃんは笑顔で言っていると久遠君も便乗するように言った。

「そうじゃな。一つ目もそうじゃが、二つ目や三つ目も難しいのう」

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田と永久で対策を練っているんだらう？」

秀吉君が悩みながら言っていると坂本君は振り向いて言った。

「まあ、私は参加はつぐみちゃん優羽ちゃんとで参加するつもりで

すけど」

「だから、瑞希に参加するのはウチと渚なのよ」

恋ちゃんは苦笑いしながら言つと美波ちゃんは坂本君を見て言つた。

「ならいつそ、俺と明久と深紅も参加するかな？ 俺達のコンビネーションなら、良い線いけると思うし」

「そうだね。神崎さんもいるからそうそう負けることはないだろうし！」

「わっちは別にええよ」

久遠君は考えながら言つとアキ君は同意するように言い、深紅ちゃんは笑顔で言つた。

「翔子に参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこついった行事には無関心だしな。」

姫路と島田と永久の優勝は十分にありえるだろう」

なんでそういつのわかるのかな？と思つていたら

「雄ちゃん、残念だね〜。霧ちゃんも参加するよ〜」

あたしを抱き上げた優羽ちゃんが笑顔で言つた。

いつ来たの!!!?

「なんだと!!!? そんな…俺はどうしたらいいんだっ!」



坂本君はそれを聞くと膝をついて落ち込んでいた。そこまで落ち込むことなのかな。

「それで、坂本くん。二つ目の問題はとうするんですか？」

「とうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

恋ちゃんは坂本君に近寄って尋ねた。するとしれっとした表情で坂本君は言った。

「やっぱそうなるよな。けど学園長は偏屈だって噂だし、大丈夫か？」

「あいな。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とはいえ、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

久遠君がため息をついて言うと坂本君は呆れながら言った。そうだよな、あくまでもここは教育機関だもん。改善要求くらいは聞いてくれるよね。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

思い立ったが吉日というように、アキ君がそう提案した。それに答えるように久遠君と坂本君と深紅ちゃんが頷いたのであたしも優羽ちゃんも恋ちゃんも頷いた。

「それじゃ、さっさと行くか。一応行くのは、俺と明久と雄二と深紅とつぐみ……桜木と遠月も来てくれるか？」

「そのつもりでしたので良いですよ」

「つぐみんが行くなら私も行くよ」

久遠君が言うと恋ちゃんと優羽ちゃんは笑顔で言った。  
優しい友達がいてくれると嬉しいなあ。

「じゃあ島田は、学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

久遠君が言うと美波ちゃんは頷いた。

「後、秀吉と美波。鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っておい  
てくれ」

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝  
えておこう」

坂本君が言うと秀吉君は頷いて言うと坂本君がひきつった笑いをし  
たが見えたのは気の所為かな？

\*\*\*\*\*

学園長室前

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランド……』

新校舎の一角、学園長室前にて。

辿り着くや否や、出迎えたは言い争いの声だった。

「どうしたのつぐみん？」

「中で何か話をしているみたいなんだけど」

優羽ちゃんは立ち止まったあたしを見て聞いたので答えると

「とりあえず、学園長が居るとわかったんだから、入っちゃおうぜ  
」？」

「ああ。さっさと中に入るぞ」

「失礼しまーす」

「たのも〜」

久遠君が言うと坂本君とアキ君はさっさと学園長室に入った。  
深紅ちゃんはなんだか楽しげに見えたのは気の所為……かな？

「四人とも……普通は返事を待つものだと思うんですが」

「そのこのヤツの言う通りだよ。本当に失礼なガキどもだねえ」

恋ちゃんの言う通りだよ。

ノックしたのはいいけど、返事くらい待とうよ。

中に入ると白くて長い髪が特徴の藤堂カヲル学園長。

研究者だからなのか、規格外なところが多い人のようだよ。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

そういうのは教頭の竹原先生。鋭い目つきに眼鏡をしていて、クールな態度で一部の女子生徒に人気が高いそうだよ。あたしも恋ちゃんも優羽ちゃんも興味はないけどね。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

やれやれとしたように教頭を見て学園長が言うと皮肉を教頭が言った。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

不機嫌そうに学園長が言うと諦めた教頭はまた皮肉をこめて言う。

そういつて、竹原先生は部屋の隅を一瞬見てから、

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

なんだろう、あの隅に何かあるのかな。

教頭が出て行くと深紅ちゃんは隅の方に向かって行くと何かを触っ

て弄っていた。  
何をしてるんだろっ？

## バカテスト 第十六問

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希&雨宮つぐみの答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

神埼深紅の答え

『酸化カルシウム』

教師のコメント

惜しいですね。今回は真面目に答えようとしたんでしょっか？

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

## 第22話

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつて来ました」

学園長はわたし達を見て聞いてきた。

すると坂本君が敬語でしゃべりだした。

アキ君が気持ち悪そうに坂本君を見ていたのは気にしないでおこつ

「私はそれどころじゃないんでね。学園の経営に関するとなら、  
教頭の竹原に言いな。」

それと、最初に名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだよ」

学園長はそう言うと坂本君が前に出て

「俺は二年F組代表の坂本雄二です。」

「わたしは雨宮つぐみです！」

「神埼深紅やで」

坂本君が自己紹介したので慌ててわたしも自己紹介をする。  
それに続いて深紅ちゃんも自己紹介をした。

「それでこつちの2人が……こちらが2年を代表するバカで、こち  
らは同じく過激派です」

そしたら坂本君が勝手に久遠君とアキ君の自己紹介をした。



「坂本君！その説明仕方はないよ！！？」

「ほう……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と久遠かい」  
わたしがそう叫んで言ると学園長はいまのでわかったのか言う。

「ちょっと待って学園長！ 僕たちはまだ名前を言ってますよね  
！？」

アキ君は学園長につめよりながら言った。

「離せ、深紅！」

「すんまへん。ここで相手を怒らせたら台無しやから、辛抱してや」  
深紅ちゃんは久遠君を抑えていた。

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじやないか」

「ありがとうございます」

学園長は坂本君を見つめて礼を言う。

よかったどうぞやら聞いてくれるみたいだ

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノロ」

「わかりました」

うう、学園長はどうしてこうも口が悪いかな。

坂本君はよく耐えてるよね

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

あくまで丁寧な坂本君は説明していると学園長は耳を聞いて言った。  
ちゃんと聞く気あるのかな？

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です」

え、ええ！！？

全然耐えてないよ！しかも本音が駄々漏れだし！

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われれます」

「ちょ、坂本君！学園長にその言い方は」

わたしは慌てて坂本君の袖をひっぱって言う。  
いますぐこんな暴言はやめさせないと！

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、という訳です」

ああ、もう言いきっちゃったよ。

しかも目がちゃんと笑ってないし！

あ、学園長が思案顔だ。なにを考えているのかな

「あの、学園長……?」

「坂本君のご無礼を許してください!」

「いいじゃん、つぐみんの頼みだよ?」

「……ふむ、ちょうどいいタイミングだね」

アキ君が声をかけてから恋ちゃんと優羽ちゃんが学園長にお願いしている、思案顔で学園長は小声で呟いた。

「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」

「え? それじゃ、直して貰えるんですね!」

あっさりと問題が解決する事に、アキ君が喜んで言うと

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

そう学園長が言うとアキ君がとんでもないことを言い出した。

「やめろ、こんなの捨てたら環境の害にしかならん。

ここは“文月妖怪 藤堂カラル”と銘打った見世物として、利益にするべきだ」

「いやいや、ここはとある場所で手に入れた薬の実験台になっても

「らいまひよ」

「……お前ら、もう少し態度には気を使え！」

「あの、坂本君が言えるセリフじゃないと思うんですけど」

久遠君は止めたかと思っただらアキ君よりとんでもない発言をして深紅ちゃんは笑顔で楽しそうに言いだした。

坂本君が呆れながら言うのと恋ちゃんが苦笑いしながら言った。まったくその通りだよな。

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」 坂本

「そうですね。教えてください、ババア」 アキくん

「理由なく断られて納得出来る訳ねえだろ、妖怪」 久遠くん

「そつやで、理由を教えてんか」 深紅ちゃん

「そつだそつだ！教えて、妖怪学園長」 優羽

坂本君とアキくと久遠君と深紅ちゃんと優羽ちゃんは笑顔で学園長に問いかける。

でも、顔が怖いよ？

「堂々と妖怪呼ばわりするんじゃないよモヤシのクソジャリ！遠月も妖怪呼ばわりするんじゃないよ！……お前たち本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「「本当にすみません」」

学園長が怒鳴りながら言うのでわたしと恋ちゃんは頭を下げた謝っていた。

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちょろいガキども」

「確かにそうですけど、俺達はともかく体の弱い生徒が……」

学園長は呆れながら言うと坂本君が口を開いていいかけると

「……と、いつもなら言っているんだけどね。」

可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

学園長はニヤリと笑って言う。

それを聞いて坂本君は考え込み、久遠君も考え込んでいた。深紅ちゃんは笑っていた。

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

わたしが聞くと学園長は聞き返してきた。

それは知っているけど、頼みと関係あるのかな？

「わたしは優羽ちゃんと恋ちゃんと出るつもりですよ」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

不思議に思いながら答えたら聞かれた。

優勝賞品がトロフィーと賞状と白金の腕輪。

そして優勝賞品の副賞が、如月グランドパークプレオープンペアチケット。

準優勝賞品の漆黒の腕輪と如月グランドパークペアチケットのことだよ。

「それが、何か？」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

久遠君が聞くと学園長はやれやれとした様子で言うので

「はい、知りません」

「堂々と言うんじゃないよ！……まあ良いさね。

この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

きつぱりと久遠君が答えたら学園長がツッコミをいれていた。

副賞か、アキ君と行けたらいいな。

「回収？ それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。

けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。

今更覆す訳にはいかないんだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

かなり、もっともな話だよな。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！  
それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「けどチケットで良かったじゃないか。腕輪に問題があるならまだしも、それなら問題としては軽い」

学園長は逆切れするように言うので坂本君は見つめて言った。  
そこで学園長の表情が崩れた事を、坂本君と深紅ちゃんは見逃さな  
かった

「で、良からぬ噂ってのは、なんや？」

「如月グループは、如月ランドパークに1つのジnkクスを作ろう  
としてるのさ。」

“ここを訪れたカップルは幸せになれる” ってジnkクスをね」

深紅ちゃんが聞くと学園長はわたし達を見て説明してくれた。

そ、そんなジnkクスがあるんだ。

「ジnkクス？ ……どうやってです？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコー  
ディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を  
用いてもね」

「な、何だと!？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる坂本君。  
ああ、翔子ちゃんのことだ驚いてるんだね。

「どうしたのさ、雄二？」

「慌てるに決まってるだろうが！」

今ババアが言った事は“プレオーブンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ!？」

アキくんが不思議そうに尋ねると坂本君は焦ったように肩を掴んで言う。

「別に言い直さずとも、わかってますよ？」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

恋ちゃんが苦笑いしながら言う。と学園長はため息をついて言う。

文月学園にはその性質上、数多くのスポンサーが存在する、

如月グループも当然、そのスポンサーの1つ。

「くそっ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたっぷりだからな」

「それに加えて、学生から結婚まで行けばジंकウスとして申し分なしだ。」



「候補としてこれ以上の学校はないやろうね」

「ふむ。そっちのモヤシのガキと神埼もそっだが、流石は神童と呼ばれていただけはあるね。」

頭の回転はますますじゃないか」

坂本君の知識の高さと久遠君と深紅ちゃんの知識に学園長はほめていた。

坂本君が神童ということは学園長は知っているみたい。

「坂本君、とりあえず落ち着きましょう。」

如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないですか」

「……………絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる……………行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚……………俺の、将来は……………」

「……………どうやら、安請け合いしたらしいな。妙な所で明久よりバカだよな、こいつ」

呆れたように言う久遠君の意見を余所に、学園長は言葉をつづけた。

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、交換条件ってのは……………」

「そうさね。“召喚大会の優勝賞品および準優勝賞品”と交換。」

それが出来るなら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

そう学園長が言うとアキ君と久遠君が視線を合わせた。  
あれはなにか考えているよね

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？  
譲って貰う事も不可だ。

アタシはお前達だけで召喚大会の決勝に進出しろと言っているんだ  
からね」

考えてた事をモロに言われた為、苦虫をかみつぶしたかのような顔  
をする久遠君とアキ君。  
それを恋ちゃんは呆れたように見ていた。

「大丈夫ですよ、わたし達が勝てばなんとかなりますし」

「そうだよ、幸いに人数わけもできてるしね」

恋ちゃんが苦笑いして言うと優羽ちゃんは笑顔で言った。

「じゃあ僕たちが決勝進出したら、教室の改修と設備の向上は約束  
してくれるんですね？」

「何を言っているんだい？  
やってやるのは教室の改修だけで、設備についてはうちの教育方針  
だ。変えてやる気はないよ」

アキ君が期待にみちたように言うと学園長はしれつと言った。  
世の中そんなに甘くないみたい。

「ただし、清涼祭の売り上げでどうにかするのは別さね。今回だけは見逃してやってもいい」

「だけど、喫茶店を経営しつつ大会を勝ち抜くと言うのも難しい話だよ。そこを何とか……」

学園長がそう言うのでわたしが言うのと深紅ちゃんに止められた。

「やめとき、わっち達はあくまでも頼む側だから、話を引き受けてくれただけで儲けものだと思わな、あかん」

「そう言う事だ。ババアに譲る気がない以上、この取引に応じるしか方法はない」

深紅ちゃんはわたしを見て言うのと坂本君もあきらめたように言った。

「……わかりました。この話、引き受けます」

「わたしも頑張ります!」

「そうかい。それなら、交渉成立だね」

アキ君が言うのと恋ちゃんははりきりながら言い、学園長は笑みを浮かべて言った。

「ただし、こちらからも提案がある」

「何だい? 言ってみな」

坂本君は一步前に出て学園長を見つめて言う。

「俺達は最後に当たる物として、召喚大会は3対3のタッグマッチ。形式はトーナメント所為で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

坂本君が学園長を見てそう言つと

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか」

学園長が不思議そうに言うつと坂本君は見つめて言った。  
承諾はされたから、良い方だね。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進めるんだろっかね？」

そう言われ久遠君はアキ君と深紅ちゃんと拳を合わせる。

「無論だ。俺達を誰だと思ってる？」

「絶対に優勝して見せます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

「はんなりいきまひよ」

「わたしも頑張るよ」

「わたしもです！」

「つぐみんの為ならえんや」

全員で、頷きあう。

「それじゃあなた達。任せたよ！」

「おうよっ！」

「任せてや」

「はい！」

こうして、アキ君と久遠君と深紅ちゃんのバカと危険物と女王のトリオができた。

わたしは恋ちゃんと優羽ちゃん、美少女と歌姫と猫のトリオが誕生した。

第22話(後書き)

こんなんでいいかな？

## バカテスト

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

雨宮つぐみの答え

『603』

教師のコメント

正解です！

神埼深紅の答え

『603』

教師のコメント

真面目に書いてありますね  
なんか複雑です



## 第23問

清涼祭初日の朝。

Fクラスの教室はいつものような小汚さはなく、中華風の喫茶店へと変わっていた。

まあ食べ物を取り扱う店だから、小汚いと人が寄りつく訳がない。

「このテーブルなんて、ぱっと見は本物と区別がつかないよ」

明久がテーブルを見て言った。

そこに並べられたテーブルは、みかん箱を重ねてその上にクロスをかけた物。

演劇部である秀吉作で、小道具作りでの経験を生かした一品。

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスをまくと、そこには汚いみかん箱。

少なくとも、食べ物扱う店では適切な代物ではない以上、イメージダウンは免れない。

「これを見られたら、店の評判はガタ落ちだね」

「大丈夫ですよ。こんなところまで見る訳ないし、見てもきつと見なかった事にしてもらえますよ」

つぐみは苦笑いしながら言うつと恋が笑みを見せて言った。

「そうですね。態々クロスを剥がしてアピールするような人は来ま

せんよね」

「おいおい姫路、たかが学園祭の喫茶店で営業妨害するバカはいないって」

瑞希が笑顔で言うと光一が苦笑いして言った。

少なくとも、そんな事をするメリットは全然ないだろう。

「……………飲茶も完璧」

「突然、出てきますね」

康太がにゅっと出てくると言い、亮が苦笑いしながら言った。

「土屋、厨房はどないや？」

「……………味見用」

深紅が聞くと康太は木のお盆を差し出した。

その上には、陶器のティーセットとゴマ団子があった。

「わぁ……………おいしそう」

「凄い」

瑞希とつぐみはゴマ団子を見て目をキラキラさせて言う

「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの？」

「……………」（コクリ）」

美波がそう聞くと康太は頷いた。

「では、遠慮なく頂こうかの」

「わたしも」

「あたしも」

「わっちもや」

「つぐみんが食べるならー」

「うちもそうしようっと」

「わたしもです」

瑞希、美波、秀吉、つぐみ、深紅、優羽、恋は手を伸ばし、作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張る。

「お、おいしいです！」

「本当！ 表面はカリカリで、中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「凄く美味しい」

「後で、レシピでももらっとくで」

「美味しいです〜」

「中身も表面も美味しいね〜」

瑞希が笑顔で言うと美波も笑顔で言い、秀吉は感触を確かめながら言う。

つぐみはもうトロンとした感じになっており、深紅は笑って言うと恋と優羽も笑みを見せて言った。

「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、7人とも」

「あの、秀吉は男ですよ」

明久が笑顔で言うと亮が苦笑いしてツツコミをいれていた。

「お茶も美味しいです」

「本当ね〜……」

「幸せかも」

「はふ〜」

おいしさにトリップしているのか、4人の目がトロンと垂れた。それを見て、光一、明久、ムッツリーニ、亮も食欲をそそられる。

「それじゃ僕も貰おうかな？」

「ああ。たまには甘い物もよさそうだ」

「……………（コクコク）」

「では、僕も」

さらに残ったゴマ団子を、明久と光一と亮は一口食べた。

「へー、旨いな」

「だね！」

「みい姉は入らなかったみたいでなによりです」

光一が感心したように言うと明久は笑顔で言い、亮は心底安心したように呟いた。

がらっ！

「こーちやあんっ！」

がばっ！

突如、186cmの少女がドアを開けて入ってきてきて康太に抱きついた。

「がふっ！」

抱きしめられたことにより、文月最強のバストサイズに挟まれて意識不明になりつつある康太がいた。

「はふうー、こーちゃん分があやうく不足するところだったよー」

そんな康太の状態に気づかないままスリスリしてる少女がいた。

はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。

少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。

「あ、相沢さん」

「土屋君が危ないですよ!？」

つぐみと恋が慌てて近寄ると

「ん？あ！恋ちゃんをつぐちゃんだ」

そう言うとターゲットが恋とつぐみに変更されたのか、康太は床に置かれた。

ちなみに康太は鼻血まみれになっていたのは予断だ。そして、つぐみと恋を抱きしめていた。

「はうー、抱き心地がいいよう」

「むぎゅー!?!?!」

少女はスリスリとつぐみを恋を抱きしめて至福の時にひたっていた。

「む、ムツツリーニ！！大丈夫！？」

「あんな奴に抱きしめられたら、俺はやばいな」

「誰でも、やばいで」

明久が慌てて康太に近寄る。

光一は呆然として自分の末路を思い浮かべると青ざめていた。そんな光一の肩を軽く叩いて深紅は言った。

「まずいですね。すぐに蘇生しなくてはっ」

亮が康太の様子を見て言う。

そこまでやばいのか？

「ムツツリーニ！死ぬな！死ぬんじゃないっ！」

明久もかなり必死に康太の蘇生を手伝っていた。

この後、すぐに心臓マッサージをして康太を無事生還させた。

「紹介するね。この子は相沢綾菜ちゃんといって」

「こーちゃんの幼なじみなんだよお」

つぐみは天使の抱擁から、なんとか脱出すると少女のことを光一達に紹介していた。

「ムツリーニの？」

「うん んで、将来の夢はこーちゃんのお嫁さん」

光一が聞くと綾菜はニコニコと笑って言う。

どこか、ほんわか空気がながれる感じの彼女の一言に康太もあるいみブラツクリストにはいったとか。

「クラスはどこだっけ」

「Cクラスだよ？」

優羽ちゃんが首を傾げて聞くと綾菜は笑顔で答えた。  
多分、あちらの代表はかなり苦労してるだろう。



第23問(後書き)

感想と評価をお待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2837q/>

---

ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

2011年10月13日11時50分発行